

《  
後  
編  
》

《後編》には、第一次投稿締切り日とした  
平成十八年十月十日頃以後にお送り頂いた  
方々のご文章を収録させていただきました。

## 31 光に包まれて

奈良県五條市 山下 登代

「それではみなさん、こうありたい、こうなりたいと思う願いを心の中で強くお念じくたさい」と言われたかと思うと「この人達の罪を清めたまえ！」と先生は右腕をさつと上から振り下ろされた。

その瞬間、私の身体はモーレツな圧を受け、吹き飛ばされそうな衝撃を受けた。

それは新練成道場での榎本先生の祈りあいの神想観のときのことである。

私は前列、左端に座り祈ってもらおう側にいた。

その瞬間、急に胸に圧迫を感じ普通の呼吸が出来なくなった。どうなるんだろう……。私は怖かった。私の右に座っている男性の呼吸も急に荒くなった。その向こうに座っている女性はすすり泣きを始めた。

神想観が終わり席に戻った。祈る側にいる女性の数人は涙をぼろぼろ出していた。

私はしばらく呆然としていた。緊張で両肩がこわばり重苦しい感じがあった。

私はその後、帰路についた。

時間の経過と共に、両肩のこわばりは消えていき、それと同時に私の中の邪念はきれいに消え去った。

私が生長の家に入っていたのは、今から九年ほど前。

郵便受けに入っていた『白鳩』誌の中で紹介されていた『自己完成のために』と言う本を読んでみた

て、教文社から取り寄せた。そのなかの「認めたものが現れる」という一節に新鮮な感動を覚えた。そして生長の家に徐々に興味を持つようになった。

その年の十一月、私は初めて一人で宇治別格本山を訪問した。二十代の頃から一度はお寺で修行してみたいという漠然とした夢があった。そして何よりも気分転換をしたかった。その頃、子供のことで悶々としていた。

そしてそこでお会いして、強烈な印象を受けたのが榎本恵吾先生であった。

私は榎本先生の講話が大好きだった。しばらくして（数ヶ月して）先生は練成部を去り幽齋殿へ行ってしまわれた。

私は一般練成の七日目の夜に行われる先生の講義「実相なるもの」を拝聴したくて一泊二日で宇治に行った。

先生は講話の際、こちら（聞き手）の様子をよく見られていた。

私たちの反応を観ていた。

先生はぼそぼそと小声で話されているかと思うと、突然、急に大きな声で、わーっと話されるのであった。

先生は、時に天界の人でもあり……

また娑婆の人でもあった……。

あるときは、ぴよんと跳び上がり床をドーンと足でたたいた。

私はぐんぐん先生の講話に引き込まれていった。

喜びが、ふつふつと湧き出てきて

やがて、私たちの喜びは先生の喜びとなり

先生の喜びは私たちのものとなり

そして歓喜が、爆発した……

歓喜は、おおきな光の輪になり

私たちは、みんな、おおきな光に包まれた。

食堂での昼食後、先生はいつも同じ場所（入り口から左奥の方）に座り、ゆったりとくつろがれていた。先生ご自身で描かれるニコニコマークのようなお顔をしていた。

一言お礼を申したいという衝動にかられる時があったが、おくつろぎのところ、じゃまをしては失礼と遠慮させて頂いた。

今にして思えば、勇気を出してお礼を申し上げるべきだったと思う。

榎本先生、本当にありがとうございます。

「皆さん、神にお返ししなければ、なんて考えるのは神を冒読していますよ。神はそんなちっぽけなもんじゃないっ！」

「喜ぶことを遠慮してはいけません！」

「死ぬ気になって、プライドを、すべてを、捨てるのですっ！」

今も先生のお声が私の心に強くひびく。

## 32 榎本先生を偲んで

東京都新宿区 山野井 潤

榎本恵吾先生との出会いは、平成十三年九月の伝道練成会の時であった。

当時、悩みを抱えて参加した私は、榎本先生に個人指導をお願いした。そして

「なぜ、どこで私のことを知ったのか？」

と質問された時に、高校生のとき藤原敏之先生に会いたくて宇治の短期&写経練成会を受講し、その後榎本先生と藤原先生のご関係を知ったのがきっかけであったことをお話しし、

「私が子供の頃感じた、何とも懐かしい生長の家を、先生から感じました」

ということを申し上げたときに、先生が何とも嬉しそうな表情をされたのが印象的であった。

当時、悩みを抱えて練成会に参加したのであったが、その悩みも二回の伝道練成会と、その時に受けた榎本恵吾先生の個人指導により完全に解決していた。

月日は流れ、絶好調の状態も長くは続かずに問題が与えられた。こんな時、予定を立てて宇治本山に行くのが恒例であった。しかし、この時はかなり切羽詰まっていたため、いきなり榎本先生目当てに本山に電話をした。先生を電話口にお願したのは、この時が初めてだった。伝道練成の時に個人指導をお願いしたのは一年以上も前であったが、名前だけで先生が一瞬にして私のことを思い出して下さったのは本当

に嬉しかった。そして、直接お会いしてご指導いただくことになり、翌週の週末を利用して宇治へと向かった。それ以来、宇治に伺う頻度が高くなったこともあり、より親しくご指導をいただけるようになった。幽齋殿でお会いするたびに、独特のお元気な口調で「おう！ どうだね！」と声をかけていただけたようになつたのは、この時からである。

榎本先生が強調されていた言葉で大変印象的だったのは

「光明化運動をしないという罪はない！」

ということであった。

実際この部分で躓き、そして榎本先生の言葉で救われた人は多いのではないかと思う。

私は幼い頃、両親を機縁として生長の家の御教えに触れ、特に高校生の頃や大学生の前半までは青年会の組織で本格的に活動をしていた。しかし、数の運動に疑問を感じて活動そのものからは離れていったのであるが、生長の家の教えそのものは大切な糧であったので、そこから離れることは無かった。当時一緒に活動をしていた先輩や仲間たちの多くは、組織のみならず生長の家の教えそのものから去っていった。そういった人たちの大半は、私と同じ理由で、運動や強引なまでの行事への勧誘活動に嫌気がさしたのであると思う。実際、そのように話してくれた人もいた。教えからも離れてしまった方々に、榎本先生のこの一言を聞かせてあげられたらと、今更ながらに思うことがある。

また、常におっしゃっていたのは

「喜んどればいいんだよ！」

である。

榎本先生が「喜ぶ」という言葉を発するたびに、何か心の奥底から筆舌に尽くしがたい喜びを感じたのを、今でも思い出す。先生のおっしゃる「喜び」というのは、何か特別ということではなく、当たり前前に対する喜びなのである。

しかし、先生とお話していると、「当たり前前に対する喜び」こそ、いかなる現象が整う喜びと比較しても、超えることのできない喜びであることを、直感的には感じてきていた。

榎本先生の個人指導は、一貫して「實相一元」であった。

ここからは私の所感になってしまいが、實相が實相に対して實相を説く。悩みを持って相談に訪れるのも實相。そしてそれを指導するのも實相。他には類を見ないほどの徹底した實相直視であった。たいてい個人指導という講師が信者を指導する。導くものと迷えるものが存在すると考えられがちであるが、先生のご指導は他とは根本的に違った。不思議なくらい癖がない。構えなくて良い。とつても自然であった。

そんな経緯でようやく先生から親しくご指導をいただけるようになってきたが、平成十七年の二月以降、先生とお会いするのにどうしても予定が合わない時期があった。何度電話して日程を相談しても、先生のご都合が悪かったり、先生のご都合は良くて、他の人が来るので一緒ならば良いが、個人相談という形では難しいというようなことが続いた。

そんな時、「これから長い付き合いなんだから」（あせることはないという意味であろう）と電話で言っていた。

何度か電話をしていて、「五月にみんなで集まる機会がある」との事を伺っていたので、ゆつくりとはお話ができないのは覚悟でお邪魔した。その時は、先生と個人的にはほとんどお話はできなかったが、榎本先生を慕う多くの先輩方に出会い、そして会食をして大変楽しい時間を過ごすことができた。

しかし、この時が先生との今生の別れとなるなんて私は夢にも思わなかったし、誰もがそうは思わなかったであろう。

七月に会社の夏休みを利用し、宇治に行こうと思って七月四日（月）に電話で榎本先生のご都合を聞いた。七月十七日（日）～二十日（水）の三泊四日の間、練成会の受講も兼ねて先生にお会いすることにした。先生もほとんどの時間帯でご都合が良いとのことで大変嬉しかった。

しかし、喜んだのも束の間であった。七月十三日（水）の工作中、携帯に電話が入った。そのときは会議中であつたので出ることが出来なかつたが、夜帰宅してみると石田さんからの連絡であつたことがわかつた。石田さんに折り返しの電話をする直前にたまたま自分の携帯を見たら、そこには東京第一教区の青年会の方から、既に訃報の連絡メールが届いていた。事の次第を理解できないまま、石田さんに電話した。そこで事実であることを改めて認識した。動揺したまま葬儀の日時と場所を聞かされる。

夜もそれなりに遅い時間ではあつたが、会社に急遽私の夏休みの時期を変更してもらうように依頼し、翌朝宇治へと向かつた。

榎本先生とお話したのは、七月四日の会社の昼休みに携帯電話で、七月十七日にお会いする約束をしたのが最後となつてしまった。

現在は勤務場所が変わつたが、少し前までは電話をした場所の近くを通るたびに当時のことを思い出していた。

ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

### 33 慈愛に満ちあふれた榎本恵吾先生

奈良県天理市 竹本 意野

生長の家のみ教えに導かれ、宇治一般練成に参加させて頂きました折、

“やあ、よくいらつしやいました”

と満面の笑みと合掌でお迎えして下さいました、慈愛に満ち溢れた榎本恵吾先生……。

時を経て今、静かに目を閉じますと、瞼にあの満面の笑みと合掌のお姿の先生が、まばゆいまでに煌々たるみ光に包まれて……と言いましょいか、み光そのもののお姿と言いましょいか……言葉に表現しがたい光景が、ありありと瞼に浮かんでまいります。私たち誌友をやさしく導いて下さるお姿を拝することができました時、何とも言えない感無量の涙が頬をつたいます。

現世では、先生のお姿を拝する事がかなわない一抹の淋しさがありました。それもいつしか消え去り、高き霊界より常に、いつも、どこにいても、私達を見守り導いて下さっているという確信が得られるようになりました。

昨年（平成十八年）九月、なつかしい宇治一般練成に参加させて頂きました。

その時、練成の受付の玄関に一步足を踏み入れたその瞬間——夢か、幻か——あのなつかしい榎本恵吾先生のお姿を、ほんの一瞬、拝する事が叶いました。

唯々「ありがとうございます」と合掌する自分の姿に、フト気がつきました。

ありがたく、うれしく、なつかしく、夢中で素晴らしい練成を受講させて頂きました。

高き霊界よりご指導賜わります 榎本恵吾先生のみ心を、私たち誌友の心といたしまして、より精進してまいりたく決意いたします。

本当にありがとうございます。

再拝

## 34 『弟子像』と私

石川県金沢市 小塚 弘子

合掌 ありがとうございます。

毎朝神想観にて『私の中の榎本恵吾先生（前編）』を、涙でグシヨグシヨになりながら感動と共に読ませていただいておりますところ、私もぜひ『弟子像』を読ませていただきたくなり、ページをめくっております。

平成十六年夏、研修生の時、恵吾先生は「誰にも見せないでね!!」と、『弟子像』を私にくださいました。当時一人で『弟子像』を開かせていただいております。感じたことや、納得できたことなどを書いて、恵吾先生にお渡ししたこともあります。でも、そのときはまだ私にはむずかしかったのです。

それが今、どうしても読みたくなり、ページを開いております。ぐいぐい引き寄せられ、没頭しております。

恵吾先生は、私のおそばで「とうとう、読んでくれましたね!!」と、笑顔のやさしき、あたたかさで私を包んでくださっている気がいたします。

「恵吾先生!! 今は書いてあることがすごく、すごく分かるんです」と、お伝えしたい。

こんなことを書いてみると、心が涙でいっぱいになるんです。先生のあたたかい雰囲気にも包まれて、とても幸せになるんです。

先生、本当に、本当にありがとうございます!!

そんな気持ちがおみあげてまいります。

研修生の時は、ご本のこと「誰にもみせないでね」と言われていましたが、今は「この本で、とても救われています!」と、天国の先生にお伝えしたい。

本当に、本当にありがとうございます。

再拝

## 35 先生と私

京都市下京区 咲本 はる子

『光のある内に』の中に、高校受験を控えられていた先生が、一本のしおれきったおしろい花に、やかんで水をどんどん注ぎ込まれたら、翌朝にはその葉っぱは、水滴をさえ付ける程にまで生き返っていた。という内容のご文章がありますが、私はそこを讀むたびに、まるで自分のことの様に思われてなりません。

先生に出会うまでの私は、自分が生きていることに何の価値も見出せず、生きる目的も、希望も何もなく、時に流され、ただ何となく生きている……それだけの人生でありました。

そんな渴ききった私の人生に、先生はあの「おしろい花に水をやる」がごとく、毎日、毎日、真理の水をどんどん注ぎ込んで下さいました。私は、みるみるうちに自分が「神の子」であることの喜びに満たされてゆき、そのまま、ありのままの自分の尊さ、素晴らしさに歓喜いたしました。

現象の乏しさに、失望しか見出せなかった自己への価値感が、三六〇度転回し、「神の子」として私は生まれ変わることが出来ました。不完全な現象の「私」を一切観ず、唯々「生命」を観つづけ、賛嘆しつづけて下さったのでした。

三年間という時を、宇治別格本山の研修生から職員として、なおかつ先生と同部所に席を置かせて頂くという、この上ない有難いご縁を頂いて、渴ききっていた「私」は、水滴を付けるほどの、喜び溢れる「神の子」と化し、そして結婚させて頂くことができました。

結婚してからは、可愛い三人の子宝を次々と授かり、優しくして私の全てを受け止めてくれる夫との家庭生活は、幸福と喜びで一杯でした。

しかし、何か辛いこと悲しいことがあると、自分の信仰の足りなさを嘆き、先生から言われつづけてきた「喜んでいるだけでいいんだ」「そのまま喜びなさい」が出来ず、喜べない自分を苛むのでした。「そのまま喜ぶ」ということの重さ、深さがひしひしと身に染み入り、その苦しみの果てには、いつも「悟りたい」があるのでした。

「悟りたい」……悟っていないから喜べないのだ。先生の立つておられる「喜び」の世界に自分も行きたい……!!

悟りは「無い」と教えられながら、頭では納得していながら、心の底では「悟り」を追いかけていました。そして、「先生」を追いかけていました。

生きているだけで素晴らしい事と、喜んでいたかつての私は、時の流れと共に変化し、現象の明暗にいつしか心乱され、やはり「生きていることは辛い……」と思うようになっていました。

そんな矢先の、先生の突然の「死」……

子育てが終わり、人生に一段落ついたなら、いつの日か、先生と色々と話したい。そんな日が必ず来ると、何の疑いも無く信じきっていました。それは、全く愚かなことでした。「今、今、瞬間の今」の生命の喜びを語りつづけ、そして自ら生きつづけて来られた先生であったのに……。いつか……、そのうち……は無かったのでありました。

自分の薄っぺらで、いかげんな日常生活の信仰が露呈され、見事に粉碎されてしまった様な思いでした。

先生は全ての仕事を成し終え、さっさと霊界へ旅立って行かれました。

残された私には、先生の「死」を悲しんでいる間も許されなくらい、待つていたかの様に今までになり現象問題が次々と、押し寄せてきました。

先生と出会って以来、私は神の子と新生し、喜び悲しみも味わい、一進一退しながらも、自分の信仰は着実に積み重なり、生長していると確信し、自負さえしてきました。ところが、何年もかけ積み重ね、生長していたであろうはずの信仰が、この様々な問題で、一瞬にして根こそぎ、津波のごとくに立ちさらわれてしまったのでした。

何だったのだろうか……何をコツコツと私は積み重ねていたのだろうか……？

私の今までの全てを否定され、そして全てをかなぐり捨てられてしまった様な思いに押しやられてしまったのでした。

生まれて初めて味わう、どん底から湧き上がってくる「虚無感」というものが私の心に襲いかかってきました。

深い淵に追い込まれ、先生のビデオに救いを求めました。

繰り返し、繰り返し聞くうちに、段々答えが聞こえはじめました。

「外には何も無い！」

「内に全てがある！」

私がコツコツと積み重ねてきた信仰は、全て「外」であつたのでした。

あれほど「現象の無」「実相独在」を教えられながら、私は「現象」を相手にした信仰であつたのでした。

外には何も無いけれども、内には全てが在る。

内には、神が創り給うた完全な夫がいる、子供がいる、私がいる。

何も追いかけるものは無い、何も付け足すものは無い、積み重ねていく何物も無い。  
今、ここに、完全な全てが在る。

私の内で、答えが鳴り響いてきました。

この完全なる「内なる世界」のほかには、「喜び」も無ければ「安住の地」も無かったのでありました。  
先生はご講話の中で、青空太陽と雲の話をよくされましたが、その中で特に、

「このぐちゃぐちゃの雲（こころ）は、放っておいて！」

の所には、真底から魂の解放を得ていたにもかかわらず、自分のこの汚い雲を何とか消したい。きれいな雲を飛ばしたいという願望に、長い間とり憑かれていたのです。

全く愚かな弟子で、よくぞこんな私を黙って長い間見守り、そして祈り続けて下さったと、今さらに先生の愛の深さ、偉大さに感謝と敬愛の思いで一杯になるのです。

私は空を見るのが好きで、先生が亡くなってからは特に、空を見上げる回数が増えたように思います。

沈む夕焼けの空……燃えるような、真っ赤な太陽をとりまく雲は、実に美しくあらゆる色で、その太陽と雲は美しくコントラストされています。西の空は、見事な神の芸術として、そこに展開されています。

どの雲も美しく、どの色も美しく……

太陽の輝きは、あらゆる雲を美しく照り輝かしているのです。

そんな雄大な空を、感動と共に見上げていると、そのずーっと、ずーっと奥の方から、先生のあのいつもの笑顔が、ぽっかりと大きく浮かび上がってくるのです……。

## 36 思い出の尽きない榎本恵吾先生

奈良県大淀町 西本 惇子

平成四年二月末、主人が医師から「肺ガンです」と宣告されました。すぐ入院して検査、そして「手術しましょう」との言葉に、一瞬私は頭が真っ白になりました。

主人は即入院いたしました。

以前、胃ガンになり医師で一応治りましたが、このたびはガンの再発でした。

私は、「魂のふるさと宇治に行きたい。いや、行こう」と決意いたしました。そして三月の一般練成の日を、指折り数えて待ちました。背水の陣を布いて、宇治本山にまいりました。

早速、榎本恵吾先生に個人指導をお願いいたしました。先生はニコニコされて、

「『あなたは観世音菩薩だったんですね。肺を浄化させてくださったんですね。私の中に愛が、神があったことをわからせていただきました。喜ばせていただきます。うれしい自分だった！ ありがたい自分だった！ 尊い自分だった』と、自分の内を向いて、自分を喜ばなさい」と、教えてくださいました。

「ああ!! ただ喜んで、よろこんで、よろこばいいんや」

と、心の底から熱いものがぐつとこみ上げ、涙があふれてまいりました。

自責の念にさいなまれ、重くて暗かった私のからだだが、宙に浮くような感じで、とても軽くなりました。先生のご指導通りに、ひたすら祈り続けました。だんだん家族もよろこびと感謝の光が交叉してとても

明るい波動に満たされるようになりました。

その一カ月後、自壊作用が起こり、肺ガンはすっかり癒やされました。

あれから十五年、八十歳を過ぎました主人は、よるこんで生かされている人生であることを一筋に、今なお現役でがんばっております。

榎本先生に御指導いただきましたお蔭でございます。

榎本恵吾先生から生長の家の根本真理を拝聴させていただきました私は、神の子として新生させていただきました。

私の家は梨を栽培しておりますので、せめて宇治の研修生の方々に梨狩りを楽しんでいただくとうと、ほとんど毎年招待させていただきました。その中に榎本恵吾先生のお姿が何回もございました。

あるとき、重い病気をいくつも持って生まれた赤ちゃんの祖父母様が相談に來られました。ブルーシートの上に座られて梨を召し上がってくださっている先生に、思わず大胆にも、

「祈ってあげてくださいませんか」とお願いいたしました。

先生は笑顔でうなずかれて、研修生の人たちに『甘露の法雨』を誦おげよう」とおっしゃって先導してくださり、そのあと合掌して実相顕現を祈ってくださいました。

八月末の残暑のきびしい太陽が、色白い先生に容赦なくふりそそぎ、髪の毛が少し薄くなられた頂点が、日焼けで赤くなつて行きました。暑い中、汗を流されつつも、しばしも合掌をお解きになられませんでした。

その子はすっかり癒やされ、現在は幼稚園に元気で通っています。

あの梨園での光景が、鮮明に脳裏に焼きついております。感謝一杯でございます。

最後になりました梨狩りのとき、先生は和紙を丁寧に巻かれて私にプレゼントしてくださいまして、家の座敷で拝見させていただきました。

『眞性の人間』八

神人にして

神そのまゝの

姿なり

(ニコニコマーク入り)

謹写 恵吾

達筆な字でお書きくださっていて、瞬間、身の引き締まる思いがいたしました。次の瞬間、「掛軸にさせていただけよう」と思いました。

さっそく近鉄百貨店にお願いして、約一カ月後、出来上がってまいりました。

すぐ、掛軸を持って幽齋殿に上がり、榎本恵吾先生に見ていただきました。

ものすごく喜んでくださいました。

その時の様子を、どのように表現させていただいたらよいやら、形容詞が見つかりません。

十日ほど経ちましたら戴きに上がりますと申しまして、再度幽齋殿にまいりました。先生のお部屋に、實相軸と並べて掛けてくださっていました。先生は

「實相の御軸がかすんで見えるね」と申されました。そして、桐の箱の蓋の裏に、

「為 西本惇子様 平成十四年十一月十三日 榎本恵吾」

とお書きくださいました。また別の用紙に

「この掛軸にまつわるすべての人々の実相顕現と幸せを祈ります」

とお書きくださっています。先生のご著書『弟子像』、『はなびら 葩はなびら さんさん』も戴きました。

今は、世界中にただ一点のみのお掛軸をわが家の宝ものとして、大切に大切にお守りさせていただきます。

「実相独在」の核を終始お説きくださいました榎本恵吾先生。これからも、私たちをお導きください。本当にありがとうございます。

その後、榎本一子先生からDVDを頂戴いたしまして、繰り返し繰り返しお聞きさせていただきました。そのたび、救われております。また、恵吾先生が天界へ旅立たれます朝、お開きになっておられました『人生の扉を開く』のご本も戴きまして、常に私の鞆に入れ、少しの時間にも読ませていただいております。

思い出は尽きません。ありがとうございます。

合掌

## 37 「誕生」 そのままに

東京都青梅市 久都間 育代

平成十八年十二月十二日、私は夢の中でかつて榎本先生がお住まいになられていた宇治市三室戸みむろどにあるお宅を訪れました。三人の娘さんたちが、玄関先の階段を下りたところまで出て来てくださり、「男の子が生まれたよ」と知らせてくれました。

その三人の喜ばしい雰囲気を包み、周囲の家々や風景にとけ込むが如くして、榎本先生の姿は見えないのですが、在り在りとおられることを感じました。

十二月十五日午後二時過ぎ、末娘の妙子さんに「男児誕生」との知らせを受け、私も驚きました。事前の検診では女の子と聞いていましたので、ご一家の皆が驚き喜ばれたようでした。

翌十六日、輪読会の集いに参加いたしました。そして会場に向かう電車の中で『葩はなびらさんさん』の本を開いて読んでおりました。すると突然、あの十二日の夢の風景がそのままに浮かんできたのです。先生の在り在りとした雰囲気もそのまま残っていました。その風景の中に文字があり、文字だけがその風景の中から浮き出てきたようでした。忘れてはいけないと思い、急いで手帳に書き記しました。

「よろこび多き

光り 榮えよ

よろこび おおき ひかり さかえ  
 よ よろこび おおき ひかり さかえ  
 よここにうまれしいのちよ—みた  
 まさきはえたまえ—

よろこび多き  
 光り榮えよ  
 ここに生まれし  
 いのちよ  
 みたま幸え給え」

と。これが『誕生』の詞でした。

輪読会には参加された方々の清らかなよろこびの雰囲気がありました。先導した人の左隣から輪読してくださいと言われて私が一番で読みました。読み終えると同時にさつき電車で出てきた詞が、メロディーを伴って上から鳴り響きはじめました。それは終わるところを知らず、繰り返しまた繰り返し、ずっとその会が終わるまで鳴っていました。不思議なことに会が終わって道を歩いているときも、帰りの電車に乗ってもそれは鳴っていました。

翌日、お昼すぎに横になろうと二十分ほど眠りました。そして目が覚めたのが午後二時。目覚めと同時にまた鳴りはじめました。

「今、書き留めておかない」と思いピアノで音を拾いました。ひとつひとつを確かめるようにして、音を音符に書き記しました。

私がこの曲を通して感じたことは、先生は妙子さんの赤ちゃん誕生を共に喜んでおられる。また奥様や娘さんたちご夫婦、それからお孫さんたち、そして先生にご縁をいただいた一人一人の、「そのままの尊さ」を、深い本当に深い祈りの内に広大無辺にどこまでも観つめ、観護つてくださっている。そのことに生きておられる間、万分の一も気づいていたのだろうか。

先生の深い祈りの内に伸びやかに泳がせて頂いていたのだ。住む世界が替わろうとも変わりなく、祈り祝福してくださっている。「澄み切り」と「無我」なる眼で今も観つめてくださっている。

まるい大きな月を見ても先生を想い、多摩川の上流で紅葉を愛でながら主人と話している時もそこに先生が共に居てくださる。高き霊界に昇られた後もまるで千手観世音菩薩のようどこどこまでも助けてくださる。お導きを折に触れ、夕焼けの美しさや雲の流れにさえ感じます。

「私は自然そのものである。自然は私そのものである。」

という祈りの言葉は「私は無いんですよ」という先生の言葉のように、語りかけてくれます。

合掌

## 38 『誕生』の曲の響きと共に……

大阪府枚方市 福場 江三子

合掌 有難うございます。

榎本恵吾先生は生前、私のことを勿体無くも「僕の専属のピアニスト」とおっしゃって下さり、演奏をとても喜んで下さいました。私も、先生がお喜びになるのが嬉しくて、平成五年からご昇天されるまで、数えきれない数の先生の曲を演奏させて頂きました。

先生とのご縁と、光りに包まれた至福の時を頂いた事は、感謝してもし尽くせません。

このたび、「源大ちゃん」(四女妙子さんの長男)誕生のほとばしる喜びを機縁とし、京都間育代さんを媒介として、感動的な経緯でこの世に天下った「誕生」の曲。ピアノで弾かせて頂きました。

まぎれもなく榎本恵吾先生そのものの響きです。懐かしく、懐かしく、恵吾先生のお姿こそ見えませんが、確かな先生の存在を全身で感じ、感動の涙が止まりませんでした。先生がお喜びであらうメロディの音色。メロディを美しくハーモニーさせる和音の響き。アルペジオの流れ。曲のテンポ。美しく流れ出でるそのままと大切に演奏いたしました。

生前、恵吾先生は、新しい曲の演奏を聴かれたあと、私が「いかがですか？」とお尋ねしますと、決まって「素晴らしい！もんくなし！満点！」と満面の笑みでおっしゃいました。今回の「誕生」の曲にも、その様なお姿とお声が聞こえ、先生のお喜びの様子音が音の響きと共に大きくひろがります。

「僕の曲は、すべて祈りです。」と、生前の先生のお言葉。

高き霊界から常に私達を深い愛と祈りで祝福、賛嘆し、見守って下さっている尊い榎本恵吾先生のご愛念が、「誕生」の曲を通して魂に響きます。

先生、ありがとうございます。

「僕はいつもそばにいるよ。悲しむことは無いよ。『今』を喜びなさい！」

み光りの中にまします先生の合掌されているお姿とお声が、幾重にも広がります。

「誕生」の曲の響きと共に……。

「源大ちゃん」の健やかなご成長をお祈りいたします。 感謝 合掌

## 39 榎本恵吾先生への尽きない思いと感謝

“音の響きに包まれて・・・”

大阪府枚方市 福場 江三子

合掌 ありがとうございます。

平成五年四月、実家の両親が広島県から宇治の一般練成を受けに来ました。

練成を受けている母から、枚方市に住む私に電話がありました。

「レッスンや家事で忙しいと思うけど、榎本恵吾先生があなたに会って話を聞きたいとおっしゃっているので、出来るだけ早く宇治まで来てくれない？」と。

何を聞かれるのかしら？ と少し気にしながらも、大好きな両親に会えるのが嬉しくて、レッスンをやりくりし、両親への差し入れに、手料理をお重に詰めて、車を走らせました。当時（平成五年頃）の私が抱いていた榎本恵吾先生の印象は、黒板へ「ニコニコ」を大きく書かれる先生。講話中、演壇で飛び上がってはびつくりさせられる先生。生長の家の本部講師で偉い人。ちよつと暗いイメージでとつきにくいなー。という印象でした。（練成での聖歌練習では、和やかに聖歌指導され楽しく愉快な一面を見せて下さいました。）

お会いした時、今までの印象は覆されました。優しい雰囲気の中に、少し恐縮ぎみに私を迎え入れて下さいました。

私の生い立ち、母校の「桐朋学園」の事や、恩師であるピアノリスト故安川加寿子先生の事。「桐朋学園」出身で活躍している音楽家、演奏家の事等を、時間の経つのも忘れていろいろと聞かれました。母を介してまで「会って話を聞きたい」とおっしゃった事がうなずけるほどに……。榎本恵吾先生が飛田給におられた頃、同じ沿線の仙川にある「桐朋学園」に通学する、楽器や楽譜を抱えた音楽学生を見ておられ、音楽を愛される先生は学校や、学生に興味をお持ちだったのでしょうか。

帰り際に、大きく真つ黒にぬられた音符で埋まっている大判の楽譜本（光りのある内に）を気恥ずかしそうに渡されました。その楽譜を手にした時、不思議な衝撃を受けました。それは厳粛で崇高なものでした。今まで沢山の楽譜に接して来ましたが、手にしただけでこのような感じを受けた事はまったくありませんでした。「これってなに？」と驚きでドキツ！とした事は今でも鮮明に覚えています。その時から「実相世界」「久遠の今」に立たれ、光明を放っておられる先生に、私の魂はぐんぐん惹き込まれて行きました。手書きの五線譜に書かれた、大きな音符をさして、「この中にすべてのすべてがある！」「音符を書いていいんだ！」等々。今までに聞いたことのない言葉を確信をもって、光輝いて、喜びいっぱいでおっしゃる先生に、私は仰天してしまいました。

音楽に関しても、家庭生活においても、順風満帆で幸せな喜びの生活をしていた私に、何かが不思議な温かさを持って、ムクムクと頭をもちあげて来ました。このムクムクの本源は何だろう！「そうだ！榎本恵吾先生だ！」

私はこの時、榎本恵吾先生の中に飛び込んでしまいました。それからは先生の「講話」を受講しに、又先生の作品をピアノで弾かせて頂きに、家から宇治まで十九キロの道程を車でせつせと通い始めました。それには家族の協力もありました。たまたま休日で在宅の主人は、私が留守をすると不自由でしように「榎本恵吾先生は神様だ。ピアノを弾く事が先生のお役に立つことであれば、これほど喜ばしい事はないよ。」と嬉々として車で出かける私を見送って下さいました。十二年もの間、一度も車のトラブル等もなく、恙無く過ごせたのも大いなるものゆると、家族の愛念、祈りがあつたればこそと思わずにはいられません。ありがとうございます。

ムクムクの本源を体得するのに時間はかかりませんでした。

「実相独在」「光一元」の世界のみを見つめ、そこに座していらつしやる先生。すべてが「光り」であられる先生。その光りの広がりの中に本源を感じた時は飛び上がらんばかりの喜びでした。

先生のご愛念とお導きの中で曲を弾かせて頂き、私は魂の大きな喜び、自分の使命、今までの音楽人生の中では知り得なかつた諸々の発見、音楽をする至福の喜びをより深めました。

子供達も成人し、レッスンの生徒さんもそれぞれ手を離れ、自由な時間が持てる年齢、環境になりました。これからの時間は、先生が「僕の専属のピアニスト」と、満面の笑顔でおっしゃるお言葉を感謝でお受けし、存分に、先生がお喜びになる音を奏でさせて頂こう！ また、そのお役に恥じないよう、演奏も究めていこう！ と喜び一杯で思つた事でした。

長い間、先生の作品をピアノで演奏し、録音したテープを、先生とごく身近な人達だけで聴いて喜んで

いましたが、周囲の皆様のご愛念で、次々作品集が出来、MD、CDへの収録と、嬉しい展開となりました。

大講堂での録音中、音の響きが、私が鍵盤に指を触れる前にもう鳴り響いているのを感じ驚愕しました。ふと横に座っていらつしやる先生に目をやると、合掌のお姿で静かに聴いていらつしやいました。まさにそこは実相世界、光一元の世界。私が弾くのではなく、音符の中から喜びが溢れ、光り（音）がほとばしり出、先生を通して響いているのを体感し、感動しました。神国から榎本恵吾先生を通して天下った響き。それが曲集「はじめのはじめ」「はじめの光り」等々。先生のすべての作品です。尊敬してやまない榎本恵吾先生の下、聖地での演奏は神の祝福に包まれこの上ない幸いを思い感謝で一杯です。

収録には、当時宇治別格本山で奉職されていた現本部講師・久都間繁様の多大のご尽力を頂きました。ありがとうございます。

先生も、久都間様の存在をとてもお喜びでした。

榎本恵吾先生の中には、練習がありません。すべて完璧。もんくなし。満点——なのです。「神想観」にも、ピアノの演奏にも。「響き出るそのままが尊くてありがたくて、喜ぶのが忙しくて、批評する暇などない……。」と。常にすべての物や事を押んでいらつしやる先生。私が演奏の感想を求めると、いつも「すばらしい！ もんくなし！ 満点！」のお言葉が返ってきました。先生は「喜びあじわう事の天才」でもいらつしやいました。

先生は、あふれ出る曲をどんどん楽譜に現わされました。先生の情熱には圧倒されるものがありました。少しでも早く響かせてほしい、との思いがFAXに託され、毎週月曜日の早朝に届くようになったのは、

平成十三年頃からでしょうか。

幼子のように純粹に、一途に、ご自分の書かれた音符が響くのを待ち望まれる先生に、私はFAXで楽譜が届くと、すぐにピアノで弾いて、カセットテープやMDに録音し、車を走らせてお届けしたり、郵便でお送りしました。今、思うと、忙しくとも光に満ち溢れた至福の時でした。先生は、一度もお休みもなくお送り下さいました。出講でお出かけの時は出講先から。どうしても送れない時には日にちをずらせてでも、お手紙と真理の言葉を添えて。ご昇天の前日頂いたのが最後のお便りになりました。大切に納められた尊いFAX便は、今では我が家の宝物です。

「僕にはやりたい事が一杯あって、百歳まで生きても、し終えない。」

「本部講師はたくさんいらっしやるけれど、僕ほど幸せな本部講師はいないと思う……。最近つくづく、そう思うようになりました。」と、晩年の恵吾先生のお言葉です。

しみじみと、おっしゃっていました。

榎本恵吾先生は一貫して、命がけで「実相独在」を伝え続け、貫かれました。ご家庭にあつては、素晴らしい一子奥様と喜びの家庭信仰を生きられました。お父様を敬愛される四人のお嬢様ご夫妻、可愛いお孫さん達に囲まれ、幸せな時をお過ごしになりました。講師としては多くの愛弟子から尊敬され、慕われ、たくさんの方の信徒をお救いになりました。多くの人を驚嘆させる素晴らしい多種の作品（論文・絵画・書・音楽・本……）も、よろこびの中で沢山制作されました。同胞の岡正章先生のご存在も素晴らしいですね。岡先生のご尽力でHP「榎本恵吾記念館」が立ち上げられました。恵吾先生の講話、多種の作品が生き生きと生き続けられ、多くの人の救いとなっています。

「こんなにしてもらってありがたい事だねー」と、満面の笑みの恵吾先生のお姿が見えるようです。

谷口雅春大聖師のみ教えの神髄を、命がけで伝え続けられた榎本恵吾先生。

「久遠の今」を生き抜かれた榎本恵吾先生。

先生のご生涯は、「素晴らしい！ もんくなし！ 満点！」です。

榎本恵吾先生の在りし日を偲び、万感胸に迫り感謝の涙が頬を伝います。

先生、ありがとうございます。心からの感謝を捧げます。

今生で榎本恵吾先生にご縁を頂けた事は何と幸運であつた事か……！

感謝しても感謝しても、し尽くせません。

感謝 合掌

(二〇〇七年 三月二十一日 記)

## 40 出せなかつた感想文

琉球 北 淳すなお

出せなかつた感想文を今、未熟で恥ずかしいまま、先生のご霊前に捧げたいと思う。

生前、榎本先生は私にとって雲の上の人で、そこは別世界であり、龍宮城だった。

『親に逢いては親を殺し、師に逢いては師を殺し、神に逢いて神と共に生きる。』

榎本先生にめぐり会い、とてつもない喜びに包まれたと同時に、始めからセットで渡された言葉……。深く深く釘を刺された気がした。

その後めぐり会った心理学の師の口から、「三歩下がって師の影を踏まず」（どんなに偉大な師に出会っても、陰を踏まないぐらいの距離を保ちなさい。さもないと自分の足で歩けなくなる）という言葉を受け取ったとき、榎本先生の顔が浮かんだ。

「神様、そんなに釘を刺さないで下さい。私だってもっと甘えたい」と思いつつ、やはり心に深く刻んだ。「自分の足で歩く。」これが私の課題なのだと思った。

二十歳のころ、初めて宇治での練成会に単身参加した私は、生長の家との決別を心に決めていた。祖母の代から生長の家だったが、私にとってそれは喜びではなく、幸せになるための矯正具でしかなかった。

自分の中に憎しみや汚い感情が生まれるたびに、「こんな思いを持つていては幸せになれない」と、懸命に矯正する。自分の経験ではないのに、答えを知っている人が、人を裁いたり自分を裁いたり、いつしか自分の中にもそんなものが巣食っていることに気が付き、そんな冷たい信仰が苦しく、愚かでも暖かいものに憧れるようになった。それでも、完全さや、真の幸福に対する執着があり、妥協出来ずにもがいていた。

二十歳になったころ、「もうやめよう」と思った。それまでずっと矯正してきて苦しかった、でもいつまでたっても平行線で、見張られなければいけない自分——自然に一致して生きられる人は幸せだけれど、私はそうではないらしい。現にこんなに苦しいじゃないか。これからもずっとこんな矯正具をつけて生きたいのか。もう幸せになるのはあきらめよう、人から後ろ指をさされようと、不幸で同情される人生になろうと、せめて自分だけは全面的に自分を認めてあげよう、どんなに醜い自分でも本当の自分にぴったりに寄り添って生きていこう。それがわたしの幸せだ——と思った。

そんな時、母に勧められるまま、十日間の練成に参加し、生まれて初めて、矯正具を外して自由になった私は、宇治の地でのんびり気ままに過ごそうと思っていた。

見たいものを見、聞きたいことだけ聞き、食べたいときに食べ、眠たいときに眠る。おかしいほど従順に本能に従う自分を楽しんでいた。そんな中で突然、榎本先生の講話がはじまった。

人生初のゆるみモードに浸っていた私は、先生の講話を一言も聞くことなく講堂の一番後ろの壁にもたれ、足を伸ばして熟睡していた。講話が終わり、拍手で目を覚ましたその瞬間、「うわー、今の話、聞きたかったあー！ 眠っていたなんて一生の不覚!!」という感情が、お腹の底から湧いてきた。まだ先生のことすら知らなかったし、実際に一言も聞いていないのに。

これまで経験したことのない、不思議な感覚だった。

あわてて予定表を見に行き、それからの十日間、すべての榎本先生の講話を、かぶりつきで受けた。当

時は毎日朝、昼、晩と日に三回程も榎本先生の講話の時間があつた！ それもどうしても、何が何でも、今渡したい、受け取らせたいという先生の情熱が、これでもか、これでもか、と熱く熱く、降り注がれ、それを全身全霊で受けることができた。私のための特別の個人授業を受けている様な気さきでいた。

「偶然」などとは言えない、黄金の時間だつた。

言葉にするのは難しいけれど、永い間求め続けた唯一のものに出会い、やっと魂が入つたような気がした。それから、嬉しくて嬉しくて、本当に身体を押さえていないと、喜びがお腹の底から飛び出してしまうようで、この世にこんな喜びがあつたのかと驚いた。

はじめて榎本先生にふれた練成を終える夜、長い感想文を書いた。

一点の汚れも無い、一度も傷ついたことも、憎んだこともない、完全な自分に出会えたこと。「実相円満完全」の意味を初めて感じたこと。無条件の喜びに溢れんばかりに満たされたこと。と同時に、その後練成会が、「闇の研究」の様に思えて、辛く苦しく感じられたこと。

『罪を右顧左眊すること勿れ。迷いを右顧左眊すること勿れ。病を右顧左眊すること勿れ。汝ら百尺竿頭より一步飛ぶべし』——闇にとらわれて光を忘れるな、との真理の言葉そのままの生き方が可能であること。その生き方を貫いてくたさることへの、言い表せない感謝。

感激のままに綴る感想文が十数枚に及んでも書ききれず、結局そのまま、出せずに持ち帰ってしまった。完成させて送ろうと思ひながら、そのままになつてしまい、本当に自分の不精を悔やんでいる。

このころ、よく宇治に通つた。先生の、熱気に顔を真っ赤にして怒つた様な姿が懐かしい。

後年、先生の講話は穏やかに、そして「私の話は聴いたらすぐに忘れてください。」なんて云われる様

になったが、その言葉にしみじみと深いものを感じていた。それは、どんなにノートにメモしても書き留められない、どんなに時が経っても、言葉が消えてしまっても絶対に消えないものだった。

先生は、「自分が受け取ったと思ったものを百万倍、無限倍にしても、本当に受けたものの百万分の一、無限分の一なんだ」っていつか言われたけど、本当にそれほど尊いものだと感じている。

榎本先生にチラリと見せていただいたその片鱗に懂れて、焦がれて、及ばずながら自分もそのように生きたい、自分の足で歩いて少しでもそばに行きたい、いつか自分でその景色を見てみたいと、遠い遠い道に思えても、目指さずにはおられない。絶対にあきらめられない。そんな思いが刻印された。

そんなにも求めているながら、先生と直接お話をしたことはほとんどなかった。先生のそばに行くと、講話をうかがったり、神観に同席させていたりするだけで、魂が満足してしまった。行き詰ってもがいている時でも、先生の前に出ると、祝福に満ちたその空気に満たされて、言葉を失くしてしまった。ただただ光を吸い込もうと、深呼吸するのみだった。

いつも現実には溺れていた私の束の間の息継ぎ。そこは文字通り龍宮城だった。

そんな中、私が一番榎本先生に接近できたのは、まだ娘が一歳くらいの頃、生まれつき腎臓の障害があり病状もめどが立たず暗中模索のなか、宇治での練成中に会った大阪の講師の言葉がきっかけだった。その方は私と子供の顔を見るなり、「この子はあなたの魂を向上させる観世音菩薩。もし、この病気が治っても次々というんな問題が起こるから覚悟しときなさい」と言われた。私は悲しくなって、「わが子を使つて魂なんか向上させたくない！ 私は、ぼちぼち幸せ、ぼちぼち健康がいいんです。」と無力な反論をしたが、そのショックは大きく私は深く傷つき、その恐怖心を消し去ろうともがいた。このときばかり

はいつにもなく榎本先生にかじりついた。先生の「光明のみ」に完全に包まれたくて。

友人たちの計らいにより、この時一度だけ個人面談の機会を得たが、先生の前に出ると、やはり覚束ない感謝の言葉以外は見つからなかった。ただ自然に流れる温かい涙とともに榎本先生を満喫した。

引き続き参加した伝道練成。榎本先生が同行してくださった。私は榎本先生と同じ時代に生まれ、こうしてめぐり逢えた上に大切なものを伝えていただいた。先生と同じバスに乗って同じ空気を吸っていることが、ただただ幸せで涙が溢れて止まらなかった。その喜びの大きさに、いつの間にか現実の問題は遠く霞んでしまっていた。

バスが目的地に着き、二、三人のグループに分かれるとき、私は一生のお願いとばかりに「先生と一緒にまわらせてください」と榎本先生に直訴した。普段の自分からは考えられない行動で、その間も涙はぼろぼろと流れ続けており、先生は怪訝な顔をしながらも、一緒に連れて行って下さった。ある家の前で並んで聖經をあげ神想観をしている間、留守中に榎本先生にこうして祈ってもらえるこの家の方は、なんて幸せなんだろう。今この家の瓦一枚一枚、庭の葉っぱ一枚一枚が、喜んでキラキラしているに違いない。そして何より、私が今この場で一緒にいる幸せに涙が溢れて止らない。その時間がどれだけ私にとって尊い、得難い時であるかを全身全霊で感じていた。まるでイエスの傍にいる使徒のような気持ちだった。

道場に着くとすぐ、先生が練成部の事務所から小さな直筆の色紙を持ってきて手渡してくださった。忘れられないこの日の思い出と共に、私の大切な宝物になった。この経験を作ってくれたすべての出来事に心の底から感謝している。

先生が祈願部に行かれてからは、講話の機会も少なくなり、さびしい思いもあったが、幽斎殿での神想

観に娘とともに参加させていただくことが、私の宇治訪問の目的となった。

そこでも、「先生こんにちは」と、挨拶をするだけで精一杯だった。

以前、先生の講話を浴びるほど聴かせていただいた幸運を噛みしめながら、その場の“空気がどんなに祝福に満ちてキラキラしているだろう……この空気を娘と共にパクパクできるだけで、幸せだなあ……”なんて思っていた。できの悪い母だけれど、これだけは、私が娘にしてあげることが出来たと誇りに思いつつ。そして、娘もいつか、私と同じものを、榎本先生から受け取るだろうな——と思っていた。いつかちゃんと自分で歩ける自覚が出来たら、もう少しおそばにいつて、弟子入りしたい……などと夢見ていた。

○

宇治にいる親友、鶉飼恭子・遠藤純子、二人からの知らせで、榎本先生の突然の訃報にふれ、この夢は、はかなく碎けた。もつとずうずうしく押しかけたかった。

もうお会いできない寂しさは、まだ実感できなかった。一番大切な師とのこの世の最後のお別れをするため、娘と二人で福岡から深夜バスに乗った。

「娘に渡したい唯一のもの。私にそれを伝えることが出来るだろうか？ いや、娘は既に受け取っている。」と信じつつ、生まれる前からこれまで一緒に通った榎本先生への道を辿った。告別式の日、娘の十歳の誕生日だった。悲しいけれど、二人でそこに同席させていただけることが有難かった。告別式の席では、「これを機に弟子にしていたきます！」と心の中で宣言した。もう「神と共に生きる」の神の域に榎本先生が逝かれたから。

最後にみんなで歌った堅信歌の後、『バンザイ！』と叫びたかった。

榎本先生と出会ってしまつてから十五年あまり、いろんな事があつた。魂の喜びを知りながらも、私は決して順風満帆にキラキラして生きてきてはいない。先生にいただいた大きな喜びと自由を胸に生きたつもりで、問題を起こしたり、人を傷つけ、自分も傷つけた。突き動かされるままに生きて、大きな挫折に叩きのめされたり、自分を信頼できなくなつたり、自分の未熟さを嘔みしめたり。それはまるで小さな蛙がいきなり大海に出てしまつた様だつた。

本当の自分を求め続け、次々に出てくる「まがい物」の自分を捨てるため、どん底を這いずり回つていたように思う。こんな自分では到底弟子入りできないと、情けなく悲しかった。それでもやはり、同じ山に登りたいと必死で登山口を探していた。

私が身を切るようにして捨ててきたものの中には、宗教がらみ、家族がらみのものが多い。

冷たく血の通わない言葉や信仰には、はつきりと嫌悪感を感じるし、当然と思つていた概念・真理と信じていたものの底にも闇を感じ、足元がふらつくことがある。

そんな時いつも、榎本先生の姿が浮かび、温かい愛と喜びに包まれる。

その人の生きる姿、その人と接して生まれる感情からしか、私は知ることができなかった。

『その人は偉大な師であり、私は間違いなくその人の弟子である。』

告別式の後、一子先生の御講話を聞いて、榎本先生がどんなに強い覚悟でその生き方を貫いて下さつたのかを、改めて強く強く感じ、これまでの感激・感謝をちゃんと先生に伝えきれなかつたことが改めて悔やまれた。

榎本先生、一子先生のお話の中にたくさん出てきた、ご夫婦の、ご家族の暖かい愛情の、惜しみない表現がとても眩しく、遠巻きに見ていた私だった。

本当はもともとと、娘のように榎本先生に甘えたかった。いろんな疑問も直接投げかけたかった。二日酔いになるまで一緒にお酒を飲んでみたかった。美味しいお茶を淹れて差し上げたかった。先生のような人は、もういない。とてつもなく淋しい。いつも求めている。

あんな喜びをまた感じる事ができるだろうか。

「師に逢いて 師を殺し……」

今となつてはこの言葉と、理屈っぽい私の受け止め方が心底恨めしい。強がりとやせ我慢ばかりで悔やみきれない後悔が噴き出す。榎本先生にめぐり会えた喜びが大きすぎて、その姿が眩しすぎて、身に余るほどのものを頂き満たされ、それ以上に求めるものは何も無いなど思っていた。幼子の如く駆け寄りたい気持ちに素直になれず、ことあるごとにブレーキをかけてしまった。本当は影を踏むほどにびつたりくつついて学びたかった。はらわれてもかじり付く程に自分をさらけ出して、門前に座り込んででも教えを請うべきだった。それなのに、自分の方から距離を置いてきた悔いは、私の中に一生残る。

唯一の最愛の師に出会いながら、何を迷っていたのか、それより大切なことなどなかったはずなのに。それは私の未熟さと、住んでいる世界のあまりの次元の違いに、自分の現実に戻れなくなる不安だったかもしれない。黄金の時間は永いようで短く、無情にも確実に自立の瞬間はやってくる。玉手箱を開けて白髪のお婆さんになったって全然構わなかった。もし今の私が浦島太郎なら、日々その幸せを噛みしめながら、龍宮城で暮らすことを選ぶだろう。

先生が亡くなってからずっと、私はこの文章を書き続けている。

何度も書き直し、感謝と喜びしかないと思っていた自分の心の深みに、こんなにも大きな悔いと貪欲な欲求があったことを、今になって思い知った。私はこれからもずっと、心の中の榎本先生に自分をさらけ出し、問いかけ、弟子としてその教えを乞い続ける――。(三月八日)

\*\*\*\*\*

上記の投稿文を出した後すぐ、神々の島と言われている久高島（沖縄県）に行きました。その日は雲が重く太陽は見えなくてもきれいな雲が見られるかな？と榎本先生を思いながら朝日を待っていると、つかの間ですが、金色の竜が現れ、全身全霊で先生を感じ、こんなにも喜んでくださり、ここまですべて、そしていつも導いてくださっていることを、はつきりと自覚させて頂きました。

写真を添付させていただきます。(三月二十二日)



## 41 谷口雅春先生の音を劣化させず…

京都府城陽市 山岡 万里子

合掌 ありがとうございます。

私は、あるご縁から、先生の創られた曲を編曲させていただく機会に恵まれました。

先生の創られたメロディーをシンセサイザーで編曲して、いつもテープをお渡ししていたのですが、はじめの頃はまだまだ未熟な編曲でした。途中、何度もひどいスランプに陥り、長い間お渡し出来ない事もあり、忘れた頃にやっと出来て、お持ちした事もありましたが、いつもいつも心から喜んで下さって、賛嘆して下さいました。

ある時、あまりにひどい出来のものがあり、どうしても自分で納得がいかに、もう一度創り直して行った事があったのですが、その時にも先生は、「いやあ、前に創った方も、ちゃんと先にもらつといてよかったですよ。二つ創ってもらうのもまたいいですねえ。」

とおっしゃって下さった時には、私の方が逆に驚いたくらいでした。曲の出来の上手、下手にかかわらず、どんなものでも本人の個性・独創性というものを表現する事を、とても喜んで下さいました。

テープでずっと曲を創り続けてゆき、曲もある程度集まったので、ミニディスク（MD）にまとめて曲を録音し、先生にお渡しいたしました。MDというものは何度きいてもテープのように伸びて巻きついたりしないし、音が劣化しないという利点があるので、これからもずっと同じ音で先生に聴いていただける、



人間同士だけではなく、空と海も、山と川も、草と木もすべて一切のものが祈り合いの神想観をしているんだ——という事に、忽然と気づきました。

ああ、だから、榎本先生はどのページにも、あの、観音様が祈り合っている姿しか描かれなかったのだ。もう、先生は深い深い悟りを得ていらっしやるから、あの絵しか描きようがなかったのだ——と思いました。

すべてのページに描かれている観音様の祈り合う姿、あれがすべての世界の、宇宙の本当の姿なのだ——と、先生はあの絵を通して教えて下さっているのだ、と思いました。

何かに行きづまったり、心が迷い出した時は、いつもあの絵を見えています。

先生からいただいたものは、数え切れない程あります。曲を編曲させていただいた事も、今自分がしている音楽の勉強の大きな基礎となりました。

今も、先生への感謝の気持ちでいっぱいです。いつも、先生のおっしゃった事、お伝え下さった真理をしつかりと受けとめ、また、神の子の自分を、魂の底から喜ぶ毎日を過ごしてゆきたいです。

榎本先生、本当にありがとうございます。

再拝

## 42 CDをお送りします

京都府城陽市 山岡 万里子

合掌 ありがとうございます。

「谷口雅春先生の音を劣化させず…」の原稿をのせてくださって、ありがとうございます。  
私の演奏させていただいた曲集のCDが出来上がりましたので、お送りさせていただきます。一枚に入りきれなかったので、二枚組となりました。内容は、

「曲集1」：「日はやさしく」（一九九四年一月～初夏・「A・O・U・E・I」（一九九五年夏～一九九七年八月）

「曲集2」：「はじめのはじめ」第一〇曲まで（二〇〇一年冬～二〇〇五年七月）

です。上記の（ ）内は、この曲を創らせて頂いた頃のだいたいの年代ですが、それを全部まとめてM Dにするため、一九九九年十二月に再び創り直しました。

シンセサイザーで曲を創って行く場合、もともになるデータさえ残っていれば、いくらでも音を増やしたり削ったりすることが可能なので、曲集1に入っているものは、後に大幅に創り直しをさせていただきます

した。榎本先生は、一つの音を変えただけでも、いつもすぐに「変わりましたよね」と気付かれています。その耳の良さにはいつも、大変驚かされていたことを、今も懐かしく思い出します。

前の原稿にも書かせて頂いたように、どの曲をお渡しした時も、榎本先生は大変喜んで下さったのですが、その中でも特に喜んで下さった曲が、何曲かあります。曲集1の「A・O・U・E・I」一七番の「祈り合い」という曲を、とても気に入って下さったように思います。

ある時、ふと、このようにおっしゃって下さったことがありました。

「私は毎年クリスマスには研修生の人といっしょに賛美歌を歌っていたのだけれど、この『祈り合い』の曲がどんどんひろがって発展して行くのをきいていたら、『祈り』というものは敬虔にするものだと思っていたけれど、そうではなく、もっと、どんどん喜びが広がって行くものかと思ひまして……もしもイエスがおられたら、賛美歌を歌うよりも、招神歌を歌ったり、『イユーツ』と気合いを入れたり……するんじゃないかと思ひましてね。だから、あえて毎年クリスマスに賛美歌を歌う必要もないかな……という気がしてきて、今年のクリスマスには歌わなかったんですよ。」

と、このようにおっしゃったことがありました。先生は、何かをお感じになられたのかと思います。

「A・O・U・E・I」の最後、二三番の「父母」は、あえてメロディーの形を変化させて、三通りの曲想にしてみました。「一回目がバツハ風、二回目がモーツァルト風、三回目がショパン風……」というように創らせて頂きました」と先生にお手紙を添えてテープをお渡しすると、とても喜んで下さいました。「最後の曲にふさわしい、いいのが出来ましたね」……というようなことをおっしゃって下さったように覚え

ています。なんでも、京都から福井県にご用がおありになって車で向かわれる間、数時間、車の中でこの曲を聴き続けて下さったらしいです。やはり、一つのメロディーが次々に変化して、どんどん形を変えて発展して行くことが、先生はともお好きだったのだと思います。

そして、「はじめのはじめ」八曲目の「うたいて生くるよ」も、手拍子やリズムがいろいろ鳴っているのが、とても楽しくてよいです、と喜んで下さいました。

他にも、リズムをいろいろつけて、明るく、にぎやかにアレンジすることも、先生はいつも、とても喜んで下さいました。喜んで下さる先生から、私もたくさんの喜びを頂き、自分の中でちぢこまっていたいのちを、どんどん、ぐいぐいと引っぱり出してもらったように思います。

いいアイデアが思い浮かばず、なかなか創ることが出来ず先生を長くお待たせしてしまった事もよくありましたが、今思い出してみれば、ただただありがたく、懐かしく、感謝といのちの喜びでいっぱい、創作の日々でした。

私自身、この曲を一つずつ編曲させて頂くごとに、いのちをどんどん引き出して頂き、同時にたくさんの音楽の勉強もさせて頂き、先生からたくさんの喜びを頂いたように、ホームページでまたこの曲を聴かれた方が喜んで下さったら、本当に何よりの幸いです。

ありがとうございます。

## 43 榎本先生のこと——無礙の光となって

東京都青梅市 久都間 繁

(生長の家本部講師)

### 先生との出会い

榎本先生と初めてお会いしたのは、昭和五十七年（一九八二）一月のことだった。

私は、一般練成会初日の夜に宇治別格本山に到着し、先生と親しくお話させていただいたのは確か翌日の夕方だった。

入浴後の脱衣場で先生から声を掛けられ、そのままお話しながら一緒に大拝殿に向かって歩いていった。会話が青年会活動のことに及んだとき、先生の話に触発されて私が、「天人が天界を遊行するが如く、海魚が水中を遊泳するが如く」が、本来の光明化運動の相すがたですね」とお話しすると、先生は立ち止まり、「あなたが来るのをお待ちしていましたよ」と言っつて、そのまま当時先生が住まわっていた愛泉寮に向かった。玄関の所で、ちょうど藤原敏之先生が出てこられ、榎本先生に、「恵吾さん、泉英樹講師のお父さんが亡くなられたそうだ」という意味のことを伝えて道場の方に歩いて行かれた。

玄関に入り、左手にある座敷に招かれた。夕方だったこともあり、ほのかに外からの光が差し込み、部屋の様子からは清貧そのものの先生の生活ぶりが窺われ、質素な経机などの家具や畳、座布団、壁や柱などが静かにに光りを放っているような、聖なる落ち着きを感じた。一子奥様がお茶を出してくださり、先

生は私のことを紹介してくださった。そして、傍らに積んであった段ボール（その中には先生が書かれた原稿用紙がいっぱい詰まっていた）を指さして、「あなたのために準備してましたよ」と言ってくれました。

やがて練成会の招集放送が部屋に流れると、先生は何かの担当だったことを思い出されてか、急に立ち上がられ、思いつかれたようにご著書『光のある内に』（日本教文社刊）を取り出し、マジックでニコニコのサインをして、手渡してくださった。

その晩、練成会の行事が終わると、早々に『光のある内に』の中にある先生のご文章を読み始めた。そこに書かれた内容にぐいぐい引きつけられ、消灯後は「祈りの間」に移動して、一月の火の気のない寒い部屋で、夜が更けるまで拝読させていただいた。

青年会運動への葛藤、家業のこと、長年の病氣、事故などの問題が一挙に押し寄せ、宿命に追いつたように宇治練成にやって来た私だったが、そのご本に書かれた内容は、それら現象の一切を超えて、『生命の真相』から発した「生長の家唯神実相論」特有の根元的な光を放っていた。「やっぱりそうなんだ！」という、懐かしくそして深い喜びが、真つ暗だった私の心境を突き抜け、無礙の光明が魂の底から輝き始めるのを感じた。

翌朝、先生にお会いして、「まるで『原始生長の家』ですね！」と、ご著書への驚きをお話しさせていただきました。

## 全人類と心中する覚悟

藤原先生と榎本先生のもとで修行させていただいて、二年目を迎えた昭和五十八年正月、私の両親が初めて宇治別格本山を訪問してくれた。目的は私の将来のことを榎本先生ご夫妻と話し合うためだった。

私は前年八月に、宇治別格本山の研修生から職員に採用されていた。父とは二年間の約束で、宇治での修行を許していただいていたのであるが、父は「ここが潮時」と判断したためか、「お前がお世話になっている先生に会って、今後のことを話し合っておきたい」とのこと、宝蔵神社の新年祭が終わった一月四日、両親と三人で先生宅におうかがいしたのだった。

その時のことを先生は、ご著書『みどりこの詩』<sup>うた</sup>の中で、次のように記しておられる。

お父さんの話を聴かせていただきながら、自分の父親の思いをそこに聴かせていただいたように想えてきた。私が高校一年の終わりに生長の家青年会に入ってから、親類のところに行っては、「恵吾は生長の家で殺された」と言っていたとのことである。母親にも言ったらしい。母親の勧めで青年会に入ったのであったから、母親もつらい思いをしたにちがいない。

久都間君のお父さんは「殺された」とは想ってははられないが、「それは父親の愛だったのだ」とその愛の部分久都間君のお父さんのお言葉の中に聴いたような気持ちが生じていた。

(中略) 新年の四日にご両親が来られた時、お父さんには跡継ぎを本山にあずけてしまうか否かの重大な問題であった。いよいよ最後になって、「それでは」というよりも「やっぱりそれが本当なんだな」というような感じで、やっぱりわが子をよく知っておられるのだなと思わされた。家内も「どうですか。この風貌は建設という風貌とは違うんじゃないでしょうか」と言った。これにはやっぱり、と今度は言葉に出して「そういえばこの顔はな」とお父さんは言われた。

『みどりごの詩』とは、榎本先生が昭和五十七年から五十八年ごろに親身になってお世話した研修生たちの手記に、先生の折々の所感を交えて編纂したものである。その後研修生出身の人たちが原稿を入力、藤原義彦さん・恵さんご夫妻がそれを引き継ぎ、プリンターとコピー機などを使って印刷、手作りで七巻仕立てに装幀してくれたものだ。榎本先生は、後に自費出版することになった『弟子像』に収録した「小嶋博先生についての所感」と、この『みどりごの詩』とを合わせることで、宇治別格本山での研修生活をテーマにした本を、日本教文社から出版したい願いをその当時語っておられた。が、具体化することなく現在に至っている。

さて、引用文のなかで先生は、「久都間君のお父さんは「殺された」とは想ってはおられないが」とおっしゃっているが、実は私の父も、「殺された」と思っていたことであろう。私は父の営む建設会社の後継者であり、このときの父の論旨は、生長の家の信仰生活を否定するのではなく、私が地元で青年会活動をしていたときのように、家業に従事しながら生長の家を信仰するのが全てを生かす道であると、誰もが納得する筋論で私たちに語りかけていたのである。私も、最早これまでだな、と半ばあきらめつつ父の話に耳を傾け、先生ご夫妻も常識を大切にされる方たちなので、これ以上の反論はなかりうと思っていた。やがて一息つくと、先生は、「今のお話を聴いていて、まるで自分の父親の言葉を聴いているようです」と、感慨深げに父にしみじみと感想を話された後に、突然「私は久都間君と心中する覚悟です！」とおっしゃった。奥様も、さらに私がこの道に進むことを後押しする言葉を言ってくださり、私はただただ恐縮し、父は全てを先生に托して静岡に帰って行った。

しかし、先生が「心中する覚悟」とおっしゃった意味が、本当に理解できるようになったのは、後に私

が本部講師として演壇に立つようになってからである。

先生は、私という現象を見ていたのではない。私の内にある「實相」のみを真つ直ぐに見つめておられた。そして先生が「心中する」とおっしゃったのは「神（実相）」に対してであり、それは同時に全人類と「心中する」ということだったのである。そのことが、如来としての大慈悲のお姿が今になってようやく分かってきた。そして先生は、そのご姿勢を生涯にわたって貫かれて逝かれた。時折、先生からの召命の声が、天地万物となって鳴り響いて来ることがある。

### 先生のライフスタイル

榎本先生は、四十代後半から頻繁に絵筆を持つようになられた。私が知っているのは、神癒祈願部（当時）の小嶋博先生が岡崎に帰省された折などに、練成部から神癒祈願のお手伝いに行かれ、祈願を受ける方の名前を「人型」に墨で書かれるようになったことや、同じころ練成部から大祭奉仕の案内状の手紙を送る際に、封筒に墨で宛名を書く作業を、先生が嬉々としてこなされていたことなどが縁で、余った墨を捨てずに使って、書いて楽しんでいるうちに、自然に書画へと発展したのではないだろうか。そのころの研修生たちは、誕生日を迎えると、先生が写経された『甘露の法雨』の一節などを贈られ、部屋の壁に画鋏で留めていたものである。また、後に西宮の前波邸で毎月開催されることになった誌友会に出講した折にも、求めに応じて揮毫されるようになった。誌友会に参加していた大関酒造のおかみさんと、宇治別格本山の理事までされたことのある長部真知<sup>おさべまち</sup>さんは、先生の揮毫される姿を斜め後方からしみじみと眺めながら、「先生は、はまっていらっしやる。なかなか、はまらないものですけどね」とおっしゃっていた。それはまるで、「天地と一つになっていらっしやる」とでもいうような響きをもって聞こえてきた。

このほか先生は、クロッキー帳などへのスケッチ画や、さまざまな風景画、独自の仏画などを、晩年まで描き続けておられたが、先生は、これらに使う材料については独特のこだわりを持っておられた。それは、素材そのものへのこだわりではなく、神の摂理によって自然法爾に自分の元に巡ってくることに、その事へのこだわりで、それは書画の材料だけではなく、他の全てのことにも及んでいた。時にはご自身で道具や材料を選ばれる場合もあったが、原則的には神縁によってめぐって来たものを尊び、それらのものを大切に使用になっていた。

また、宇治に新練成道場が建設されるということで、敷地にあった第二社務所が壊されたときには、同社務所内の「智慧の間」で使われていた天井板や襖（ふすま）などの廃材を貰い受けて、今度はそれをカンプラスにしてひたすら書画を描かれていた。

先生は、「人」との出会いも、「物」との出会いも、さまざまに「出来事」との出会いも、全てこれ神様から降りそそぐかけがえのない「たまもの」であり、あらゆるものを「神」そのものであると観て、その世界にそのまま生かされることを最上の喜びとされていたようである。それは招神歌かみよびうたにある、「吾が生くるは吾が力ならず、天地を貫きて生くる祖神みおやの生命いのち」「吾が業わざは吾が為すにあらず、天地を貫きて生くる祖神ちからの権能」そのままだちて歩むお姿ではなかったのかと、今になって思うのである。

たとえば大好きだったお酒でも、私を知る限り、特別な銘柄にこだわるようなことなどはほとんどなく、またどんな事件が起ころうとも、それをそのまま感謝して受け入れていらっしやった。

ある年の冬、こんなことがあった。大阪教区で開催された講習会に参加させていただいた帰路、先生のお誘いで本山の人たちとは別行動をとり、二人で電車に乗って京都駅でしこたま飲んで帰ったことがあった。宇治駅で下車し、横断歩道ではない場所で、先生の背中に腕を添えて一緒に道路を渡りはじめたとき、

先生が躓いて倒れてしまわれたのである。しまった！ と、先生の躰を起こし脇に躰を添えて立っていたのだが、寒い夜でポケットに両手を入れたまま倒れられたらしく、お顔に怪我をさせてしまったのである。まったく私の不覚からの事故だった。

翌日、鼻や両頬などに瘡蓋かさかたができたお顔で先生は出勤され、私はまったく合わす顔がなかった。しかし先生は、私を責めるどころか、ぼつんとこんなことをおっしゃった。「私が諸君の顔を潰つぶすようなことばかりしているから、こんなになっただねえ」——私を筆頭に、先生にお世話になった者で、先生のお顔を潰すようなことをした輩やからは数多あまたあれど、先生に顔を潰されたような人など一人もいないはずである。しかし先生は、これまでの人生で、ご自身に対して否定的な態度をとったことのある全ての人たちをも包容し、ただただ神そのものとして拝み続けておられたのである。

ふり返ってみれば、榎本先生が多くの人と接せられる中で生まれた師弟関係とは、世間一般で言うところの「教える者」と「教えられる者」との間柄だけで語ることはできない。

私たちが先生を慕わせていただく。ところが先生は、情とはまったく異なる次元から、如来の大慈悲そのままに、縁ある全ての人々を包み、拝んでくださっている。そのことの秘密を垣間見た者が弟子となり、或る者は師のたどった道を歩み始める。この師弟関係は、先生とのおつきあいが長いとか短いとか、研修生であったとかなかったとか、直弟子であるとかないとか、そのような現象上の関係の一切を超えていた。自我を死にきつたとき、現象の一切を捨て去ったとき、時空を超えて、今ここに先生と、いつでも相見あいまみゆることができるのである。

## 先生の作品をめぐって

私は宇治別格本山で広報・編集の仕事をしていた関係で、一九九〇年代には８ミリビデオカメラなども自宅で購入して、同本山での広報活動に役立てようと、いろいろな研究をしていた。

やがて、休日や仕事が終わった後などに、先生と一緒に書画などの作品を撮影するようになった。撮影には、職員の藤原義彦さん、高橋秀行さん、畑本悟さんらがライティングや作品の陳列をお手伝いしてくださり、撮影が終わった後は、先生が持参されたお酒とつまみで軽くいっばいやるのが通例で、時には宇治川のほとりまで行って焚き火をしながら飲むこともあった。撮影する場所は、大拝殿と旧練成道場とを結ぶ地下道や、旧練成道場の講堂、入龍宮幽齋殿などで、これらの会場に作品を展示して撮影し、そのまま簡単な展覧会を開くこともあった。

撮影した映像には、作品の雰囲気とマッチした宗教的な音楽を入れ、VHSビデオに編集して先生に提供させていただいた。先生はこれらの作品を何度も繰り返しご覧になっていたので、現在はそれほとんどが摩滅してしまったようである。つい数年前も、先生からVHSビデオにダビングしてほしいとの依頼をうけながら、仕事の忙しさに紛れてそのままになっていたことが悔やまれる。８ミリビデオのマスターテープが残っていたので、昨年（二〇〇六年）岡正章先生に全てお預けして、現在は岡先生がデジタル化の作業に取り組んでくださっている。やがてその一部はウェブ上（「榎本恵吾記念館」）で公開されることもあるかと思う。

また、榎本先生はたくさんのお楽曲を残しておられるが、一九九九年前後に、音楽家でピアニストの福場江三子先生と榎本先生と三人で、何度か先生のピアノ作品や先生の歌唱などをMDに録音してCDを制作したことがあった。

録音した会場は宇治別格本山の大講堂で、練成会の開催されていない時期に日程を合わせ、同講堂のグランドピアノを福場先生が演奏してのレコーディングだった。榎本先生は実に楽しそうにピアノ演奏を聴き、ご自身も、無礙の光が鳴り響くような豊かな声で、朗々と歌っておられた。このほか我が家で開催したホームコンサートでの録音なども含めると、全部で四〜五枚ほどのアルバムになっただろうか。こうして「はじめのはじめ」「はじめの光り」などのCDが生まれたが、先生はこれらの作品がCD化されることを本当に喜んでくださっていた。

### 『弟子像』のこと

私が宇治別格本山の企画事務課にいた一九九〇年代のこと、先生は毎日かならず一回は事務所にお顔を  
出されて、私とお茶を飲みながら四方山話をされていた。

ある日のこと、先生は「これを本にしたいんだけどねえ」とおっしゃって、A4判のコピー用紙に、生長の家の先達のお名前を書き始められた。そこには、「弟子像——尊師 谷口雅春先生への仰慕」として、山口悌治、吉田國太郎、服部仁郎、小嶋博、藤原敏之、徳久克巳と、谷口雅春先生のお弟子で榎本先生とご縁の深かった人々のお名前が連ねてあった。それらの原稿のほとんどは、すでに生原稿の段階で目を通したものではあったが、これは、先生が私に、この本の制作を託されていることをはっきりと示された出来事で、『弟子像』の制作は、このメモを端緒に具体化していった。

そこで先ず始めたことは、中土明美子（旧姓池田）さんや職員の藤原さんから研修生出身の皆さんが、かつてワープロなどで入力していた「弟子像」関連のデータを収集することだった。彼らからは山口悌治先生・吉田國太郎先生・藤原敏之先生などの断片的なデータがフロッピーディスクに保存されていたのを頂

いたが、私のパソコンでは読み取ることができなかった。そこで、先生のご長女の実代さんを通して、N E Cに勤務しているご主人の渡邊英明さんの力を借りて、一つ一つ、テキストデータに変換していただいた。また、テキスト化されていないものやデータが紛失したものは、原稿用紙や印字されたものから私が入力した。

最後に残ったのは徳久克巳先生についての原稿で、これの入力は、榎本先生が執筆を進めながらの同時作業となった。

校正は、データの整理できたファイルから順次進められたが、先生とのこの一連の作業から、図らずも多くのことを学ばせていただいた。

たとえば、山口悌治論を通して、戦後に展開された生長の家人類光明化運動の「新体制」の功罪を、そして吉田國太郎論や服部仁郎論からは若き日の榎本先生の求道生活と「今」の哲学へのアプローチを、また藤原敏之論からは家族の側からみた第一級の信仰者の日々の生き様を、小嶋博論を通しては師と弟子との魂の交流を、徳久克巳論からは練成道場と練成会を確立させた朗らかな魂のすがたを、さらに、これら弟子たちの魂が織りなす芳醇なる色彩を通して浮かび上がる谷口雅春先生のお姿を――。

紙面への割り付けには、仕事で取引のあった印刷関係者などを通じて、さまざまなDTPソフトを調査した。一九九〇年代後半の時点では、アドビ・システムズ社のページ・メーカーというソフトがベストだとの結論に達し、このソフトを活用しての割り付けは田中裕子さんに担当してもらうなど、それぞれの得手なところを生かして着々と進められた。

校正が進むにつれて、話題はより具体的に『弟子像』の装幀のことなどをめぐってのものとなった。二冊に分冊するか、それとも一冊にするか、書体、級数、段組、紙質など、折あるごとに話し合った。が、肝心の出版資金のめどは一向に立っていなかった。それでも、「今できること」を一所懸命にやっついてい

ば、必ず次の道が開けるといふ、不思議な確信があった。というのも、かつて先生から、お嬢さんの大学入試の折の話を聴いていたからである。先生は、「合格する前から、お金がないからという理由で、行くの行けないの」と言っているもお話にならない。その心配をするのは無事に合格してからの話。受かってもいないのに、今から授業料の心配をしても始まらない」という意味のことをおっしゃっていた。それは、本当に合格できたなら、必要なことは神様が全てにわたって準備してくださっている、との確信に満ちたお話しぶりだった。このようなことから、私は『弟子像』などの書籍や、先生のさまざまな作品の制作を通して、「祈り」そのものの成就する過程をつぶさに体感した。

ともあれ榎本先生を中心に、多忙な業務の合間を縫って、多くの皆さんの協力をいただきながら進めていたのが、この『弟子像』をはじめ『葩さんさん』、『裸』、『無神』、『楽譜集』などの製作や、『続常楽への道』（吉田國太郎先生著）、『神癒の展開』としての人類光明化運動』などの入力だった。

『神癒の展開』としての人類光明化運動』は、九〇年代に生長の家本部にあった「二十一世紀委員会」が、二十一世紀の運動を推進するための論文を公募していたのを受け、榎本先生が毎朝二〇〇字詰め原稿用紙七〜八枚ほどに執筆しておられた寄稿文を、私が入力して同委員会あてに送信していたものの総称である。これは一年半ほど続いたと記憶しているが、先生は、やがては原稿をまとめて自費出版したいとの願いを語っておられた。

また、『続常楽への道』は、かつて吉田國太郎先生が『生長の家』誌などで発表されたご文章の切り抜きを、どなたかがコピーしたものを榎本先生がもらわれており、私はこれを昭和五十七年ごろに手渡されて、拝読させていただいていた。以来、「この珠玉のご文章を埋もれさせてはいけない」との思いを温め、これも『弟子像』の原稿入力の目処がついたのを機に、自費出版する予定でデータの編集を開始した。ま

た、この『続常楽への道』や『神癒の展開としての人類光明化運動』など入力したものを、校正のためにプリントすると、榎本先生はとても楽しそうに目を通してくださっていた。

二〇〇〇年、『弟子像』を出版するためのデータがほぼ整ったのを見計らったように、突如として同書を発表する目処が立ったのである。ここで詳しく述べているわけにはいかないが、深い神慮としか言いようのない導きで新たな協力者（長山弘氏）を得て、祈っていたことの何倍もの理想的な形で、私たちの“願い”が実現することとなった。

ちようどこの年の五月、私に生長の家本部への転勤の辞令が下った。宇治別格本山で私が担っていた広報・編集業務の引き継ぎなどの関係で、同年十一月まで別格本山に勤務しての異動となったが、宇治での最後の年に、これらの願いが一挙に成就したことは本当にありがたいことだった。

そして翌二〇〇一年三月一日に『弟子像』を出版。また、信じがたいことに『続常楽への道』が、なんと日本教文社から刊行されることが決まり、同年八月一日に出版された。

### 最後となった宇治でのひととき

先生と最後にゆっくりとお話しできたのは、二〇〇五年四月二十四日だった。

数日前、その年の七月に開催される「生長の家教修会」の発表講師に選ばれた私は、まず榎本先生にそのことをご報告しようと思いい立ち、さっそく先生のもとに電話をかけた。そのとき私は先生を驚かせたかったので、行く理由をハッキリ告げずに、ただ「四方山話」とだけ言って、訪問させていただくことを伝えた。

二十三日夜、新宿西口発の夜行バスに乗り、早朝に宇治駅に到着した。時刻がだいぶ早かったため、同駅から奈良線に乗車して、京都駅で立ち食いうどんを食べ、伏見稲荷大社にお参りした後に宇治本山に向かった。

九時過ぎに龍宮参道を歩いていると、拝殿側から榎本先生が自家用車に乗ってそろりそろりと上つて来られ、私をちよつと通り過ぎたところで遠慮がちに車を止められた。

車窓から、不安そうな先生のお顔が私を覗いていた。後から聞いた話では、先生は、てっきり私が生長の家本部を辞める相談にやって来たと思っておられたそうである。

入龍宮幽斎殿にある先生の執務室で、ここに来た目的をお話させていただくと、先生は思いがけない喜びに出会ったようなお顔をされ、とても興奮されて嬉しそうだった。

折しも、谷口輝子先生の十七年祭が宝蔵神社の大拝殿で行われるとのことで、先生の自動車と一緒に拝殿前に移動した。

先生と腰を据えて会食しながらお話するときは、意図したわけではないのに不思議と谷口雅春先生のご命日や、吉田國太郎先生、服部仁郎先生のご命日と重なることが多かった。そして今回も、谷口輝子先生のご命日にこのような機会が設けられたことに、不思議な導きを感じた。

十七年祭が終わった後、先生は神癒祈願の仕事を済ませるため入龍宮幽斎殿に戻られ、私は大拝殿に集まった懐かしい宇治の皆さんにご挨拶した。管理部の前では、研修生たちが掘った、収穫したてのタケノコが並べられていた。四月の宇治は季節感にあふれていた。

午後一時からは榎本先生の先導で、久しぶりに幽斎殿での神想観実修に参加させていただいた。研修生や一般の方を含め、五十人ほどが参加していたであろうか。畑本悟さんの奥様の宏実さんが、扉を開けた

り音響のスイッチを入れたり、かいがいしく奉仕しておられた。

朗々と、実相海世界のもが鳴り響くような招神歌。幽齋殿の満堂に神々しい和気が充満し、そのまま八次元の龍宮海が天降り現成しているかのような祈りの世界だった。そしてこの世界はそのまま私の母体であり、私の使命とするところは、この「神癒の展開としての人類光明化運動」を生きることであることを確認させていただいた。

その後、先生のお車でご自宅にうかがった。四女の妙子ちゃんを嫁がせたまま、静かな日々を過ごされていた様子が伝わってきた。ご夫婦だけの生活、奥様も宇治の練成会のお仕事で出勤しておられるので、部屋の中はひっそりとしていた。先生に勧められて、藤原先生の御霊前と榎本家のお仏壇に合掌し、お線香をあげさせていただいた。ステレオ装置が壊れていたのも、東京に帰ってから替わりのセットを手配させていただくことをお約束した。

先生宅で日本酒で乾杯したあと、散歩しながら宇治橋の袂にある「サイゼリア」に移動してビールで乾杯した。先生は、最近ずっと「練成会についての所感」をまとめていて、「光明一元」の視点のみで実施する練成会の画期的なビジョンについてお話しくださった。これを聴きながら、「唯神実相論から展開する練成会」をこの世に実現させてみたい、そしてできれば、ぜひ先生と一緒にやらせていただきたい。それはどんなに喜びと光明に満ちあふれた聖業となるだろう——という感想を、先生にお話しさせていただいた。これをやるためにこそ、本部講師になったのだ——とも思った。

日が暮れるまで歓談させていただいた後、関西の人たちが先生のお話を聴くために毎月開いているという食事会の会場を予約するため、塔の島近くにある「鮎宗」に向かった。

宇治川の堤防に出て、川の流れを眺めながら塔の島への橋を渡ると、八重桜が満開を迎えていた。ふと、家内と十数年前、宇治川のほとりの料亭で結婚披露宴を催したときも、この桜が満開だったことを思い出

した。同じ季節だった。しかし、先生との最後の花見になるなどは夢にも思わず、花を愛で、夕暮れの春の宇治川の景色を懐かしく眺めながら一緒に歩いた。

「鮎宗」で部屋の確認と予約の手配を済ませ、先生の提案で、妙子ちゃんご夫妻の新居まで足を伸ばすことになった。途中で缶ビールを買い込んで到着すると、ご主人の喜多源典さんはすでに帰宅して、今まさに夕食が始まるうとしているときだった。ビールを飲みながら、先生と喜多さんご夫妻と楽しく歓談しながら、カウンセラーとして活躍されている彼の仕事のことや、近況についてうかがった。

夜も更け、先生は繰り返し繰り返し、「わたしは久都間君がてつきり本部を辞める話で来たと思っていただけ、それならどうだい、なんと教修会の発表講師に選ばれたんだよ。それを、交通費まで払って、私のような者のところに真つ先に報告に来てくれたんだよ！」と、とても嬉しそうに話しておられた。そして私は、こんなにも喜んでくださる方がこの世にいることが、とても幸せだった。

### 生長の家教修会で

二〇〇五年七月五日〜六日、東京・代々木の「国立オリンピック記念青少年総合センター」で開催された「生長の家教修会」で、私は一番手として「宗教多元主義の系譜・外国の場合——（世界宗教に顕れた中心的真理の研究）」とのテーマで、生長の家副総裁 谷口雅宣先生、白鳩会副総裁 谷口純子先生はじめ全国の生長の家本部講師（補）と地方講師会長の前で発表をさせていただいた。本来は二番手の発表だったのが、事前の打ち合わせの折、谷口雅宣先生から「久都間さんが最初に発表を」とのご指名で、急きよ変更になっていた。

壇上では、「宗教多元主義」の考え方を軸に、世界の各宗教に顕れた「中心的真理」と、生長の家の説

く唯神実相論との共通性、さらに究極的実在の今日的な展開である、生長の家の使命である「国際平和信仰運動」について、黒板や「パワーポイント」によるプレゼンテーションなどを活用しながら、研究内容を紹介させていただいた。

発表が無事に終わり、満場の拍手の中、ふと榎本先生を見ると、まるで別人のように目に映った。それは、齢を重ねた数学者か物理学者のような風貌で、老眼鏡越しにこちらを向いて、温かく拍手しておられて、はっと榎本先生だと気づいた次第だった。

第一日に担当した講師の発表が終わり、谷口純子先生が講話をされている最中のこと、家内からの電話で、父が危篤だとの連絡が入った。父はこの数カ月間、余命幾ばくかという状態がずっと続いていたが、私は教修会までの限られた期間内に発表論文を仕上げなければならぬ関係上、毎晩遅くまで本部に残って執筆し、薄水を踏む思いで、父の命の炎が灯し続けていることを願ひ、榎本先生にも祈っていただいていたのである。

その晩は、新宿で榎本先生ご夫妻と会食する予定だったが、それもならず、帰路は先生ご夫妻が宿泊される新宿京王プラザホテルの近くまでお見送りさせていただくことにした。

教修会の会場を出る際に、いつものように先生たちのカバンを持たせていただこうとしたら、「発表講師にそんなことはさせられない」とおっしゃって遠慮された。「そんなことありませんから」と言うと、遠慮がちにカバンを渡してくださいました。会場から小田急の参宮橋駅まで、先生ご夫妻と歩いていく間、発表した私に向けて、何人もの参加者から祝福と賛嘆の言葉をいただいた。そんなとき先生ご夫妻は、私の陰で遠慮がちにされていたが、私としては全ての栄光を恩師である榎本先生に帰したい思いでいっぱいだった。

翌、教修会二日目は中央線で事故があり、会場に着いたのが十時半だった。会場では最後の担当講師が

発表している最中で、私の発表が前日だったことに心から感謝した。先生ご夫妻は、私の姿が見えないので、てっきりお父さんが亡くなったのだらうと思ったとのことだったが、父は虫の息ながらまだこの世での余命を残していた。

正午で教修会が終わり、参宮橋駅に向かって先生ご夫妻と並んで歩いていると、奥様が、「昨夜も主人と話したのだけど、久都間さんの発表を聴いてとても誇らしかったわよ！」と言って下さり、榎本先生も「ああ誇り高かったよ！」と、とても喜んでくださっていた。ほんのちよつとだけでもご恩返しができていたとすれば、こんな嬉しいことはなかった。そのまま新宿駅にある小田急百貨店の食堂街に行き、ビールで乾杯して中華料理をごちそうになった。

ビールを飲みながら、先生はしきりに、生長の家総本山の龍宮住吉霊宮にお祀りされているイザナミの大神のことについてお話してくださいました。イザナミの大神がイザナギの大神に、ご自身のお姿を「見る」ことを禁じられたのは、「現象を見るな」ということであり、黄泉よみの国にいらつしやつた女神のイザナミの大神様は、やがて完全円満なる「天照大御神となって復活されたのだ」と語っておられた。

会食の終わりが、先生は、「日本酒をもう少し飲みたいねえ」とおっしゃったが、私が「父のことがありますので」とお断りして、「またゆつくり宇治に行きますので、その時は終日飲みましょう」とお話しすると、先生は「終日ねえ……」と寂しそうに、それはもうあり得ないことのようにおっしゃるので、私は不思議な思いでそれを聞いていた。

新宿駅で、東京駅に向かう中央線に上るプラットホームの下まで来ると、先生は、「お父さんのこともあるから、ここまででいいから」と、私がホームまで行くのを制せられ、立ち止まって握手をしてくださった。これが、今生で先生にお会いした最後となった。

## 先生とのお別れ

生長の家教修会から一週間後、七月十二日の夕方のことだった。本部からの帰路、何とも言いようのない不安と妙な胸騒ぎに襲われた。教修会での発表も無事に終わり、前日には機関誌の責了も済ませてほつと一息つき、間もなく臨終を迎えつつある父のことは十分にお別れを済ませ、何も思い煩うことなどないはずなのに、どうしてまだこのような不条理に満ちた不安が頭をもたげてるのか——と思った。

その晩、咲本はる子（旧姓向瀬）さんから電話があり、電話に出た家内から、榎本先生が亡くなられたことを知らされた。

「このことだったのか——」。事態がのみ込めないまま呆然としてしていると、続いて長女の実代さんからも連絡をいただいた。さらに大萱うい子（旧姓滝）さんからも。

ふと、私も誰かに連絡しなければと、思いつくままに新潟の小林兼吉（旧姓森山）さんと、東京の石田宗之さんにお知らせした。悲しみというよりも、ただただ絶句するほかなかった。

通夜に出席するため、病院で眠り続ける父の耳元で事の次第を告げ、先生の葬儀の終わる十六日までは（逝くのを）待つてほしいと、言葉に出してお願いした。十四日、宇治に向かった。新幹線の中で、先生とのさまざまな想い出が、断片的に脳裏に浮かび、車窓の風景とともに過ぎ去って行った。京都駅で奈良線に乗り換えて、宇治に向かう景色に見入っていると、突然、先生との懐かしい想い出が一挙に目の前に押し寄せてきた。本山での研修生活、お酒を飲んでいた大失敗の数々、大学の卒業式に休みを取って出席してくださったこと、毎月開催した誌友会、一緒に歩いた宇治川の畔——次から次へと涙が止めどなくあふれ、この世で最も大切な人を失ってしまったことを知った。

平等院前にある生長の家蓮華寮に着くと、奥様はじめ長女の実代さん、次女の久実さん、三女の信恵さん

んらが迎えてくれた。久実さんからは「久都間さんがお父さんを満足させちゃったから、こんなに早く逝っちゃったのよ」と、温かな言葉で責められた。

先生の棺ひつぎはすでに宇治別格本山に運ばれた後だったが、案内されるままに、先生の亡骸が安置されていた祭壇にお線香をあげさせていただいた。奥様が一緒してください、先生の遺影の前で合掌した。お写真の先生は、真つ直ぐにこちらを見据えておられた。

お亡くなりになる一ヵ月ほど前に先生にプレゼントしたオーディオ・システムが、亡き主あるじに捧げるための音楽を、静かに奏でていた。ふと見ると、祭壇にお酒が供えられており、銘柄を見ると「志太泉しだいずみ」だった。久実さんのご主人、高塚純さんが、ご霊前にと持参されたとのこと。このお酒は、偶然にも、私の静岡の実家の窓から見える造り酒屋で醸造されたもので、私が幼いころから親しんだ、瀬戸川の水で作られたものだった。それがご霊前に供えられていたことの不思議を、奥様にお話しさせていただいた。かわらけに注がれたお酒を手にとって、亡き師と乾杯させていただき、さらに奥様に注いでいただいた。

通夜には大勢の方々が参列してください、聖経『甘露の法雨』の読誦が終わった後も、焼香の列が途絶えることはなかった。参列者を見送った後、通夜の食事と酒が運ばれ、懐かしい面々と先生の思い出を語りながら酒を酌み交わした。榎本家の四姉妹が歌い始めたのを皮切りに、いつしか通夜の宴は大合唱の場へと姿を変え、福場先生のピアノも加わり、夜が更けるまで講堂に歌声が鳴り響いていた。そして一人去り、二人去りした最後の最後、明け方まで、研修生同期の咲本徹さんと信恵さんのご主人の小林努さんと、ギターを肴に酒を飲んだ。きっと先生も同席されていたことであろう。

そして、先生の葬儀を終えて帰宅した翌十六日、すべてを見届けたかのように、私の父も幽界へと旅立って行った。

## 榎本先生はあなたの中に

榎本先生は、かつて、入龍宮幽齋殿で神癒祈願をされていたとき、ふと、「全ての人類を一気に救うことはできないだろうか」と思われた、すると谷口雅春先生が脳裏に現れて、「それをやったのが私だよ」と、しかも「今さら君は何を言っているのかね」と、大いなる満足と喜びに満ちた雰囲気をもって、懐かしそうに語られた——ということ、榎本先生から何度か聴かせていただいたことがあった。

この世の常識からみれば荒唐無稽な話であるが、先生が常々語られていた「久遠の今」に立つてみれば、荒唐無稽どころか、そこから「天地の開ける音」が聞こえてくるはずである。

生長の家が開いた天地、それは「実相独在」である。「実相独在」とは、本当に実在するものは「善一元の世界」のみである、ということである。最早、叶えられない願いなどなく、浄化されない宇宙など存在しない世界の消息である。

榎本先生も、「それをやったのが私だよ。その『私』とは、実は、あなたのことだよ」とおっしゃっているのではないだろうか。

谷口雅春先生は、ご臨終の折に「罪なし、病なし、迷いなし。これが生長の家の根本真理であります。それでは神様、只今より眠らせていただきます」とおっしゃられて神去られた。

かつて榎本先生は、谷口雅春先生のご昇天は、〃谷口先生の最大の拝みの時〃だとおっしゃられていた。それは同時に、榎本先生にとつても、ご自身の昇天が、〃榎本の最大の拝みの時〃であるはずである。『無門關』に「俱胝堅指」の公案がある。門人の小僧が形の指を切られ、立てるべきものを失ったとき、俱胝和尚がすつと指を一本立てた。それを見て小僧は豁然かつぜんと大悟したという。

榎本先生は、「私は無いんですよ」と現象宇宙とともに消え去り、金剛不壊なる実相の天地として復活した。しかし実は、はじめのはじめから私たちと共に生き続けておられたのである。神縁とは、「久遠不滅なる実相と“ひとつ命”である」ということである。そこは、生長の家大神、久遠のキリスト、久遠の釈迦、久遠の谷口雅春先生、そして榎本恵吾先生と私たち全人類とが、神縁によって相見あいまえることのできる“久遠実成くおんじつじょうの天地”なのである。ここを実相世界とも、龍宮世界海とも言い、入龍宮不可思議境涯ともいうのである。

最後に、榎本先生のご論文『「発進宣言」 拝誦』の一節を紹介して、筆を置かせていただこうと思う。

われわれは、宗教によつて罪と病と死との三暗黒を消してから、光となるのではないのである。我がというものを消してから光となるのではないのである。そんなものははじめから無いのである。そんなものを放つておいて、そのまま“神の子です”と光の中に飛び込んだときに、そのあとで、罪と病と死との三暗黒は消えるのである。

光が近づくとき“罪と病と死”の三暗黒が消えるというときの、この光は、これから光となるべき、可能性をもつわれわれ人間を照らして罪を浄めてそれからやつと自分が光となるといふような意味での不完全な自分を照らしている光ではないのである。先づわれわれが光の中に飛び込んだとき、“光”は自分と神との一体性から輝くところの自分の光となつていのである。先づ、自ら光であると宣言し光として立つことからすべてがはじまるのである。

（榎本恵吾先生論文集『波状光明化への道―内なる神に捧ぐるレポート―』へ「発進宣言」 拝誦より）

はじめのはじめから「光」であつたことを宣言して、今ここに「光」として立つこと。すべてがここからはじまるのである。新たな神話が、宇宙開闢かいびやく以来の驚きが、榎本先生との尽きることのない悦びの研修が、神と神との荘嚴なる光の世界が始まるのである。「天地の初発はつぱつの時」、それは常に「今」である。その「今」を悦び生きることが、自性円満なる神の子の生活であり、先生が指導された研修の要諦ようていである。

二〇〇七年三月

## 44 師を偲び 心のままに

兵庫県西宮市 阪口 四郎

昭和五十六年は、私にとって最大の幸せな年になりました。

師にめぐり会えたことに、心からの感謝を申し上げたいと思います。

まさに、どん底の人間が、人生最高の幸運を授かることになったのです。この夢のようなことが、現実にあつたのです。

宇治本山にて、榎本恵吾先生にめぐり会えたのです。そして師とともに、夢のような2カ月をすごさせていただき、このときおそらく私の魂は、師及び一子奥様の中に飛び込んでしまったように思います。

そして今、二十数年の時が過ぎ行き、この間一日も、師と奥様のことを思わぬ日はございませんでした。この間、苦しいことや、悲しいことも、たくさんありましたが、年に一度、十二月三十一日に、師と奥様にお会いすることが喜びで、何があっても苦しみは苦しみでなく、時が過ぎ行くごとに喜びに変わっていくのでした。

十二月三十一日という日は、私にとって最大の喜びの日でした。

そしてあの、七月十二日です。

私は先頭に立って皆様を支えなければいけない立場でありましたが、私自身が私自身をどうすることも出来ず、ただ悲しみの中でオロオロするばかりでした。師とお別れして半年ほど、聖經を読むと涙があふ

れ出てしまいました。これではいけないと思いましたが、先生が『そのままでもいいよ。ありがとうね。』  
と言っておられるように思われました。

師は、本山で私たち研修生の実相を観続けてくださっておられたのですね。私も師のことは一日たりとも忘れることなく、毎日毎日、「これでいいんでしょうか」と、独り言のように、いつも語りかけておりました。

先生、私は宇治を離れるとき、心に誓ったのですよ。このすばらしい先生を、一人でも多くの人に知って欲しいと思い、生きてまいりました。

又、最後に神の導きで友江さんという人に会い、「一の会」を作らせていただきました。先生、少しでもお役に立てましたか？

まだまだ書きたいのですが、書くことが出来ません。これからも、この現象世界の使命が終わるまで、楽しく生きてまいります。

先生、そちらに行くことになりましたとき、必ず迎えに来てくださいね。

## 45 先生ありがとうございます

兵庫県西宮市 阪口 幹也

そうですね、先生とお会いしたのは昭和五十七年ころでしょうか。

生前まで、わがままな僕を指導してくださり、本当に感謝しています。

先生が現象界から去った後も、父と一緒に月一度幽斎殿で神想観をしていますが、僕は今でも先生がみんなの前で神想観をしている姿が脳裏に焼きついて、今でも先生がいるかのように見えるのです。

「みんなと一緒に、神想観をしようね。」って、本当に今でも先生は霊界からみんなに優しく見守っているんですね。

微力ではありますが、これからも幽斎殿の神想観は続けます。

「安心してくださいね。先生ありがとうございます。」

## 46 楠本先生の弔辞

大阪府摂津市 佐谷昇三

榎本先生の告別式。祭壇の前に立たれた楠本先生は、切にお言葉を述べられました。

楠本先生は榎本先生の遺影にさも語りかけられるように

「私の家内の告別式には榎本さんが弔辞を述べてくれました。私が死んだ時には榎本さんに弔辞を述べてもらおうと思っていたのに、私が榎本さんの弔辞を述べることになろうとは思ってもいませんでした」

と述べられたあと、榎本先生を「祈願部長として最もふさわしい人だった」と最大限のお言葉で讃嘆して下さったのです。そのお言葉を聴いた時

「先生、良かったですネ、先生、聞こえましたか……？ 今、楠本先生がおっしゃったでしょ……？ 何も心配しないでいいんですよ。先生は永遠に幽斎殿に残れるのですよ、良かったですね」

と、先生に呼び掛けました。なみただけが込み上げました。

先生が亡くなられる二カ月前、宇治橋交差点近くのファミリーレストラン・サイゼリヤで食事をしながら先生が言われたことがその時蘇っていました。

先生はテーブルに両肘を立て合掌そのまま左右の掌を擦り合わせながら

「定年になっても幽斎殿に残れるよう楠本先生にお願いしようと思ってるんだ」

と、勢いよく言われました。僕はその時

「先生、先生は永遠に幽齋殿に残れるに決まってるじゃないですか」と夢中になって言いました。

先生は幽齋殿が谷口雅春先生との通信が出来る唯一の場所だと言われてました。幽齋殿は先生にとって「祈り」のまほろばでもあり、神界に存します谷口先生との交信の場所でありました。

定年後、幽齋殿に残ることの切なる願いは谷口先生との交信の切実さ故に想い彷彿とされていたのではないか。

先生が定年になられても楠本先生は必ず先生を幽齋殿に残されたでしょう。

あと二年後に定年を控えたまま「定年後」のことは気にも留めないで、さっさと竜宮本源に入られました。

先生は過去を振り向くのが苦手でした。「今」の喜びの味わいだけでした。それが「吾、今、此処」の現実を生活された「生長の家」の、谷口雅春先生の申し子の生活だったに違いありません。

平成十七年六月二十八日、先生の亡くなられる二週間前、竜宮参道を降りる真っ只中で、先生は運転される車のハンドルをちよつと揺らしながら言われました……

「佐谷君とわたしはともだちだね」

## 47 鳥飼う人

大阪府摂津市 平塚 久子

合掌 ありがとうございます。

私は平成十三年十二月に、佐谷昇三さんが介して下さり榎本先生のご存在を知ることができました。

佐谷さんは榎本先生の愛弟子といえますでしょうか、あるいはそれ以上に、先生とは何か計り知れない程の深いご縁があるように思うくらいすごい人——と私は一方的に思わせていただいています。

平成十四年春頃に、幽齋殿で初めて先生にお目にかかりました。先生はにこやかな笑顔で迎えて下さり、そして真剣なまなざしで『甘露の法雨』のね、この一番最初の招神歌かみよびうたがとても大切なのですよ……」と一所懸命にお話しをして下さいました。そのときの私は、少し難しく、どのように理解してよいかわかりませんでした。

その後、佐谷さんに毎日のようにお電話で、先生のご説法を解りやすく、具体的に教えていただき、一年近くたった頃、振り返ってみると『生命の真相』全四十巻を読み上げることができていました。私をとりまく環境もいつしか、天にも昇るような嬉しい、楽しい環境に変わってゆきました。

先生は佐谷さんのお家に訪問されるご予約でしたが、ある時、いろいろなご都合により、変わって我が家へお越し下さることになりました。はじめてお迎えするときの緊張感は、今でも忘れられません。何を

どのようなにしてよいのかわからず、ただ来る日も、来る日も家中の掃除ばかりしていたことでした。そしていよいよお見えになる当日などは、時間が刻々とせまってくると落ち着くことができず、主人と実相額の前でひたすら聖經をあげてお待ちしておりました。

「堅信歌」から始まり、「いのちの流れ」「光のある内に」などなどの歌を、福場江三子先生が奏でられるメロディーに合わせて、皆さんとご一緒に楽しく、楽しく歌い、先生のなごやかな雰囲気にあたたく包まれ、至福のひとときが流れてゆきました。お帰りになる時には、玄関で「きれいなきれいな川で」を歌って下さいました。先生は命懸けで歌っていらつしやるようにも思えました。

私は大阪の摂津市鳥飼という所に住んでいますが、先生は「鳥飼う人」という歌を作詞、作曲して下さり、春、秋、そして次の年の春秋の頃にお越し下さって、夢のような日々を過ごさせていただきましたことは、無上の喜びでした。

### 鳥飼う人

一、早や鳴き鳥よ

夜明けをつげて

鳥飼う人の

声きこゆ

今ここは 聖きよきくに



二、聖きよけきくによ

輝きらやき満ちて

もの皆た讃たえ

よろこびて

今こころは 神のくに

おかげさまで、眠っていた鳥飼相愛会が活気づいて、誌友会を新たに発足することができました。そのうえ主人は、それまで生長の家のことには特に関心を示すこともなく、私が白鳩会にいそいそと出掛けて行くのをただ見守ってしてくれるだけでしたが、神想観をしたり、仏前で聖經を読誦するようになったのです。

先生に最後にお会いできましたのは平成十七年七月九日、命日祭に出席するため宇治へ行った時でした。その時は、神癒祈願をお願いしていた誌友さんと一緒でした。幽斎殿で神想観をしたあと、先生は誌友さんが持参した『葩はなさんさん』の御本にサインをして下さり、「ちよつと待ってね」と立ち去られ、しばらくしてから「はじめのはじめ」、「はじめの光り」の楽譜とCDを持ってきて彼女にお渡し下さいました。そして命日祭が始まるギリギリまで、いろいろお話しをして下さり、「大阪教区の人は素晴らしいねえ」とにつこり微笑んで下さいました。また挨拶をして後姿を見送っていると、さつと振り向かれ、「ご主人によろしくね」と、そして誌友さんにも「ご主人によろしくね」と、やさしく言つて下さり、お帰りになられました。そのことは私にとつて、いつまでも心に残るおことは・お姿となりました。母の祥月命日の

日の出来事でした。

平成十四年から三年間、先生と親しくさせていただいた時間は、あつという間に過ぎ去ってしまいました。生涯忘れることのできない、永遠の時となりました。また私の人生の中で一番輝いた時でもありませんでした。

榎本先生、大空いつぱいの愛と、やさしさを、ありがとうございます。

そしてこのような素晴らしい榎本先生を知らしめて下さった佐谷さん、本当にありがとうございます。

最後になりましたが、先生にご恩返しをしたい……と思います、平成十八年の新年祭・八月の大祭のときから、写経の係の奉仕をさせていただいています。宇治で一子先生にお会いすると、いつもあたたかい優しいまなざしでおことばをかけて下さいます。おそばで先生が「よくきたね」と言ってお下さっているように思えて、とても幸福な気持ちになります。これからも、続けられる限りご奉仕をさせていただきます。

一子先生、ありがとうございます。

## 48 ワンルーム

大阪府摂津市 佐谷 昇三

平成十五年の一月。榎本先生のご自宅にお伺いし、いつものようにお酒を飲んでいた。その時ひよつと「ちよつと訊くけどね、佐谷君の家まで行くにはここからどう行けばいいのかね？」と訊かれたので

「僕の家ですか？ それは車でですか、電車ですか？」

と訊くと、先生はちよつとうつむかれたあと

「電車で行くとすればどう行けばいいのかね？」

と言われた。先生の何気ない穏やかさに浸っていた。

「そうですね……ここ（宇治）から電車で行くとすればややこしいですよ。何回も乗り換えなくてはなりませんし、とにかくややこしいんです」

と言うと、先生はちよつと声高に

「どうややこしいと言うのかね？」

と、腕を組み椅子の背もたれに背中を任せながら尋ねられた。僕は何故そんなことを訊かれるのか分からないまま

「先生、本当にややこしいのです」

と言うと、先生はほんの少し間をおかれ

「だからどうややくしいのか訊いてるんだが…」

その時もお腕組みされたままだった。僕はダイニングテーブルに両肘を伸ばしながら

「それはですね…」

僕は宇治から家までの帰路の絵図を辿りながら、その記憶の混線をほぐすようにしゃべった。先生も僕もお酒をチヨビチヨビやりながらの話である。

「ここ（宇治）からでしたらまず京阪電車に乗って中書島まで行って、そこで特急に乗り換え枚方市駅で降りて、そこから各駅停車に乗って門真で降りるんです。そこから大阪モノレールに乗って南摂津で降りて、そこからバスに乗って…」

と、クドクド説明した。僕はその説明に少々疲れ気味になってきていた。お酒を飲みながらだったのでそのせいもあつたかも知れない。そのクドクドをじつと聴かれていた先生は

「それじゃ、ここからどれくらいかかるのかね？」

と、クドクドを区切るように言われた。僕のクドクドに退屈になられたのかも知れない。

「時間ですか？…だいたい一時間ちよつとぐらいですね」

と応えた。先生は僕のクドクドを最後まで聴き終えられたあと、両腕を「ハ」の字にされ

「それじゃ今度、佐谷君のところに遊びに行くよ」

何気なかった。僕はもうびつくりしてしまつて

「え！ 僕の家ですか？」

僕は慌てた。

「それは困ります」

と言つて首を傾げ先生を見た。先生はにこりともされず

「どう困るんだ」

と訊かれたので、その声高になお慌ててしまい

「困るに決まってるじゃないですか」

と何もかもほかすように言ってしまった。先生はなお腕組みされたまま

「何が困ると言うんだね？」

と、ちよつと思議がられた。

「先生が来られるとすれば部屋の大掃除をしなくてはなりませんし…大変なんですよ」

と言うと、先生は一直線だった。

「掃除なんかしてもらわなくてもいいよ」

と平気だった。焦った。僕は先生のように平気にはなれなかった。早くこの話を終えたかった。僕の背中にはうつぶせになった。〃先生が僕の家に来られるなんてとんでもない、まして僕の家といつても十畳一間のワンルームでしかない、なんにもない殺風景なところに先生が来られるなんてとんでもない〃と心の内で繰り返し言しながら

「それとですね、先生が来られるとなったら座布団も用意しなくてはなりませんし…第一、僕の家には座布団などありませんので、もし先生が来られるとなったら座布団を買って来なければなりませんし…」

と言った。先生はその時はもうテーブルに両肘を立てられていた。

「別にそんなもの用意してもらわなくてもいいよ」

と、だんだん話が重なってもただ泰然とされていた。僕はもうその時、背中に言葉が失われてゆく感じがした。しかし、なにか言わなくてはと焦ってきて

「僕の部屋は十畳一間のワンルームですよ、先生が来られても何のおもてなしも出来ませんよ。なあくん

にもないですよ、なあくんにも」

もうきりきり舞いだった。先生は僕のうろたえぶりに杭を打つように

「なにもなくてもいいよ」

とさりげなかった。

僕はこんなやりとりに早くフタをしたかった。そんなもたもたの中で一つの提案をした。

「僕の部屋は困りますが、先生、平塚さんの家ならどうでしょう？」

と、切羽詰まりながら言った。すると先生はするりと

「平塚さんの家か……」

やっとの思いだった。僕のワンルームに来られるこの話にピリオドが打てるのを身近に感じた。もうクラだった。先生は平塚さんのことはよくご存じだったが、平塚さんには何の許可も受けずその場しぎに言ってしまった。先生はテーブルに両肘を立てられたまま

「そうか……平塚さんの家か。それで平塚さんの家はどんな家かね？」

と訊かれたので

「そうそう、三室戸みむろどの藤原先生のお家のような感じですよ」

と言いつつ。先生はにっこりされながら

「じゃあ、平塚さんのところにしようか。しかしだね佐谷君、平塚さんは「うん」と言ってくれるかね？」

と訊かれた。僕はウヤムヤに

「大丈夫です、先生が来られるとなったらきつと喜んでくれますよ。間違いありません。大丈夫です。あとは僕に任せて下さい」

と、一人勝手に決め込んで言ってしまった。あとは野となれ山となれであった。

そのあと、「いつにしようか」の話になり

「三月三十一日は僕の誕生日ですので三月にしません？」

と言うと先生は

「平塚さんに都合がなければ私はいつでもいいよ」

と言われ、もうその話は一旦そこで終わりにかけていた。

ただ、一つ気になることがあつて先生に尋ねた。

「先生、先生は本部講師ですし祈願部長ですし一個人の家に来られてもいいのですか？」

と言うと

「そんなこと言つてたら私は結婚式にも出られないじゃないか」

と、ぼつりだつた。

「それもそうですね」

と思わず相槌を打つてしまった。

平塚久子さんが「私の中の榎本恵吾先生」に寄稿された「鳥飼う人」の誕生はこんなお酒の席で生まれた。

「榎本先生が平塚さんの家に行かれますがいいですか？」

と電話で伝えると、平塚さんはびつくりされながらも快諾して下さいました。快諾されたものの、そのあとが実に大変そうだった。先生を迎えるための掃除で、もうクタクタになられていた。普段掃除しない所も掃除をされていた。大掃除である。毎日毎日が掃除掃除だったと聞かされていた。平塚さんには「掃除」

がなにもましての榎本先生のご訪問に際しての最高のおもてなしと思われたに違いない。素晴らしいことである。尊いことである。

そんな掃除のことを聞く度に僕は想い出していた。「掃除」は天地一切感謝の現われであると、研修生の時先生に教えていただいたことを……

尚、先生を迎えての平塚さんの家での食事は平成十五年の僕の誕生日に始まり、春秋と四回開き、平成十六年九月五日の榎本先生の誕生日まで続いた。

その三回目の平成十六年三月二十八日、榎本先生の音楽の先生、福場江三子先生においでいただいて、福場先生の指先に奏でられるエレクトーンの伴奏に引き込まれながら僕達八名の合唱団は榎本先生の歌声という指揮の下に声をはずませた。それは生長の家のみ教えを伝え導いて下さる榎本先生への切なる感謝の合唱であったし、榎本先生への切なる「合掌」であった……

さて、その時の曲譜は

- ① きれいなきれいな川で
- ② すがしき
- ③ はじめの光り
- ④ 輝く国よ
- ⑤ 堅信歌（演奏）
- ⑥ 光りのある内に

- ⑦ 光りの行進
- ⑧ 埴生の宿
- ⑨ 生長の家の歌（演奏）
- ⑩ 鳥飼う人
- ⑪ 母に（演奏）
- ⑫ いのちの流れ（演奏）
- ⑬ いのちの流れ

これら十三曲であった。容量の都合上、その内五曲を「榎本恵吾記念館」に寄せさせていただいた。

- ① すがしき
- ② 輝く国よ
- ③ 光りのある内に
- ④ 鳥飼う人
- ⑤ いのちの流れ

これら全て榎本先生が作詞作曲されたものである。どうか先生のこぼれる喜びをお聴きいただきたい。なお末節ながらこの歌声を収録編集され、CD・MD化していただいた平塚光氏のご愛念に深く感謝する。

## 49 最後の最後まで生長の家の素晴らしさを…

兵庫県神戸市 川上 修

私は榎本先生のお話を練成会で聞いた時、

「この喜びは一体何なんだろう？ “魂の喜び”とはこのことか！」  
と、感動したことを今もはつきりと覚えています。

その後も、“魂の感動”を味わいに、何度も宇治を訪れました。

当時、先生に頂いた本の冒頭に

「私は今、『八人しか生長の家を知るものがないとして、どうするか、を考へなさい』（注：これはかつてあつた八人委員会が尊師から戴いた御言葉）と言ふ公案を戴いて、今日まで噴火山上の舞踏を楽しみ平穩らしく日を送つてきたことを恥ぢざるを得ない。」

とご自身に対する厳しい評価が書かれていました。そしてさらに厳しく

「もし、この世に尊師も無く、聖典も無く、組織も無く、全くの一人、汝が生長の家を知つてゐる時、生長の家が汝において初発の時如何？」

とありました。

この生長の家の大真理を、たった一人自分だけが知っていたら——なんて、考えた事などありませんでした。尊師も、聖典も、組織も、皆揃っているのはあたりまえ。ここから出発している私ですから、先生

この文章を読んだ時、身震いのようなものを感じ、また、只一人この大真理を神から授けられた尊師と、この公案を戴いた八人のお弟子さん達の真剣さは、想像を絶するものだと思います。

それから何年か過ぎて、私は自分の白髪が増え始めて気になりかけた頃、先生からご著書『弟子像』を戴きました。その中に、大聖師が若い弟子に送られたお手紙の一節というのが紹介されていました。「君は髪の毛がうすくなっていたが、私はぬるま湯に朝少し残しておいた牛乳をとかして、頭髮にひたすようにしている。おかげで君より黒く多いように思った、君もこれを実行してはどうか」という主旨のものです。

これはいい事を聞いた、と思い、早速私も実行に移しました。すると白髪の進行が止まったので、「これは効いた」と思い、榎本先生にその旨お話すると、先生は私の髪をじつと見て「僕はやっていないよ」と言つて、にっこりされた。

先生が亡くなられた翌月、例年通り宇治では宝蔵神社盂蘭盆供養大祭が行われました。私は交通係りで車の誘導をしていたのですが、ちよつと目が合った人に「榎本先生、亡くなられましたね」と声をかけると、その人から「榎本先生は、最後の最後まで生長の家の素晴らしさを教えて下さいましたね。」という答えが返ってきました。

この「最後の最後まで」という言葉の中には、生前あんなに魂を揺り動かす深い真理と感動を与えて下さり、その上楠本先生のご文章「榎本恵吾部長逝く」にある「つまり坐亡だったわけである。高級霊だった。」ということを指しているに違いなかった。

「坐亡」——この最後のお姿を通して、その人は生長の家の素晴らしさをじつくりとかみしめているようだった。私は名前も知らないこの人の、「最後の最後まで」という言葉の中に、生長の家の深い深いと

ところで繋がっている多くの人が居ることを知って、大変嬉しく思いました。

今は、ウェブサイト「榎本恵吾記念館」の「講話館」を訪問し、テキストを片手に持ち、私にとっては難解な

「生長の家の信仰を続けていてくれますと、この二つの心の入れかえが出来るのです。……生と死の分かれ目なのです」

というお話を、繰り返し又繰り返し、聞かせて戴いています。

「もし、この世に尊師も無く、聖典も無く、組織も無く、全くの一人、汝が生長の家を知ってる時、生長の家が汝において初発の時如何？」

のお言葉を胸に、この重さにつぶれることなく日々を進んで行く勇気が出てきました。

素晴らしいウェブサイトを作って下さった関係者の皆様、ありがとうございます。

ありがとうございます。

## 50 先生を思い出せば、やさしい自分が…

三重県名張市 林 早苗

合掌 ありがとうございます。

榎本先生にはじめてお会いしてから、はや二十年以上経ちました。

名古屋で少し青年会活動をしていただけで、訳もわからぬまま、友達の誘いで練成を受けました。練成中の先生の講話は、いつもの「ニコニコ」と「雲」のお話でした。よくわからないまま、なんとなく居心地がよかったのか、大祭のお手伝いをし、またそれが楽しくて、そのまま研修生にならせて頂きました。

それまで、何千人という大きな会社の中で一つの歯車として仕事をするために、毎日地下鉄で通勤し、地下街で買い物をしてと、本当に今考えると機械的に唯物的に生きてきていました。それが、先生から「山川草木国土悉皆成仏、有情非情同時常道」と、ひとつひとつすべて、神の命のさきはえと感じていくことを教えていただき、宇治の自然、あの空気が感じが懐かしく感じられるようになりました。研修生の時、研修時間にみんなで興正寺や塔の島を歩いたりして、川の流れを、木の幹を、空の色を、回りの草を、花を、葉っぱの一枚一枚を、賛嘆しながら歩いてると、心の中がどんどん開放されて行き、いつも宇治川を渡るだけでも研修時間内に戻れないほどでした。先生がいつもいつも、「喜んでいいんですよ、そのままでもいいんですよ」と、本当に毎日毎日体に染み渡るようにお話しくださり、わたしの体に教え込ませていただきました。

私も、一年や二年ではまだまだわからなかったでしょうが、宇治にいる時間もおかげさまで人より長く居させてもらいましたし、出たり入ったり、幾度となくさせてもらえたおかげで、こんな私でも、大安心でいられるようになりました。理屈ではわかっていないし、言葉で文章で表現することはなかなかできないけれど、何か困った時、苦しいとき、理屈でなく、もやもやの中で、上を見て晴れ渡る空があることが、信じられる自分があることがわかるようになりました。

研修生活の中で、先生のそばの空気、先生のご家族の中にいた時の自分、その空間から何からすべてが、わたしはありがたくて、うれしくて、うれしくて……それが永遠に続くものだと思っていました。宇治に行きさえすれば、先生が「やあー！」とか声をかけてくださって、私の中で「ほおく……」なあ〜んて深呼吸したりして、また頑張れる日常にもどれるんです。

私は宇治に行くとき必ず不思議と、食堂で、龍宮参道で、あるいは大拝殿の前で、先生にお会いして、私はいそいそと車に駆け寄ったり、幽祭殿の廊下で駆け寄ったりして、満足していました。その時も、「たくさんの人を案内して来たんです」と申し上げたら、それは喜んでいただけました。前に、総連会長をしている事もお話ししたら、「頑張ってるねー」と言っていたきました。

私が榎本先生と最後にお会いできたのは、亡くなられる前の月、六月の月次祭に、地元三重の人十人位といっしょにはじめて参列し、その後、講習会の後だったので「ご苦労様会」として宇治の料亭へお食事をしに行きました。その時、少し立ち話ができました。

宇治に行けば、先生にお会いすれば、何かいつも、もやもやしてたものが晴れるのに、先生が亡くなったからそれができなくなつて、やっぱり寂しく思います。しかし、ご著書の『原案』、『弟子像』等を読ん

でいると、先生がそこに、すぐそこにいらっしやるようで、そこがそのまま宇治本山のような気持ち、先生のそばにいた時のような気持ちになれて、大安心の境地に包まれます。本当に幸せの時でした。

今は、三重で母親教室をしています。時折り質問されたりすると、先生と同じことを言っている自分がいます。そして、みんなが安心して喜べれます。これを書いてるときも、傍で子供が訳のわからないことを言ってきますが、落ち着いて子供に言っている自分がいます。先生を思い出せば、やさしい、楽しかった自分を取り戻せます。本当に、榎本先生と同じ時を過ごせたことを、有難く、うれしく思います。

先生、ありがとうございます。また、宇治でお逢いできますことを楽しみにしております。

再拝

## 51 榎本先生

東京都府中市 雪島 由美

合掌 ありがとうございます。

榎本先生とのお別れは、あまりにも突然で、今でも夢を見ているような気がします。また一方、ふと心にひらめいた事を実行して、「今のは先生が教えて下さったのかしら」と思うことがあります。

先生が教えて下さったことは数限りなくあつて、すぐには思い出せないほどですが、その中の一つに、先生が東京芸大を目指しておられた姪御さんに宛てて書かれたお手紙があります。どういう経緯で私がお手紙を見せていただいたのか、もう記憶にないのですが、その内容は、

「春になつて アスファルトの割れ目から顔をのぞかせる小さな緑があります。アスファルトは固いのに、そしてアスファルトに真っ先にあたる緑の先端はやわらかい新芽なのに、アスファルトを割つて出てくるんです。そこには、みずみずしい新芽のために アスファルトが道を譲るような、生命の不思議さがあるのではないのでしょうか」

というものでした。

この文章は（もちろん、この通りではありません）ずっと私の心に、「困難とみえる事態が起こつても、喜んで進めば、すつと道が開けるんだ、大丈夫だよ」と、小さな新芽のように穏やかで、でも確固たる喜びの灯を、ともし続けてくれていきます。

また、「先生、こんな嬉しいことがありました！」とご報告すると、「そう言って喜んでいるあなたに、僕は満足したゆつたりしたものを感じますよ」と讃嘆して下さった先生。自分でも「融通のきかない、堅い人間」の自覚のあった私は、少し気恥ずかしく、でもこの私の中に？ と、嬉しくてたまらなかったのです。

未熟で何かと失敗の多かった私達の姿の奥に、光輝やく実相を観<sup>み</sup>続けて下さった先生の愛の大きさ、ご信仰の奥深さを、年月を経て 自らがあの頃の先生と同じ年齢になった今、しみじみと復た感じさせていただけます。

奥様と四人のお嬢さん達との思い出（こちらは まだまだ現在進行形！）も、暖かく楽しいものばかりで、このように豊かな心の糧を下さった先生とご家族の皆様には、感謝の言葉を尽くしても尽くしきれません。

一信徒として、主婦として、あわただしく過ぎる毎日ですが、私達が各々の場で喜んで生活し、その喜びが光となって周囲を照らし広がることを、先生は喜んで下さっているのではないかと思っています。

今回、この文を書く機会を与えて下さった奥様をはじめ ご尽力下さった皆様に、心から感謝申し上げます。

再  
拜

52 ただただ認めて肯定してくださいっ た先生

富山市 中土 明美子

桜が咲く季節になろうとしています。唯咲いています。

榎本恵吾先生が

「みごとに満開の桜を眺めていると、何時までも眺めていたくて、その場を去りがたい気持ちになります。が、誰も知るものがない山奥で唯咲いている桜の木があるのを思う時、安心してその場を去れる。」と言っておられたことを思い出します。

幽齋殿で、夕立か、嵐だったのか、雨がものすごく降っていたときのことです。

「すごいよね、雲は自分で雨になって落ちてくるんだからね。」

六角のお堂の屋根の勾配から滝のように落ちてくる水のかたまりを眺めつつ、楽しそうに、また真剣な顔つきで見えておられました。

その雨の落ち方は、すがすがしいほど気持ちのいいものでした。

榎本先生に戴いたものは、言葉にも何にも表現できないものです。

唯、先生のそばにいれば満たされて、充足して、安心して居る事が出来る、そんな場所でした。ただた

だ認めてくださり、肯定して下さっていました。それは今でも、先生のことを思うだけで、感じられま  
す。

朝焼けが美しいと思えば、「先生が私のために用意してくれたのかしら」。夕日が美しければ、星が美  
しければ、青空がすがすがしい時も、吹く風が気持ちよいときも、「先生、ありがとうございます。」という気持ちにな  
ります。何があっても大丈夫、先生が祈っていてくださる。守ってくださいと。

神というものを人間に一番近づけて表現してくれたものがあるとすれば、私にとっては榎本恵吾先生で  
あり、その存在があったがゆえに、「神とはこんなにも、私のことを愛してくれて、思っていてくれて、  
喜んで居てくれるもの」と思えます。「先生ありがとうございます」が、「神様ありがとうございます」になっ  
ています。先生が  
間におられるおかげで、とても身近で、「そんなことがあっても不思議ではない」という感じになります。

小さい時から生長の家に触れ、「人間神の子、無限量。何でもできる、強い子、良い子。」——と教えら  
れながら、どこから何処までが神の子で、何処から自分の我なのか解らなくて——どこから何処までが実  
相で、どこから何処までが現象なのかも解らなくて——「人間神の子・無限量」は修行の果てに得るもの  
で、私の手の届くところのものではない——と、あきらめていました。

榎本先生がお母様を亡くされ、葬儀を終えられ仕事に戻られたときだったと思うのですが、「通夜の席  
で、皆さんが母のことを、〃あんなにも素晴らしい人だった〃 〃こんなにも素晴らしい方だった〃と褒め  
てくださる、でもね、〃素晴らしかった母〃と、〃光明燦然と輝く母〃と、どっちを取るかというと、や  
っぱり〃光明燦然として光輝いている〃ほうなんだね〃というようにことを言われました。

それが今でも、私の「現象と、実相」の境界線になっています。あれをしてから、これをしてから……  
と、「やったことの成績」で救われようとする自分縛ってしまっていますが、そんなもの無しに唯、光

輝く「生かされっぱなしの自分」を取りもどせる基準になっています。

ただただ感謝。先生にめぐりあえた事は、私の最大の喜びであります。

思っていることの百分の一も言いあらわす事が出来ないのが歯がゆいのですが、それでも、ほんの少しでも、先生への感謝の気持ちが表示せればと思い、言葉にすることにしました。ありがとうございます。

53 宗教家としての天才を観た思い出

山梨県 服部 至

私の記憶に間違いがなければ、榎本先生を目の当たりにしたのは、一九九三年四月の短期練成会で御講話を拝聴した時である。肉眼で拝顔したのは、これが初めてで最後であつた。当時学生であつた私は、先生の講話のうちに、宗教家としての先生の天才を観た思い出がある。

永久に真実に存在するもの、すなわち実相を唯一無二の光明存在として語られる。

生滅変異し、在るが如くみえても実在しないもの、すなわち現象を、本来無し、と喝破される。

実相を「ある」「なし」の二側面から方便を究竟し、縦横無尽、自由自在に語り尽くされていた先生は、今も光明説法で諸霊を御導きされているのであろう。

拝。

## 54 僕にとって大事な、大事な、大事な先生

東京都中野区 望月 隆史

僕が榎本先生に初めてお会いしたのは、平成七年四月、練成に初参加させて頂いた時です。

その時、先生の個人相談を受けました。なんとなく指名させて頂いたのです。

自分もたまたま音楽好きだったので、なぜか映画「アマデウス」の話になりました。

「僕はモーツァルトが一番好きなんですけど、好みは人それぞれですから、サリエリの方が好きな人もいますよ」と言うと、「君は面白いことを言うね」と先生は軽くお笑いになり、その場で自作の楽譜をプレゼントしてくれました。

どの曲にも、平和で何の力みもない雰囲気がありました。それから練成にいく度にお話し頂いたり、楽譜を紹介して下さいました。

中でも「わが子に語り継ぐ歌」というのは、ピアノと語りが交互に出てきて、あんな感じで、もし聞いた人々の病気が治ったら、こんな素晴らしい事はないと思います。

先生は「生長の家の人」という型に入らない人も、愛していくという、おらかな感じでした。

人の良くないところなど見たがらない、太陽のような方でした。病気等の相談で、「……こういう時、どうしたらいいですか」と尋ねると、「雲が出ていると思えばいい」のひとことで終わりです。あまり物事を現象の側からつくつくことは好まれなかったようです。

表現の方も、何かを具体的に断定付けるといふ話され方は少なかつたように思います。

今から思えば、常に中心をはずさずにお話されたのだと思います。

また、先生はあんなに信仰を高められても、他に対して批評的になるような雰囲気ではなく、常に自身を高めようとされているふうに見え、そんなところが大好きでした。

出会う人に対して、高めたい(愛)、心底良くなつてほしいというのが伝わってきました。下げる(サバキ)方には向かない、というよりそんな事のできないような、優しい、繊細な先生だったのだと思います。

講義の方は、説明というよりも、感覚的に体で伝えるという感じで、パツと入ってくる時もあれば、何を言われているかわからない時もありました。

ただ、おっしゃりたかつた事をあえて一言で表現するなら、「いつも喜んでいなさいよ」だと思います。ただ最初の頃は、「その人に合った喜び方でいいから、喜びなさいよ」という感じでしたが、最後の方は、ネットの「講話館」にもあるように、「自分の出来た事に対して喜ぶというのでは、感謝になりませんよ」と、以前より厳しくなつておられたように思います。

実は、最後にお会いしたのは、僕は持病のB型肝炎が肝硬変になつてきていて、もう新薬をつないでいくしかないというような事を慶応病院で言われ、絶望的な気持ちで宇治の練成会に行つた時でした。

そこであえて厳しいご指導を頂き、その後なんとなく(二年余りほど)足が遠のいていました。

先生が亡くなられた事を知つたのは、それから二カ月近くたつた九月の本部聖典講義の中でした。

講師の方が「榎本先生、この間亡くされましたね……」と言われるのを聞いたとたんに、僕の頭の中は真っ白になり、その日の講義の内容とかはまったく覚えていません。ただ部屋に帰つて一人で泣きまし

た。

先生は、最低アト十年以上は生きておられると、心の中で勝手に決めてかかっていたのでした。

それから当分は、心身ともに何ともつらい日々が続きました。何もしてあげられなかったからです。

いつか、自分は最高に良くなって先生を喜ばせたかった。でも実際、うんと喜ばせることも、お返しに何かさせて頂くことも、何一つできなかった。

ご指導に対して、自分がどれだけ応えられたか、点数をつけると、これが〇点なのです。

十点でも二十点でもなく、〇点です。

「講話館」ビデオで、「あーしてこーしてこーしてあーして……から喜ぶのではない」

というお話、あれは僕のことを言われていると思います。

お恥ずかしい話ですが、僕はこれまで社会人になってから、人に意地悪したり落とそうとした事はただの一度もないと思つたので、「自分ほど悪いことをしない人も少ない」と思っていました。（＼＼なのに病気になるって、とか……）

しかし、先生が亡くなられた瞬間に、「自分ほど悪い者はいない」に変わっていました。

（ついでに、現在は別の意味で、「自分ほど強情な者もいなかった」とも……）

ニセモノの自分のままで頑張っている時、人は苦しむものだったのですね。

また、亡くなられた事が信じられず、「先生は、誰かを指導するために死んだふりをされているだけで、本当はどこかで生きておられる」などと、小さな子供が言い出しそうなことを本気で思ったりしました。

かつて練成期間中、幽斎殿に向かつて歩いて行こうとしていたら、先生が車でとなりに来てドアをあけ

て下さった時のことが、まるで昨日のことのように思い出されます。

(車の中は、自分の好きなモーツァルトのシンフォニーが…涙…)

現在、医者にも行かず、なんとか普通に仕事ができている(色々、問題こそあれ)のは、最後の指導で先生から頂いた「愛すべき冷淡療法」のおかげだったのかもしれない。

僕にとっては、先生は一番優しい先生であり、同時に一番厳しい先生でもあったのです。

もしかしたら、僕に対して「感謝の力の字もわかったらん。困ったのゝ。もう待てんよ」とあきれて、さっさと霊界に行かれてしまったのかもしれない。

それでも、僕にとっては大事な、大事な、大事な先生なのです。

55 はじめ 一のひびき

兵庫県六粟市  
江見次夫

「それぞれの指も一からだね」と  
ご自分の手首をおさえておられた。

「どうだい」とか「やってるかね」といつて  
いつも声をかけてくださった。

「はじめのはじめ、もとのもとかからだよ」とかいつて、  
「ぼくは、伝え方の研究をしているんだよ。」とおっしゃっていた。

「兄さんのように思っていてくれたらいいよ」とも。

「君も飲みなさい」となみなみついでくださった。

「光、光、光のみ」と歌っておられた。

かんぱつ入れず「ダメダ！」をいただいた。

「子供の名をつけようか」とも。

「祈っていたよ」と声をかけてくださった。

「祈っているよ」と見送ってくださいました。

「味わうんだよ」とも教えて下さった。

今、私の中で

先生が光ハジケルように 復活する。

私以上に私をご存知だった。

大愛そのものだった。

先生、

天かけり、国かけり

我れらをおおいたまえ。

合掌

## 56 多くの愛と、生きる喜びを頂きました

京都市右京区 加畑 尚代

先生とお別れしてから、一年半が過ぎようとしています。靈界に旅立たれたことが、いまだに信じることが出来ません。

目を閉じると、先生の笑顔がよみがえります。

多くの愛を頂きました。多くの生きる喜びを与えて下さいました。

初めてお会いしてから、早いもので 二十五年が過ぎました。初めての練成会の参加……

“ありがとうございます”と合掌に慣れず、違和感を感じておりました。先生から、研修生のお話を頂きましたが、素直に受けることが出来ず、心が頑かたくなに閉ざされていた私でした。しかし、いつもニコニコと合掌されるお姿に、心がいつの間にか柔らかくほぐれてゆきました。

自分を責めつづけてきた私に、「そのままですばらしい神の子」の教えを云い続けて下さいました。いつも変わらず、やさしさを下さいました。どんなにうれしく、ありがたかったことでしょう。又、御家族の皆様とも親しくさせて頂き、あったかい、すばらしい家庭に触れさせて頂きました。

先生御夫妻・御家族の皆様に出ってなければ、私は、結婚してなかったと思います。

「結婚って、素晴らしい」と思えたのは、先生御夫妻に出会えたからなのです。

素晴らしい神縁を頂き、いつもいつも暖かく見守って下さった先生、一子奥様、実代ちゃん、久実ちゃん、信ちゃん、妙子ちゃん、ありがとうございます。只、只、感謝の気持ちで一杯です。

又、不思議な神縁で、先生のまわりに集まってきた研修生の皆様と、今でも交流があること、ありがとうございます。

先生、今 霊界で、どのようにすごされていますか？

懐しい方々と、お会いになりましたか？

どうぞ、安らかに、お過ごし下さい。

## 57 “只々光” だったのですね

千葉県松戸市 服部 洋子

合掌 ありがとうございます。

榎本恵吾先生が天国に旅立たれて、はや二年目近くとなりました。

先生とはじめてお会いした時の事が、まるで昨日の様に思い出されます。すでに二十年以上も前の事です、正に「光陰矢の如し」です。

先生との思い出は余りにも多すぎて深く、筆を取ってもまとまりません。ただただ感謝・感謝、「ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。」この言葉のみです。

先生が何時もおっしゃって下さった、「暗は無い、只々光」だったのですね。はじめから光だったんですね……この言葉を噛み締めながら、先生がいらっしやらないのは淋しいけれど、既に天国でご活躍なさっていらっしやるのですから、私も元気を出してこれからの日々を、有意義に過して行きたいと希って居ります。

私の心の中では、何時でも、先生がニコニコされながら見守って下さっています。

又、一子先生がお元気でご活躍なさっていらっしやる事も、大変嬉しい事です。

榎本恵吾先生、本当に、本当に何もかもありがとうございます。

合掌再拝

## 58 先生に教えていただいたこと

東京都世田谷区 石田 宗之

私は平成十年一月の初詣練成会で榎本恵吾先生にはじめてお会いしました。晩年の一年間は月に二回ほど、宇治に二、三泊しては先生にご指導いただけるという幸運にめぐまれました。今もなお変わらず導いて下さる先生に、感謝の想いでいっぱいです。先生、ありがとうございます。

まだ寒さの残る三月のはじめごろだったと思います。宇治で定宿にしている本山に程近い民宿「ふくや」が満室で、やむを得ず宇治第一ホテルに泊ったことがありました。会話の途中で先生に、「今回はふくやが満室で、第一ホテルにとまっています」と申し上げると、「へえー、満室なんて、そんなこともあるの。珍しいね」と仰ったあと、顔を曇らせて、「第一アサヒからここまで何分くらいかかるんだ。」と尋ねられました。「二十五分くらいです」とお答えすると、「そんなにかかるのか……そんなにかかるのに今日まで気付かないで、すまなかった。」——明日からは自分が迎えに行く、と仰るのです。ぼくはびっくりしました。先生はただでさえぼくがいるときは気を遣われて、ご自宅での朝の貴重な時間を削って、いつもよりも十五分早く三時十五分ごろに来てくださっているのです。本来なら遠慮すべきだと分かっていますが、嬉しくて言い出せませんでした。

翌朝、ぼくは二時五十分からロビーで先生をお待ちしました。第一ホテルのロビーは階段をあがって二

階にあるので、外で待つていたほうがよいのはわかる。でも寒い。ぼくはロビーでボーっと『甘露の法雨』を広げて誦んでいました。待ち合わせにはまだ間があると思つていた三時五十分ころ、はあ、はあ、いいながら階段を駆け上がってくる音がすると思つと、「待つた？」と先生が入り口から駆け込んでこられました。ちよつと階段を上るのでも息が切れる超高血圧の先生が、午前三時に全力疾走で階段を駆け上がつて迎えに来られたのです。車に乗つてから、ぼくは恐縮して申しました。

「先生、お迎えにきていただいて……とても嬉しいんです。本当に嬉しい……でも、ちよつとやりすぎだと思つんです……普段と同じ生活をしていただきたいんです。だから、明日からはお迎えは結構ですから。」と、やつとのことで申し上げると

「そんな……ぼくだつて幽齋殿に行くのに迎えにくることくらい、たいしたことはないよ。これから第一アサヒ（ラーメンチェーン店の名前だそうだが、先生は第一ホテルをこう呼ばれる）のときは、迎えにくることにするから。」ぼくはやつぱり断らなければと思ひ、「でも、やつぱりまずいです。」と申しました。すると先生は、自分が服部先生の誌友会に間違えて一時間早く行つてしまったときの話をされるのです。

「襖があつてね、その奥がふだん誌友会に使われる部屋で、どうも先生はそこで寝ておられたらしいんだよ。奥様が『あなた、榎本さんが来ましたよ』といわれると、ばたばたと音がして、先生は和服に着替えられてね、いつもどおり机を出して、ぼくと向き合つて、合掌されて、『お待たせいたしましたーツ』つて頭を下げて礼拝されるんだ。それでね、『この間、帰るとき、玄関の電気がついていなくて暗かつたでしょう。』ぼくが「はあ」つていうと『失礼いたしましたーツ』つて、また……。ぼくはね、この弟子は谷口先生に同じように扱われていたんだなーつて思つたよ。」勿体無くて、涙が出ました。こんなにみずばらしい自分に、宇宙の真理を悟つておられる先生が……。先生はどんな人に対しても、こうして接せ

られるのだ。皆が本当に神に見えて、貴い渾べての渾べてに見えて、拝まずにはいられない、それを実感で生きていらっしゃるのだと思いました。

先生はよく私に「現象は無いとは、言葉でない！と言えるすべてのことだよ」と仰いました。先生からお教えたいただいたことを約言すれば、本当に存在するものは何かということと、これを如何に実践するかということが、全ての出発点になるのです。

ある日、神想観をしているとき、ふと先生のお言葉が思い出されました。

「無ってというのは、限りなく自分は無いということ、生かされているというか、自分じゃ無いということ——だけど、絶対と云うほうは、絶対に誰からも生まれる、生んでもらったものじゃないということ——その両方が味わえてくるというのが、無の門闕で、無、無、無といったときに内に甦ってくるというかね。」

私は、ここがポイントだと思いました。一切のものは無い。時間空間の世界も無い。言葉で「無い」といえるものは全て無い。もちろん自分もない。外界は無い。自分は無いとき、自分の中心、内側に、ぽっかりと、澄み切りの「ありがたい」という思いが広がってきます。この思いは、空で、ないといか言いようがないのですが、澄んだ、でも今まで感じたことがない、ありがたいような気持ちでした。このぽっかり開いた空隙のまわりを、もやもやしたものが包んでいます。

そのとき眼を上方に転じて、はるか無限遠方を思いました。絶対で、渾べての渾べてである、宇宙を包むように存在するものがあります。もやもやを越えた最遠方、最も遠い遠心、無限に大きいはずの絶対さえもまあるく包む、さらに大きい存在。それは無であるが、そこにも自分？がいるような気がします。自

分とは云えないような自分です。

中心にあるからつぽの空隙のような澄んだ「ありがたさ」である自分と、無限遠方の遠心にいる自分。遠心から出発して、中心に向って、無い無い、と現象宇宙を否定し、一つ一つの物象、もやもやした想念のかたまりを否定していくと、突然それら全てが、中心にある澄んだ「ありがたさ」の空隙に向って、自分からペシヤンとつぶれてしまい、遠心の円と中心の円がひとつになったような気がしました。遠心から中心に向う「無い」という思念と、中心から遠心に向うそれ自身で萌え上るような「ありがたい」という思いが交流して一致し、澄んだ気持ちがいっぱいに広がったのです。眼のうちが明るくなって、眼から光が出るようです。以上の私の表現が正しいのか、どこまで捉えられているか、はなはだ心もとないのですが、一切のものを無いとしたとき広がってくるありがたい思いのことを生命といい、これのみが唯一の實在であるということ、このことを先生は私に伝えたかったのではないかと思います。

自分が消えるということは、神によって生かされている、一切のものが神であって、神から礼拝されている神の一人子の喜びが味わえてきて、ありがたくなつて参ります。と同時に、一切のものを生み出す存在が自分であり、神さえも生んだ自分であるという視点もあるわけです。この両者、中心にあるありがたさの“自分”と、遠心にある絶対の向うにある無（自分）がびたりと一致するのが、生長の家の久遠の今の哲学だと思っています。

先生は常に、実感として久遠の今だけを見ておられたのだと思います。いつも、あらゆるものから、生かされている感謝を味わっておられました。

「物質は無いとは、これを光として生んでいる、神と言えるということなんだねえ。光として、神として生み出した側に立っているんだねえ。」——人と応対するとき、視点を転換して、この久遠の今を相手に

見ておられたのだと思います。主客を転換して、自分は消えて、相手が神であって自分はあなたによって生かされているのですよ、という礼拝のお姿になられるのだと思います。いつもこの、久遠の今の主客の入れ替えを自由に行って今を味わっておられたのだと思います。出会った人を見るとき、そこに今を見て、自分は消えて礼拝しておられますが、どうも、突然感覚が変わって、通常われわれが見ている景色が消えて、礼拝される側にまわってしまったようなのです。先生がたくさん描かれた観音様の絵は、先生を拝みに先生のまわりに日常的に現れていたようです。いずれにせよ、生きもののように動く久遠の今の運動とともに、自由に主客に剖判し、それを逆転、展開して自在に拝み合う生活を楽しんでおられたのではないのでしょうか。自由に自分と相手の 久遠の今を一体化させ、礼拝と感謝を味わっておられたのだと思います。

ぼくの久遠の今は、先生と全く関係なしに存在しているものでした。先生の説法を浴びるように聞き、求め、求めしてきましたが、いままでぼくがやってきたことは殆ど見当違いであったと思いました。先生が常々仰っていたように、ただただ、自分は無い、ということを追求することだけが、正しい方向だと思えます。先生は晩年、マクドナルド・ペインという人の、キリストの靈示集についての解説を毎日記しておられました、「これにはキリストは『私の説法はあなたを悟らせることはないのだ』って言っているね。ぼくはいっぺんでこの本を信用したね。」と仰っていました。指揮者のチェリビダツケの演奏に感動した人が、「あなたの指揮がすばらしかったからです」と賛辞をのべると、チェリビダツケは不愉快そうに「あなたが感動したのは、あなたが感動したのであって、私の演奏は関係がありません。」と云ったという話を聞かれて、チェリビダツケ指揮の音楽を愛聴していらっしやいました。先生はいかに自分が消えて、その人を自分の内側のすばらしさに目覚めさせることができるかという実験をされていたのではないのでしょうか？ 時間空間がない、久遠の今の一点を正確に貫いたような先生は、必然強烈な靈的エネルギー

―を放射されていましたが、ご自分はそれを可能な限り抑圧し、おもてに出ないようにされていました。自分ひとりが神としてあがめられないこと、私たちひとりひとりが自分のうち側だけをみて、神の一人子の喜びを味わってもらいたい、それだけが先生の念願であったように思います。ぼくのこの力は「ぼくの趣味です！」とはつきり明言され、喜びはみんな平等だよと、ぼくだって、吉田先生だって、道元も釈迦も、谷口先生もみんな平等だよ、それ以上かもしれないんだよ、と仰っておられました。

ご著書『無神』は、先生のお姿そのもののように感じます。最後にそのご文章を写させていただきたいと思えます。

もしも、神というものがあつて、その神に向かつて誰かが「神は無い」と言つたとすれば、神は、「その通りである。私は無いのである。」と言われるであろう。

そして逆に、その人に対して、「あなたによつて私は生かされているのであります」といつて礼拝されるのではなからうか。

神ご自身が『私が全宇宙の生みの親である。○年○月○日。』などというものを、どこかに建てておられるとは、どうしても思えない。もしも、そういうものがあれば、そんなものを、自ら建てられるようなものを神と呼ぶ訳には行かない。

神は全宇宙を創造し給うていながら

その姿を消しておられるのであります。

神は、人間を礼拝し給うているのであります。

春には花を咲かせ、野山を緑でかざり

雨を降らせ、陽を明るく

風を渡らせて、何とかして人間を喜ばせてやろうとしておられるのである。

生きた花々草々をもつて、神は我らを供養し給うているのであります。

しかし、依然として神はご自分を消しておられるのであります。

どこまで消しておられるか。

それは、神がお生みになった人間に「神はない」といえるようにしておられるまでであります。

「神はない」という声も、神のいのちによつて人間はそう言っているのであります。

そこまで神ご自身で、無神になっておられるのであります。

## 59 永遠の榎本恵吾先生

京都府宇治市 大熊 良樹

(宇治別格本山職員)

### (一) 實相なるもの

榎本恵吾先生の「實相なるもの」という演題の講話のビデオがある。

榎本先生の告別式の後、『谷口雅春先生十八年祭』当日の、その講話のビデオが出てきた。いきなり先生の講話は「お葬式の話」から切り出される。山口悌治先生の本部葬で谷口雅春先生が『本日は、おめでとうございます。今日は、山口悌治さんの霊界への入学です!』と言われたという話であった。その時、まるで霧が晴れたような思いであったという。この御教えでよかったと心から思ったという。その感動が朗らかな明るい声で語られていた。

思えば平成十四年九月。初めての十日間の練成を受けさせて頂いた時、早朝行事にて「神は渾ての渾てだった」と忽然、涙がポロポロと流れ出で世界が変わった思いを得た。今迄の二元論でとらえていた自分の世界が全て虚構であったのだ、と知った。その日の早朝行事は、他ならぬ榎本恵吾先生の先導であった。

また、特に感慨深い思い出がある。入山して二十六日目。入龍宮幽斎殿にて榎本先生から大切な御著書を頂いた。本を開くと「謹呈 大熊様」と揮毫されてあった。驚いたのはその経緯である。実は私を知る以前から揮毫してあったというのだ。揮毫された日をお聞きすると、「平成十四年八月十八日だった」と

答えられた。なんと、三カ月以上も前の事だ。その日、飛田給の大隈講師への記念品としてお渡しするつもりが、なぜか「大熊様」と書いてしまった。先生は、「不思議だねえ。だから、あなたにしかあげられないんだよ。ずっと私の部屋に置いてあったんだよ」と嬉しそうに笑われた。その笑顔が今も忘れられない。

榎本先生の講話のビデオは、不思議な事に「宗教家の死」というテーマで締め括られている。

『谷口雅春先生は、病なし！ 迷いなし！ 罪なし！ ありがとうございます！』と云われて亡くなったんですね』『宗教家の死に出会えるという事は、本当にスバラシイ事ですよ！』

その響きの中には、久遠の「今」を生き抜かれる「証」としての遺言（コトバ）を託された人々への、更に明るい祝福を感じずにはいられない。永遠不滅の生命を「今」生きる輝きを感じずにはいられない。常に純粋な求道者であり、多くの人々に敬愛された榎本恵吾先生。本当にありがとうございました。これからも私たちを、天翔り国翔り、太陽のような笑顔でお導き下さい。 合掌。

〈宇治別格本山ホームページ E・VOICE 二〇〇五・七・二九所載〉

## （二）魂を込める生き方

榎本先生について、忘れられない思い出がある。私が宇治別格本山に上山した翌年の事。本山職員の親睦会である神睦会の旅行先で、先生が大切にされているお酒を一杯下さって「これは私の血（霊）だからね!!」といわれた。楽しい席でもあり冗句かと思っていた。本山に帰って再び参道にてお会いした時、「大熊君、あのお酒はボクの血（霊）だからね!!」と本当に真面目な顔で繰り返し言われた。

その日は珍しく外食であった。家族（妻と5人の子供たち）と共に近所の回転寿司・カップパ寿司に行っ

た。「これは私の血（霊）だからね!!」と言う榎本恵吾先生の言葉はどういう意味なんだろうね？ーと妻に問いかけ、はしゃいでいた。実は尊敬する榎本先生からの言葉に嬉しかったのだ。しかもその後、榎本先生にまつわる愉快なエピソードを二つ三つ、興に乗り話していた。

すると翌日、榎本先生がそばに来られて、「大熊君、昨日はカップパで楽しそうだったねー。実はね、ボクは大熊君の横（レーンの向かい）に居たんだよ。」（笑い）先生は嬉しそうに「あんまり楽しそうなんで、声をかけなかったんだけどね」と付け足された。

榎本先生は本当に、いつも愉快で不思議な先生だった。あのお酒の一件にしたって、今思えば、ただただ、お酒一杯にしても、心から祝福しなかったのだ。私のみならず、私達は皆、常に全身全霊で歩まれる榎本先生に常なる「喜びの祝福」を受け続けて居たように思う。常にすべての人に、ものに、事に、魂を込める生き方。自分を尽くす生き方、そのもの。榎本恵吾先生とは、まさにそういう先生であった。そして、研修生も奉仕員もパートナーさんも、職員もみんなみんなそんな先生が大好きだった。

今、私たちの心の中には魂を込めた生き方の持つその迫力や、魅力や、その感化力も含めて、こんなにも榎本恵吾先生が私たちの中で大きな存在だったのだーと痛感している。全てのものに事に魂を込める生き方、これを『久遠の今を生きる』といい、『神の子を生きる』というのかも知れない。榎本恵吾先生の後ろ姿で、じかに教えて頂いたありがたい教えの一つである。

〈宇治別格本山ホームページ E・VOICE 二〇〇五・八・五所載〉

### （三）神はすべてのすべて

榎本恵吾先生の告別式の折、楠本総務より「榎本恵吾さんは徳久先生を大変尊敬しておりました。」そ

の徳久先生は、現場を離れて一時間後になりました。「そして榎本さんは仕事を果たされて5時間後  
なくなりました」との言葉があった。

その後、当日の五時間がどのような様子であったかを知った多くの人々は、なんと榎本先生らしい、素  
晴らしい有様だったのだろうと涙した。

七月十二日。三時までには神想観先導、部長会議とその日の仕事を終えられた榎本先生は、帰宅。不調を  
訴えられて市内にお住まいの三女・四女を呼び寄せられた。すぐに奥様も帰宅。ご家族と居合わせた藤  
原職員とで、聖經を読まれたそうだった。

その後、駆けつけた祈願部の畑本職員に翌日の神想観先導に関する指示をし、「聖經を読んでくれるか  
ね」と自宅に招き入れた。そこに、なんと服部仁郎先生自筆の人型が届いたというのである。実は榎本先  
生はお若い時に服部先生に学ばれ、先日の教修会で服部仁郎先生自筆の人型を持っているという古くから  
の信徒さんに、コピーさせてもらう為に送ってもらう事をお願いしたのだそうだった。しかし送られてきた日、  
時間はまさに偶然である。榎本先生は、「祈願に携わる者にとってこんなに喜ばしいことはないね」と  
心から喜ばれていたそうである。

そして引き続き聖經『甘露の法雨』を家族とともに読誦。最後に「實相を観ずる歌」を皆で音読。その  
直後、姿勢を正されたまま坐亡されたという。

昨年未の末。本山にて、職員の結婚披露宴が行われた。その時に榎本先生が贈る言葉として「私は生長の  
家とは、家庭信仰であると思います。」といわれたことがある。まさにその言葉通りに、家族に囲まれ、  
共に真理の言葉を響かせながら坐亡された先生であった。

思えば、最後に音読された「實相を観ずる歌」の歌詞は、『神はすべてのすべて』で始まる。まさに「實  
相独在」を語り、「實相なるもの」という演題で語り続けられた先生そのものを現すような聖歌である。

私もまた、かつて先生の先導する早朝行事の中で、聖經の『神はすべてのすべて』の文言に涙した一人でもある。

告別式の日、多くの人々が涙した。だが、別れが悲しいのではない。生長の家の御教えは「人間神の子」永遠不滅である。榎本恵吾先生の限らない愛に、ありがたくてありがたくて、言葉なく泣くしか出来ないのである。感謝あふれて涙あふれるのである。先生、教えて頂いた家庭信仰。實相独在の信仰を本物にする事が出来るよう精進致します。先生の太陽のような笑顔を常に胸に行じて参ります。先生のように、本物の生長の家人となれるよう。

〈宇治別格本山ホームページ E・VOICE 二〇〇五・八・六所載〉

#### (四) 榎本先生と宇治クリーン運動

九月の宇治市内におけるクリーン運動の通知が商工会議所から届いた。地域のクリーン運動であるが、本山では欠かさず二十〜三十名が参加している。前回は七月十日に実施された。早いもので、あれから約二カ月がたとうとしている。

前回は曇天で、きわめて涼しくさわやかなゴミ拾いであった。三十数名の本山員参加者の中でも、部長自ら参加して下さったのは、榎本恵吾祈願部長と小林健二経理部長、長田忍練成部長の三人だった。とりわけ榎本先生は上機嫌で、行事の後「イヤー今日は本当に素晴らしい宇治クリーンだったよ」と述べて下さった。皆嬉しそうだった。榎本先生の上機嫌な姿や発言は、常に周りの人々を幸せな気分にしてくれる。榎本先生が終わりのお祈りを十一時五十五分頃に大拝殿前で行うと、待っていていたかのように雨が降り出した。

その翌日だったろうか、県神社の前で、散髪屋さんからにこやかに出て来られる榎本先生をお見かけした。きつと散髪屋さんともなかよしで、楽しい会話が弾んだのだろう。

あれから二カ月がたつ。一緒に宇治クリーンをさせて頂き、県神社前でお見かけした翌日、先生は霊界に旅立たれた。誰だったろうか、近い方が、「こうなる前にちゃんと散髪までしてー」といわれたが、私も言いたい。

榎本先生は、旅たたれる二日まえ。散髪だけでなくて、お世話になった宇治市内を、ありがとうありがとうと言いながら、捨てられた空き缶空き瓶を拾い掃除をして、「イヤー今日は本当に素晴らしかった」と言つて旅たれました。

聞くところによると、先生は天ヶ瀬橋周辺がお好きで、時折早朝のドライブコースに選ばれていた——ということであった。

今回九月五日の宇治クリーンは、台風十四号の為雨天中止となった。延期の日程調整を私が担当しているのだが、なぜか浮かない。しかし先々月からの経緯と自分の心を見据えた時、そこに何があつたのか理解出来た。

そうだ。榎本先生が限りなく愛した宇治川沿いをみんなで掃除させて頂こう。先生の方まで大きな声でありがとうございますと唱えてゆこう。あの日のように「明るく朗らかに、上機嫌で！」……今もあの日の上機嫌な先生の笑顔とお声が蘇る。……

〈宇治別格本山ホームページ E・VOICE 二〇〇五・九・七所載〉

## 60 観音様の慈愛にみちたお顔そのまま…

奈良県上牧町 福山 美津子

合掌 ありがとうございます。

二十五年ほど前、昭和五十七年十一月二十六日、榎本先生が、斑鳩いかるがの地、静寂のうちに凜りんとした法隆寺に、研修生の方々とご一緒にお見えになりました。

回廊から金堂、五重の塔、大講堂と拝観しまして、大宝蔵殿にまいりました。

長身の観音様…百済くだら観音様がいらつしやいました。

先生は観音様の御前で合掌され、しばし観音様とお話しをされている様に感じました。

観音様の慈愛にみち、微笑ほほみを湛たたえられたお顔は、榎本先生そのままに感じられました。その光景が、今でもはつきり思い出されます。

先生にお会いしたくなったら、法隆寺に参ります。

お帰りには、わが家にお立ち寄りいただき、誌友の皆さまとご懇談いただきました。

この思い出はわが家の、そして私の宝でございます。

本当にありがとうございます。

いつも、何か問題をかかえて宇治に行くのですが、榎本先生にお目にかかる、すーっと無くなって、

言葉にならないのです。それでも、榎本先生はお解りなのでしょう。

「神様は、あなたがそこに居るといっただけで、よろこんでいらっしやるんですよ」とおっしゃって、「よろこびましょうね」と言ってくれました。

これからは、主人共々に、よろこんで、よろこんで精進して行きます。

榎本先生 ありがとうございます。

福山克己・美津子

再拝

## 61 榎本先生から受けたもの

京都市下京区 咲本 徹

もう二十五年くらい前になるだろうか。榎本先生の研修生になってから、全ての現象的なことを否定していた時、というより現象的なことを受け入れられなかった時、何処かの教区が「優生保護法改正」の祈願祭を宝蔵神社で執り行ないたいとの申し込みがあった。その時僕は宇治別格本山の祭司部で神官をしていた。

「現象無し、実相独在」だけを榎本先生から受け、生きようとしていた自分にとって、先祖の供養とか流産時の供養などは現象中の現象ではないか。実相独在で神のみ完全のみしかない世界なのに、何を今さら供養とか、署名をしての改正運動だとか、現象的なものに必死になるのだろうか？ と思っていた。でも、宝蔵神社にお仕える神官の身として、祈願祭をしなければならぬし、現象的なことを認めたくないしで、そのところが腑に落ちず、自分の中で整理もつかず、悶々としていた。

そして、榎本先生ならどう答えて下さるだろう——と、思い切って訊いてみた。「今回の署名運動の祈願祭って、単なる現象処理に過ぎないんじゃないんですか？ 僕はあまりする気になれないんですけど。」すると先生の答えはこうだった。「咲本君、そんなことを言い出すのは君らしいね。」と。肯定も否定もされない答えで、僕は不安定な精神状態になった。先生のそばに長い間ずっと一緒にいて、そして何年も経ってから解ったことだが、質問してもそれについて答えなかったり、別の話に変えたりされる時は、どう

でもいい、大したことのない、重要でもない質問だということだった。しかし当時はそんなことを知る由もなかった。

そして祈願祭の当日を迎えた。本山内に朝早くから、優生保護法改正の署名された紙が詰められたダンボール箱が、トラックいっぱい運ばれて来た。本山職員も運ぶのを手伝うようにと放送で連絡が入り、僕はあまり乗り気でなくいやいや運びに行った。その時、物凄い光景が目の中に入ってきたのであった。それは、榎本先生が先頭切つてその山のように積まれてあるダンボールの箱を大きな声で「ありがとうございます。ありがとうございます。ありがとうございます。」と叫びながら、髪の毛を振り乱して、全身汗だくで運んでおられたのである。

僕はその先生の姿を見たとき、全身に雷が落ちたような衝撃が走った。これが現象処理であるとか、実相独在を生き切れているとかいらないとか、そんなところで信仰していた自分が何処かに吹っ飛んでしまった。

「咲本君、現象無しを生きるとは、こう生きるんだよ！」と全身でもって答えて下さったような気がした。吉田國太郎先生の『常楽への道』の中の「右へ行く時は電光石火右へ行き、左へ行く時は電光石火左へ行く。」という一節が思い出された。まさに「ダンボールを運ぶ時は電光石火これを運び、祈願祭に仕えるときは電光石火祈願祭に仕える。」である。「今を生きる」とは、「今」自分に与えられていることを本心に満足して感謝して「生きる」ということ。いちいちこれが現象であるか？ 実相であるか？ と問うことは意味がない。否どちらでもない。「今」あるべき姿が、あるべきものがあるだけであった。

そのことがあって、優生保護法改正の祈願祭が、宝蔵神社神前で、うやうやしくそして厳かに執り行わ

れる運びとなった。僕は何の不安もなく迷いもなく、感謝と調和に満たされて仕えることが出来た。御祭では修祓（御祭が始まって最初に神官が、関係するもの全てにお祓いをする事）をさせてもらった。お祓いをする側もなく、される側もなく、壇上の神官もなく、大拝殿の参拝者もなく、全てが神の一つの「いのち」の営みがそこに営まれているだけであつた。

榎本先生は人を喜ばす名人でした。というより「喜び」そのものが先生でした。

人の光明面を観ることにかけては宇宙一の人でした。

どんな些細なことでも満面の笑顔で喜んでくれる人でした。

自分が悩んで苦しんで暗黒面を話しに行っているのに、すべてそのまま光明に変えて下さる人でした。否、「はじめからあなたは一度も曇つたことのない光そのものですよ。」と本当の自分を発見させて下さる天才でありました。

## 62 至 心

京都府宇治田原町 鵜飼 恭子

「あなたが神なんですよ！」

平成三年八月の深夜、榎本先生の鋭い声が「祈りの間」の空気を揺らした。

それが先生と私の強烈な“出逢い”だった。

何度か問答した後、五度目に「“ハイ”と受け止めなさい！」と言われ、私は戸惑いながらも気迫に負け、しかし直感的に「ハイ」と素直に答えた。

途端、先生の顔が柔らかくなり「そう、それでいいのです」と。

あの瞬間、私は榎本先生によつて啓かれた。

先生からいただいたものはあまりに多いのだが、先生は「もともとあなたにあつたものを祝福しているだけ」といつも微笑まれた。

生命がけで求め、苦しみ、もがき、乞うたあの頃、先生の「そのままがいいんですよ。喜ばばいいんですよ。」という言葉にどれだけ励まされたことだろう。

「とつてもとつても取り去ることが出来ないもの、それが“ほんもの”です」

「真相は誰が観てくれなくても自分から出てこようとしますよ。嬉しいですね。」

講話の一言一言が光りの珠となつて私の中に飛び込み、私の光りを引き出してくれた。

先生にご恩をお返ししなくてはいけないのに、私は「師」の影を踏んでしまった。

そのことを謝る前に先生は天界へと旅立たれてしまった。

「榎本先生に贈る文集」という存在に私ははじめ、「書く資格がないから」と、泣く泣く背中を向けていた。

結婚し、子育て真っ最中の私は、宇治別格本山で過ごした十年間が嘘のように、「信じる」ということを忘れたかのように、ただただ、幸せで、ぼけぼけ生活を送っている。

今おもえば滑稽だが、数日前まで、そのことが申し訳なくて、パソコンに向かえなかった。

先日、結婚記念日の折、披露宴のビデオを見て、先生の祝辞にはっとした。

「安らかという字は、家の中に女がいます。そんな安らかでいて下さい。」

そして先生からいただいた『弟子像』を再びひもといた。

「神とは佛とは求める必要のないものであり、信ずる必要のないものである。」

求める必要なくして、信ずる必要なくして今、ここ、この身、このままですべてを満たし、生かして下さっているのがまことの神、佛である。 “ ”

「今の感じが安らかということなんですよ。」

夜空に浮かぶまるい月を眺めていると、まろやかな声が聴こえてくる。

ああ、先生はどどこまでも赦して下さっているんですね。

私をがんじがらめにしていた「縛り」さえも、解かれてしまった。

拝んでくださっている優しさに包まれて……

先生の気配はあらゆる自然が観じさせてくれます。

夕焼け空に美しい雲がたなびくとき、山に登ったときに見つけた一本の杖、桜並木を歩くうち、ふと、振り向きたくなった時……

いつもよろこびという発見とともに、先生のお導きに心が躍ります。

同時に、私も「消え切りの澄み切りの聖なるもの」でありたいと願います。

「あなたが神なんですよ！」といつ尋ねられても「はい！」と胸を張ってこたえられるように、ここに先生への誓いを記しました。

奇しくも今日は三月三十一日。

私の生まれた日です。

こうして先生の“弟子”と自称させていただくことが最大の贈り物です。

ありがとうございます。

## 63 「久遠の今」の光のお言葉に感動

広島県呉市 川崎 善憲

私は平成十四年九月より半年間研修生をさせて頂いた折、幽齋殿が好きで、時間があればよく幽齋殿で神想観をしたり、写経をしたりして過ごしておりました。そんな私に興味を持って下さったのか、榎本恵吾先生からお声を掛けて頂き、お話し頂いたり、御著書を戴いたりしました。そこには私が憧れ求め続けてきた「久遠の今」のことが書かれていて吃驚、大変嬉しく思いました。

食堂では遠慮深い私をわざわざ見つけて呼んで下さり、先生の前に座ってお話することができました。ありがたいことでした。先生を前にして座ると、胸の中を爽やかな何かが通り抜けた様な、何と表現していいのでしょうか、高く温かい、何か不思議な聖なるものに触れ得た魂の喜びを感じる事が出来、この御方は一体どういふ御方なのだろうか、尊敬の念が益々大きくなっていったのでした。榎本先生の前にただただ座るだけで魂の悦びがある、幸福なのだと感じられました。

幽齋殿では先生のお描きになった、幽齋殿に菩薩雲集したかのように多勢の方々が神想観されている絵がありました。その絵のことを嬉しそうにお話しなさる先生が、懐かしく想い出されます。

オリジナルなるものを尊重される先生でした。手紙を出すとお返事に、「あなた様らしい、その人らしいのが一番尊いこととあらためて想うのであります」とお手紙頂いたこともあり、今読み返しても涙が出る程ありがたいことでした。

榎本恵吾先生先生は「私は皆さんの座布団になりたい」と仰ったこともありましたが、自分を踏んで飛躍して欲しいとの、本当に勿体無いお言葉でした。もつともつとお話したかった、先生の前に座りたかったです。それなのに先生は御身を隠し給われました。よく先生は仰っていました。「榎本も無いんですよ」

榎本恵吾先生との出会い。私にとって、それは恩寵。神様の祝福の微笑でした。

「久遠の今」の光のお言葉を、榎本恵吾先生の御著書を拝読しながら味わっております。神想観も、光明化運動も、久遠の今に立とうと。

ありがとうございます。

合掌

## 64 永遠の灯 榎本恵吾先生

兵庫県神戸市 三谷 江美  
(兵庫教区ヤングミセス活動対策部員)

合掌 有り難うございます。

十五年前、青年会で地元の「花の集い」を頑張り始めた頃、真理を深めたく、宇治の一般練成に参加しました。その時初めて榎本先生のご講話を拝聴し、ニコニコの絵で救われた私は、すっかり先生のファンになりました。それから練成へ行く都度、前の方に席を取り、追っかけのように、友達と身を乗り出して拝聴してきました。

『榎本先生が昇天されたそうです』

平成十七年七月、青年会仲間から聞いた突然の訃報。ただ茫然となり、夢か幻か、これが現実というものか——受け入れ難い事実に向直し、言いようのない痛惜の念にかられました。

また、あまりの早いお別れに、ご家族の方々は今どんなに哀しんでおられるだろう、まだお若いのに……。

榎本先生のあのお優しい笑顔はもう拝見できないのか。いつも安心させて頂いている御講話は、もう拝聴できないのか。先生しか描くことの出来ないニコニコのお日さまの絵はもう見ることができないのか——色々な思いが後から後から押し寄せて来て、漠然とした淋しさの渦に引き込まれていくようで、時間ば

かりが経っていつて、どうしようもない空間にただ身を任せるしかなかった……日々の雑務が幸いしてか、仕事の合間にふつと思ひ出しては、時が自分なりの答えを運んでくれました。

先生はもう肉体的にはこの世にいらっしやらない——天空高く駆け昇つていかれた——何の前ぶれもなく、多くを語らず、お別れの言葉を信徒に告げることもなく——ああ、でも先生らしいかもしれない。人一倍この世の使命を早く果たされ、何も言われず、桜の花びらのように。時期がくれば、もうちよつと咲いていたい、こんなに神様のために捧げてきたのに……などと執着されることもなく、理屈をつけられず、もがくこともされず、風につて自然に神様の御許へ——信仰者であると共に芸術家でもあり、自然に生きてこられた先生のお姿そのもののようにも感じました。

ご生前、歩いておられる時でもいつでも、移り変わる自然の姿——木の葉、水の流れなど——神様の創造された美と生命の喜びを心に刻まれ謳歌されていた——神様の芸術を全身で感じとられていたお姿が、印象的でした。ある時はメモ帳にスケッチされたり、直感的にピアノ曲として表され、神様を表現してこられた——芸術家のお姿でありました。

一度先生のお作りになった曲を拝聴する機会を得られましたが、その時「先生は真に心から喜んでおられる。自性円満（そのままえんまん）を喜ぶとは、表現すればこういった何ともいえない安らかさなんだ！このような例えようなない喜びいっぱいの世界なのだ」と天の音色を聴いているような気持ちにさせていただいたのを覚えています。

「そのままいいんですよー。今、今、そのまま神様の命なんですよー」

思えば、生長の家で説かれている雅春先生のおっしゃっていたことを心からわからせて下さったのが榎本先生でありました。

“努力して神様に近づくのではない、初めから神様の命なんですよ”

若い頃とはいえ、まだ未熟で御教えを机上の空論でしか捉えられず、自分を審き、拘束し、こうせねば自分は偉くなれない―無価値である。またこんなに醜い心のある自分は生長の家から離れている、なんて罪深いんだろう―と逆の方向で自分をがんじがらめにし、本当の真理を求めていた自分には、先生のお言葉一つ一つが神様の赦しの声そのものでした。喜びいっぱい、光のシャワーで浄められ、自分はこのままでよかったんだ―嬉しい嬉しい、このまま天国に来たみたいだ。宇治の光を浴びている木々を見ながら喜びの涙を流したことが、つい昨日のことのように思い出されます。このように、生長の家の御教えを魂から、体験させてくださいました。

現実界に戻ってはまたもやもやしてしまう。その度に、榎本先生のご講話を求めては解放され、本来の、ただ喜びしかない、神様の世界へと誘導して頂きました。

“『安』という字には、ウ冠（家）に女の人が座っているから安らかなんですよ”

“『暗』は、本当は明るい字なんですよ。『明』は、日と月だけど、『暗』は、日が二つもあるんですから。暗い程、神様を見出しやすいんですよ。”

“わがままの反対は『素のまま』神様のおつくりになった素をそのまま受け取ることなのです。”

どのおコトバも、私の中で灯となつて残っています。多くの方々に光を点じてこられた榎本先生―先生の存在は自分の中で光となつて輝いています。生きておられます。

ご冥福を心からお祈り申し上げます。

再拝

## 65 忘れられない先生のお声

京都市中京区 森末 祐二

榎本先生は、僕にとつて、生長の家そのものであり、限りなく優しい父親のようであり、どこまでも不思議な宇宙人のようであり、最初に出会った十七歳のとき（昭和五十七年九月）、「そのまま生きていいんだ」と思わせてくださった、かけがえのない師である。語弊があるかもしれないし、誤解を招く表現かもしれないが、今改めて先生がどういう存在だったのかを考えてみると、そんな思いが湧いてきた。

少年時代の僕に、先生は、「森末君、夜中でもいつでも、『先生わかりましたーっ！』って言いながら飛んでくるくらいでいいんだよ」とおっしゃったことがあった。それくらい真理の勉強に熱中しなさい、という意味だと僕は受け取った。本当に夜中に突然お邪魔したことはなかったが、頻繁にお宅を訪ねていた頃、折りにふれ、何か気づいたことや得心したことを話させていた。だと、穏やかに微笑みながら、時には僕の目をじっと見据えながら「うん、うん」とうなずかれていた様子が思い起こされる。いつもいつも、温かく心地よい空気に包んでいただけに喜びを感じ、先生とご家族にお会いするのが、本当に楽しみで仕方がなかったものである。

同時に、いつまでも先生に甘えてはいけない、僕自身がしっかりと生長しなくてははいけない、「先生に悟りを分けてもらいたい」というような甘えた意識になつてはいけない、と自分を戒める気持ちにもなっ

た。少年から大人に生長していく過程で、先生とふれあえたことは、僕の人生にとって、はかり知れないほど大きな財産になっている。

先生との思い出はいくつもある。一緒にラーメン屋さんに行ったこと。大学の入学式に保護者として出席してくださったこと。東寺の縁日に行き、僕は柱時計、先生はマントを買われたこと。先生やご家族との楽しい団欒。ファミリー合唱隊に参加して一緒に歌ったこと。僕の拙い手紙を真剣に読んでくださったこと。練成でのご講話。大祭や新年祭で先生のもとで奉仕をしたこと。研修生の方々の仲間に入れていただいたこと等々。ここでは一つひとつを詳しく述べるわけにはいかないが、今も僕の記憶の中で、先生のはつらつとした笑顔や、軽やかな身のこなしが鮮明によみがえってくる。

なかでも特に印象深いのは、先生の「声のトーン」である。僕が車を運転して先生のお宅に向かう途中、たまたま一度だけ、僕が日頃通らないルートだったことから、助手席に座られていた先生が、「そこを左に」「これを真っ直ぐ」という感じで方向を指示してくださったことがあった。このときのご指示のタイミングが、これ以上ないほど絶妙で、しかも「声のトーン」がとてもやわらかくて心地よかつたため、ものすごく「運転しやすく」感じたものだった。

運転中、同乗者から方向を指示されることは時々あるが、先生以外の人の声が、あえて心地よいとまで感じたことは一度もない。大げさかもしれないが、このときの心地よさは、先生の神想観のご指導に通じるものがあつたと思う。神想観をするときは、当然目を閉じているので、何も見えず、ただ先生の声だけが聞こえてくる。先生の声が、頭の上からやわらかく降り注いで、辺り一帯を包み込み、その心地よさを感じながら、どんどん集中の度合いが高まっていったのを覚えている。先生の「声のトーン」の温かい雰囲気、一種独特の空気がピンと張つたような気持ちよさは、おそらく生涯忘れることはないし、これから

も僕の心の糧となり続けるだろう。

こうしたことを含めて、先生と奥様、ご家族には、これまで考えられないほどお世話になってきており、どれだけ感謝しても感謝しきれない思いでいっぱいである。まだ何一つ恩返しできていないが、そんな自分を叱咤しつつ、これからの人生において、先生から学んだこと、先生とふれあって感じたことを、何らかの形で僕らしく表現していくことが、生涯のテーマだと考えている。まだまだ勉強も修行も足りていないが、テーマの実現に向けて、一步一步努力していきたいと思う。そして、いつか再び先生と出会ったとき、「森末君、よくやったね」とほめていただけるような人生にしたいと思う。

## 66 最高の祝福讃嘆をして下さった先生

岐阜県本巢市 佐藤 実恵子

合掌ありがとうございます。

二十六年前養心を卒業し、宇治本山に奉職させて頂くことになり、はじめて神舞姫の装束を着させて頂いたときのこと。三方の上に霊牌を乗せて講堂の前にいた時、先生に「素晴らしいねえ、ちよつとこつちに来て」と声をかけられ、講堂のとなりの部屋に案内されて入りました。

マイクや色々な機械が置いてあり、窓からはきらきらと日の光がさしているのをはつきりと感じながら、いすに腰掛けました。そのとき先生は、

「この空気が、この座布団が、この椅子が、あなたが来てくれてどれだけ喜んでいるかわかりますか。あの木々が、あの葉っぱの一枚一枚が、『よいかな、よいかな』ってねえ。空が、雲が、鳥たちが、宝蔵神社の建物が、たたみが、どんなに、あなたのことを喜んでるか、わかりますかあ。僕にはわかるんですよねえ。」

と、やさしく、しみじみと、あじわうように、おごそかに、おだやかに……。

私の中で、ジーン……なんとも言えない喜びがあふれ出て、涙がつきつきとめどなく流れて……しばらくの間、そんなお言葉を、はなびらがふつてくるように、話して下さいたのです。

ただただうれしくて、うれしくて、喜びがどんどんあふれてきて、満たされてゆくのを感じていました。私は劣等感がいつもあり、人にくらべると、眼が不自由で、暗くて、出来ることより出来ないことが多く、まして喜ばれている自分なんて思ったこともなく、生まれてはじめて最高のほめ言葉をいただき、ほんとうにすくわれました。言葉でいい表すことの出来ないほどの感動——すべてが光輝きました。祝福讃嘆して下さった先生に、心から感謝の気持ちでいっぱいです。

先生が亡くなられ、岐阜から宇治まで行く電車の中で、その時のことが、あのお言葉が、何度も何度も、くりかえしよみがえってきて、涙がとめどもなく流れ、宇治につくころ、やっと涙がとまり、感謝の思いがあふれました。

最近よくあの時のことを思い出し、喜びがなくなることなく、続いている感じがします。

とくに太陽の光をあびて光り輝く木々の葉っぱ一枚一枚を見ている時、先生を思い出します。

今も、宇治に行けば先生にお会いできる気がしてなりません。

先生、ありがとうございます。

## 67 榎本先生へ

京都府宇治市 田中裕子

先生が私に下さったもの。

あたたかい愛情と信頼。

人から信頼されるということが、こんなにも嬉しい、  
幸せな気持ちになれるものなのかと思いました。

誰も何も信じられず、頑なに自分の中に閉じこもって、

家族とも暮らせなくなってしまうような、欠陥人間の私、

宇治へ導かれ研修生に残らせて頂いたものの、

自分で自分を軽蔑して、無気力で投げ遣りな日々を送っていました。

そんな私を先生は、咎めもせず、諭しもせず、軽蔑も排斥もしないで、

悪いところをひとつも認めないで、大きく、あたたかく、包んで下さいました。

どんなにうれしかったかしれません。

生まれてはじめて感じられた温かい愛情と信頼。

その信頼に応えられる人間になりたい、と想いました。

先生のあたかさに包まれて甘えているだけの私でした。

今、先生のお側にいられなくなつて、思い知らされています。

何にもわかつていなかったこと。

今の私をみられたら、先生はどんなに悲しまれるだろうか・

先生は私に、それでは駄目だとか、こうしなさい、

などと言われることは一度もありませんでした。

それを少し、淋しく思うこともありましたが、

常に謙虚で、思いやり深く、愛深く、真剣に、誠実に、生きてこられた先生のお姿の中に、

美しく生きることを身をもつて教えて頂いた様に思います。

私はいつも先生のお姿を、深い憧れと尊敬の想いで見させて頂いていました。

先生は、私が生まれて初めて本当に信じられた方でした。

繰り返し思い出し、先生のお姿を心の中に呼び起こし、

何とか自分を正して生きて行かなければと思います。

先生、どうぞ正しく導いて下さい、

きちんと、誠実に、まっすぐに、生きられます様に、

先生が私の中に観て下さった、本当の私になれますように。

## 68 榎本先生の光に包まれて

京都府宇治市 高橋 厚子

アインシュタインやピカソを穏やかにしたような風貌に、前かがみになってお茶を飲みながらぶつぶつ話していたかと思うと、突然大きな声で「ない！」と飛びはねてニコニコの絵を描き「毛じゃないんですよ」と真面目におっしゃる。最初から最後まで実相一元の話をされ、至って真面目なのに面白くて大笑いしながら、最後には涙がとまらなかつた。魂の根源的な喜びで舞い上がり、泣きながら受けた個人指導。帰りの新幹線の窓から見た大きな夕焼けに「実相実相」と胸を詰まらせていたら「実相はあなたの中にあるんですよ！」と榎本先生の声が私の胸でどん！と鳴り響いた。

七年後、私は榎本先生のいる祈願部に奉職する事になり、先生を毎日三六〇度拝見できるという幸運に恵まれました。先生は毎朝三時五十分に幽斎殿の扉を開けられ神癒祈願の人型を書き四時半になると神想観の先導をされました。幽斎殿には入れ替わり立ち替わりいつも沢山の人が来ていました。大拝殿での早朝行事では、聖歌をひときわ大きな声で歌われていました。榎本先生は本当に嬉しさに喜びに満ちて先導されておりました。

榎本先生は神様や教えには絶対的な確信をもっておられました。先生個人としては謙虚で、どの方にも平等に愛し接していられたように見えました。先生のところには体験の手紙がいつも沢山届き、その度に

神癒の素晴らしさに両手放して感動されていました。そして「僕にとって祈願者は観世音菩薩なんだよ」といつもおっしゃいました。

榎本部長は事務をしている私たちに「一つ一つの作業が祈りですよ」と言われ、その私たちをいつも押込んで下さるのが先生でした。私は榎本先生に少しでも自分の出来ることで先生にさせてもらうことはないかと考えていましたが、先生は何でも自分でされ部長室はどこよりも掃除が行き届いており、廊下を歩いていると米粒程のゴミでも拾われました。

「すばらしいねえ」榎本先生は何を見ても感心したように言われます。傷ついたり殻に閉じこもっていたり、たまには反抗的な研修生にも先生は抱きしめるように讃えてそう言いました。私は、苦しみに苦しめないなんて言えないし幸せじゃないのに幸せなんて思えないなどと言って、先生のお側にいながら不満ばかり並べ、いつかは「そんな風に言いたいことばかりいえる君がうらやましいよ」と怒られました。腹が立ったり悲しい時には、先生の帰ってしまった部長室に行つて泣いたり先生の絵を見たり原稿を読んだりしているうちに心が鎮まってくるのです。

奥様の一子先生の事を語る時、先生は本当にいつも嬉しそうでした。一子先生との日常の出来事を宝物のように話していました。何かお誘いすると「かあさんが行くのなら」と言われます。本山の旅行でも「かあさんはどっちのバス？」と言っていつも並んで座りました。ある日先生はつくづくというように「僕がかあさんが一番なんだよ」と言われ何を今更と思つて聞いていると「すべての女性がかあさんの延長だからね」ととても嬉しそうにおっしゃいました。

榎本先生の家で食事をいただいている時など、私は先生と奥様の掛け合いが面白くて大好きでした。先生は家ではとてもくつろいでいて若い頃の話や、結婚式の写真を見せていただいたこともありました。

喜多さんと妙子ちゃんの結婚式を熊野本宮大社であげると聞き、旅行を兼ねて立ち寄りさせていただきました。本宮の長い階段を登ってこられるお二人の後から、榎本先生は始終顔をほころばせていながらも感無量という感じでした。一子先生はシャキツとしていて、その日も先生とまったく同じ雰囲気的笑みを称えておられました。榎本先生は「後で婿達だけと写真をとるんだよ」と言って心から嬉しそうにっこりされていました。後で私が結婚式で撮った写真をいろいろ先生にお見せすると、一子先生と二人だけで映っているのを指して「これが一番いいねえ」とおっしゃいました。

私は榎本先生が亡くなった時の事をはつきりと一部始終覚えているにもかかわらず、未だに亡くなったという実感がありません。それなのに何故先生は突然亡くなってしまったのだろうかとずっと考えていました。発作的に先生を思いだして泣くこともあります。その時に私はいつも、先生が夢にできて一緒に船で釣りに行ったことを思い出しています。目無堅間の小舟に乗り、先生とは神想観で通じあうことができるのでしょうか。最初は先生のために聖經をあげたり霊牌を書くことなどできませんでした。でも今は一子先生のお話や笑顔の中に榎本先生を見いだすことができます。先生は一子先生の内に日に日に鮮やかに蘇り輝いていて私たちに語りかけているからです。

## 69 言葉に表し尽くせない幸せ

岐阜県土岐市 おおかや 大萱 うい子

私が先生を想うとき、ご生前に幽齋殿の廊下や各部屋の隅々にまで流れていた、明るく温かくやわらかく喜ばしい光の流れのような空気を、その中で手を動かすと、その手の動きに添ってゆったりとその光が流れ動くような、そんな感覚をもつて想い出されます。

そのような雰囲気の中で先生を部長として戴きながら奉職させて頂いた日々は、言葉に表し尽くせないほどの幸せでした。

先生は幽齋殿を霊的研究所と言われ、「おおつぴらには言えないけれど、生長の家が僕のために霊的研究所を作ってくれたと思っっているんだよ」と話されたことがありました。練成部から祈願部に異動になり、先生が練成の担当から外れて行かれたのを惜しむ声もたくさん聞かれる中、そのような味わい方をもって先生は感謝し喜んでおられました。先生の物事に対する味わい方は「無条件に生かされている」という絶対の感謝の中から出てくるもので、折々の先生のお言葉をお聞きする度、私は先生を味わい方の天才だと思っていました。

先生ご夫妻がまた菟道のご自宅に住んでおられた頃のことです。書や絵をよく描かれるので、家に帰る

とすぐ二階に上がって、お好きなことに没頭され、なかなか降りてこれない。少し淋しさを感じた奥様が二階に上がって行かれ、わざわざ先生が腹を立てるようなことを言って「ちよっかい」を出すと、先生は「母さん、そんなに僕のことを想ってくれてありがとう」とおっしゃったと、そして「主人はいつもそんなふう言ってくれて」と奥様は嬉しそうにお話し下さいましたが、本当に先生はいつもこのように味わって感謝をされていたのです。

また、「僕にとって家内は全ての全てだからね。滝さん（私の旧姓）なんか家内の延長だよ」とおっしゃって下さり、先生が奥様から受け取り味わっておられる「女性なるもの」をお側でお仕えさせて頂いている私などからも味わって、喜んでくださっていました。

こういう先生のありようは、ご自宅でも職場でも全く同じで、場所によって変化するということはありませんでした。このようなありようが、先生そのものだったのです。

先生はたいへん愉快なお方でもありました。お酒が大好きで、幽斎殿に月下美人の花がたくさん咲いた翌日、焼酎と梅酒を造るときの大きなビンを買ってこられ、その月下美人の花を焼酎に漬けて、執務室の棚に並べました。一つのビンの中に蟻が入っていたので、「先生、蟻が一匹入っていますよ」と言うと、「いいダシが出るね」と嬉しそうにおっしゃって、大笑いをしたこと。

廊下で会うと、「やあ、どうかね？」と満面の笑顔で声をかけてくださるときの、こちらが嬉しくなるような、愉快そうな明るい雰囲気。

感謝祭の最後に楠本総務が退場されるときに、本当に嬉しそうな大きな声で一番先に「楠本先生、バンザーイ。バンザーイ」と、飛び跳ねておられた姿。まるで青年のようでした。本当に愛すべき愉快なお姿でした。そんな先生のお姿が嬉しくて、みんな「バンザーイ。バンザーイ」の大合唱……。

幽齋殿に流れていた雰囲気は、先生の雰囲気そのものでした。先生は本当に美しいたたずまいの方でした。限らない懐かしさをもって、先生の雰囲気が想い出されます。

私の結婚が決まったとき、龍宮の本源世界からポツカリと湧いて出てきたような感じで、「実に幽齋殿的だねえ。」と喜んで下さったのが、昨日のことのようです。

青年会活動に行きづまって、悩み苦しみ、自分の魂を納得させて下さる師を求めて、さ迷っていた私が、先生の「現象は無い!!」の一言で、先生を正師と定め、長い年月お側に置いて頂きました。

今日の幸福と安らかさ、そして先生との幸せな時間を、ありがとうございます。

70 — 永遠とわの感謝をこめて —

横浜市瀬谷区 畑元 佑季子

〈平成十七年九月、榎本一子先生へのお手紙より〉

合掌 ありがとうございます。

朝晩は大分凌ぎ易くなつてまいりました。『市民の森』が近いこの辺りでは今を盛りと蝉や虫たちが往々夏にしがみつくかのように力一杯声をふりしぼつて協奏曲を奏でています。

扱、このたびは思いもがけない大変な品々をお送り下さり、本当に驚喜したりどうしよう！ と困惑させしておりますが……私如きが頂戴する資格があるのでしょうか！ 本当に申し訳なくお礼のことばもございませぬ。

でも実を申しますと、私が知りたかつた正にピッタリと的を射たテープでした。ビデオテープの方はいいのかなと思ひながらも、すぐに何回も続けて拝見し拝聴し、その都度一子先生の御講話を胸一杯になりながら大感動の連続でございました。私の知りたかつたことばかりでびつくりした位です。

恵吾先生のDVDは今再生する機械がなくて未だ拝見しておりませんが、かえつて先のたのしみが出来た感じで、何にも勝るお宝を大切に温存しているようで無限の倅せを感じているところです。

榎本先生の世界こそ本物であり、そこが又憧れでもあり、毛一筋の不信もない筈はずなのに、実は現象面では一つの問題に悩んでしまう自分が未だいるのです。

と申しますのは、本家であるのに家督相続者が確立していないという私の責任上の問題です。

どうしたらよいのか、又今の現象に何を足せば希望する結果になるのだろうか、とか又これは私の実相の

観じ方が足りないせいなのか……などと知らぬ間に実相に背を向けて暗やみの研究をはじめている自分  
いるのです。

でもそういう時、恵吾先生の「付け足すべきものは何もないのだよ」というお言葉が聞こえてくるよう  
な気がして、ハッとするので。そして同時に『葩はなびらさんさん』の中の文章が思い出されるのです。

「こちらの心で観じようが観じまいが、いちいち努力して実相を引っぱり出そうとしなくても絶対に自分  
で出てくる力を完備しているのです。……ですから実相にはこちらの力というものが要らないのです。」

何というすごい表現なのでしょう！　そう言えば、「これは中々大変だ」とか、「中々むづかしくつ  
て」とか思うものは「すでに実相ではない」といつもおっしゃっていましたよね。そうなんだ、遠慮しな  
いで完全円満の自分の実相を喜んでいれば心が自然に自ずから顕れ給うのでした。そうなのでした、も  
う四つに組むのは止めよう、それがどんな形になろうと、み心を心として「唯々ありがとうございます」  
と受けてまいりましょう。その勉強のために、実践のために残りの私の人生があると云っても過言ではな  
いのですね。

恵吾先生の教えて下さった世界こそ、次元の高いまことなる世界です。生長の家の縦の真理の神髄を、  
解りやすくより偉大にかみ砕いて教えて戴けた私達は、本当に倅せでありました。

永遠とわの感謝をこめて、心から「有難うございます」を捧げます。

今までのこと、今回のこと、心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。　再拝

九月五日

畑元 佑季子

榎本 一子 先生

## 71 「生長の家二世」の私にとっての榎本先生

群馬県 荒居 由紀子

私にとつての榎本先生は、先生の書かれるニコニコの顔の絵そのものでした。そしてニコニコの光は、生長の家が大嫌いで、生長の家Ⅱ暗黒の家というイメージをいだいていた私を、照らしました。

私の母は、生長の家の集まりに行つて戻つてくると、とても力ない顔をして、顔をひきつらせながら、「もう大丈夫よ」と言いました。その瞬間が、私も妹もとてもイヤでした。私も妹も、子どもの頃、母が生長の家をやめてくれたら、うちは幸せになるのにと思っていました。母は行く度に暗くなつて帰つてくる。そんな生長の家が大嫌いでした。母が生長の家へ行くきつかけとなつた我家の問題も、とても残念な結果に終わり、生長の家とは、不幸の家のようなイメージをもっていました。

そんな私が、とにかく母親教室に行つてみようと思ふようになったのは、榎本先生の講話のテープを聞いて、今まで思っていた生長の家と違う世界をかいま見たからだと思ひます。

その後、平成十四年、大きな病をもらい、宇治の練成に参加し、榎本先生に会いました。私のなかで特に記憶に残っていますのは、幽齋殿での集まり（練成ではなくて、高速道路などを使つてまわりの方々が集まつてきていました）十何人かの集まりで、恵吾先生を囲んでという感じの会でした。先生が宇治へ移動になる前に見た夢（火の柱が上から下へと、下から上へといつていた）のことなどをお話し下さるその雰囲気、その時の空気がとても心地よいものであつた事が一番に思ひ出されます。

講話や個人指導いただいたことよりも何故か、その時のことが一番印象深く思い出されます。何か一番、榎本先生の空気を感じたように思います。先生が沢山描かれた絵もみんなに、みせて下さいました。

榎本先生と出会えて、自分にとって一番良かったのは、「感謝はわく」もので、私の力で力んで「感謝はする」ものではないということを知ることが出来たことです。

自分は病気が消えるという体験は出ませんでした。が、四年前に病気をしたので、宇治に行つて榎本先生に会えて、本当によかったです。

さもなかったら、きっと今でも、「生長の家」Ⅱ「暗黒の家」のようなイメージを持っていたのではないかと思います。

これからも「はなびら 葩さんさん」を、わかるために読むのではなく、「葩さんさん」は読むこと自体が喜びなので、くり返し読んでゆきます。

## 72 榎本研修と『生命の實相』

東京都青梅市 久都間 繁

榎本恵吾先生は、昭和五十六年の後半から数年間、練成部に所属されて研修生のお世話をご担当になった時期があった。この間、何人の人々が、先生との研修生活を経験されたのであろうか。あの時代から、もう四半世紀が過ぎようとしている。しかし、私たちが先生の元で過ごした日々は、ますます光り輝くものとなり、私たちを無限に蘇らせているのである。それは永遠に瑞々しく、神想觀の座が結ばれるところ、聖典『生命の實相』が紐解かれるところ、私たちのみならず誰でも、いつでも、どこでも、その光りは、久遠の泉のように湧出して、みどり児の詩を奏すにはおかないのである。

研修生たちに先生は、「私のお役目は、皆さんが安心して『生命の實相』を拝読し、神想觀を実修していただくための座布団のようなものです」とおっしゃっていた。また、「私の原稿の言葉は、諸君が『生命の實相』のご本をますます懐かしくなり、『生命の實相』に振り向き、『生命の實相』に帰っていただくために書いているのです」とも語っておられた。先生の言われる「座布団」とは、「みどり児」なる私たちを莊嚴する如意宝珠なる蓮華の宝座のことであり、先生はその研修を通して、一人ひとりが光明一元の實相の世界に座して、自性円満なる光の子として巣立っていく、ただただそのことを願ひ、觀じ続けておられた。だから先生は、「皆さんは、宇治本山に光りを貫いにやって来たのではないのです。逆に宇治本山の方が、皆さんの内にやってきたのです。みなさんは宇治のみならず全宇宙を照らす光りなのです」とも、おっしゃっていた。

「愛行」とは、「愛」そのものである皆さんが行ずるから「愛行」なのであり、神想観とは、はじめから「神」である皆さんが想い観するから「神想観」なのです。だから、これから神想観をした後に神になり、完全になるではありません。先ず光りだ！」。先生の言葉は、私たちが慣れ親しんだ日常の言葉としての意匠を脱ぎ捨て、生きもののように実在からのメッセージを伝える。それは『生命の實相』の文字間に、實相世界の莊嚴を觀、如來そのものの化身となった者のみが発する言葉なのである。それは、同時に同書から出た光りの展開であり、その光りに触れた者はやがてそこに無限の懐かしさを抱きつつそこに帰るのである。「神想観をしてからではない」「『生命の實相』を読んでからではない」と宣言されていた先生ほど、誰よりも神想観を深く実修し、聖典の莊嚴を讃え、聖經読誦や愛行を心底楽しく行じていた人はいない。それは、「先ず光り」なるものが、その自ずからなる喜びを鳴り響かせていた法爾自然のお姿だった。

そんな先生の信仰姿勢は、そのまま私たちへの實相直視となり、一切の現象を光りへと変える一転語となり、生長の家の「基礎論」の徹底となり、研修を経験した多くの人が『生命の實相』全四十巻を、ごくあたりまえのようにして読破していったのである。それは、先生が放つ「光りの香氣」のようなものが『生命の實相』の行間からあふれ、それを私たちは呼吸していた。その光りは天地いっばいに広がり、春夏秋冬を経験するように、研修生たちは『生命の實相』という言の葉の光りの中を歩み続けていた。やがてそれは気が付いてみれば、いつの間にか光りのまつただ中へと続いていたのである。

先生のご準備してくださった光りの座布団。今は、私たちが敷かせていただく番なのである。

二〇〇七年四月二十九日

## 73 榎本恵吾先生、霊界からお導き下さい

長崎県西海市 山内 彰  
やまのち

(生長の家総本山)

合掌 ありがとうございます。

私は二十代の頃大阪に住み、京都の私立高校の教員をしていました時、大阪教化部にて榎本先生・岡先生編著『光のある内に||聖歌のすすめ||』を購入して、通勤電車や喫茶店で何回も読み返していました。

その中で、榎本先生が「われらは此の身はこのまま住吉大神の全身なのである。全霊なのである。住吉大神の“分身分霊”であるとの自覚の幽斎の時代から全身全霊であるとの自覚の、創造的展開の時となったのである」(同著一一八ページ)という一文を読み、ものすごい感動した事を思い出します。著書にふれる前私と青年会で知りあつた家内(その頃は婚約中の溝口裕子さん)と二人で総本山の新春練成会に参加し、谷口雅春先生の御講話を拝聴して“全身全霊”“あーおーうーえーい”のお言葉を直接お聞きしていましたので、著書の一文を「そのとおり!! そのとおり!!」という気持ちで読まして頂きました。

その時に、榎本先生にお会いしたいなーと思いました。それが実現したのが二十数年後でした。私は高校教員から生長の家社会事業団養護施設「神の国寮」に転職、生長の家本部青年会部奉職、生長の家総本山に転勤し、孟蘭盆供養大祭実行委員として宇治別格本山に神癒祈願担当講師として奉仕させて頂いた時でした。榎本先生は満顔の笑顔で迎えて頂きました。

「先生の著書を読まして頂いて、お会いしたいと思っていました」と申し上げますと、「休憩の時に私の

部屋にいらっしやい」と言われましたので、先生のお部屋へ訪問させて頂きました。先生は共通の知人平野さんの話をしながら、ニコニコの絵、自費出版の本、ピアノのCD・楽譜等紙袋一杯に下さり、「神癒祈願の講師の秘訣は神様との媒介であり、無私になること、喜んでやることですよ!!」とやさしく力強くご指導頂きました。

その年の大祭の神癒祈願数が前年より多く、最終日の夕食時まで「アーオーウーエイー」を唱え続けましたが、何とも言えない魂の喜びと、「神様はいらっしやるのだ!!」という実感がこみ上げてきました。

「貴方、故郷が京都なら京都に帰っていらっしやい」「はい」という会話が宇治での最後の会話でした。私の家内の母（溝口君枝）も大阪に住んでいます。榎本先生に個人指導して頂き、私に嬉しそうな声で「榎本先生に個人指導してもらった。よかった!!」と電話をしてくれました。その御礼を申し上げようと、生長の家教修会の帰りの京王線の駅で先生に「母のご指導ありがとうございました」と申し上げると、「必ず良くなりますよ」とお言葉を頂いたのが、地上での最後の会話となりました。その数日後、御昇天されました。

奇しくも四月一日より総本山聖歌隊運営委員長を拝命し、天照大神様の調和のメロデーを歌い（祈り）全てを浄めてまいりますので、榎本先生、霊界からのご指導よろしくお願い申し上げます。再拝

## 74 もつともつとお話をお聞きしたかった…

宮崎県延岡市 横山 純子

榎本恵吾先生、ありがとうございます。

私が先生の御講話を初めて聞いたのは、宇治の新講堂が落成したこけら落としの時でした。

何か奥が深くて難しく、この話は特別な人にしか分からない——というのがその時のおもいでしたが、なぜか心が熱く嬉しくなったことを覚えています。

その魅力にとりつかれてか、自分や家族の病気の狭間の中で、幾度も宇治へ足を運ぶようになりました。そんな練成会の中で、以前、「写経練成会」というのがありました。

参加者も少なく、先生方も家族的に講話を聞ける練成会でしたのに、参加されている方はほとんど質問をされる中、私は積極的に先生へ質問したり出来なくて、今でもそのことが後悔されてなりません。

その魂の高さと尊厳ある先生に圧倒されていた私でした。

そんな中で一度個人指導をしていたきましたが、緊張のあまり覚えていないのが事実で、「そのまま……そのまま……」といったお言葉しか思い出せません。

その後お手紙を出したら、ニコニコのお葉書をいただきました。

恵吾先生はよく『人類無罪宣言』の本をテキストにお使いになり、ゆつくりと丁寧な雄弁にお話しして

下さいました。同書二〇八〜二一二ページの谷口雅春先生の自伝篇のくだり（実相なる道）で、「それはわかる！」と、その時は爆発するような大きな声となり、

「懺悔しないままで、救ってくれる神がいるんですよ！」……

自分がいらぬ、ゼロであること、神そのものに活かされている喜び――

「今、喜びましょう。今、喜んでいいんですよ。喜ばせてもらいましょう！」

と、何回も何回も神様の御心を伝えて下さいました。

生長の家の根本の根本の原理！ 谷口雅春先生が最後に残されたお言葉

「病無し。迷い無し、罪無し」を恵吾先生はお説き下さったのですね。

自由奔放、無礙自在。そんな凄いご指導の中には、先生のなみはずれた努力探求の精進信仰生活があった事を、私達は奥様の一子先生からお聞きしました。

先生！ もっともつとたくさんお話をお聞きしたかったです。

今は一子先生からいただきましたDVDを、私の宝物として、何時も聞かせていただいています。

今も恵吾先生は神界にて光明化運動にお忙しいのでしょうか。

私も先生のご指導を無にしないよう、ニコニコと神様の御心を生活させて頂きます。そしてこれからもご指導下さいますようお願いいたします。

先生、本当にありがとうございます。

又お会いできますことを楽しみにしています。

## 75 親愛なる榎本先生へ

石川県七尾市 佐田味 朝子

合掌 ありがとうございます。

二十五年前、青年会運動への情熱が無くなつていく中で、「宇治の練成会に出席したら、もう一度やる気が起きるかもしれない」と練成会に参加しました。練成中榎本先生にお声をかけていただき、研修生のお誘いを受けました。その時私は、一カ月も滞在するつもりもなく、「二十日位でよかったら研修生になります」とお返事したのを覚えています。

それから三年半、榎本先生の暖かくて広い光の中で過ごせた事は、本当に大きな喜びでした。

研修期間中、素晴らしく輝いていく研修生の仲間を見ながら、私は自分が少しも変わっていないのが悲しく、先生に質問しました。

「先生、私は少しも変わらないのですが、どうしたらいいのでしょうか」と。

先生は、「あなたは少しも代わる必要などありません。そのままがいいのですよ。宇治川は少しも変わらず流れているでしょう。宇治川のように、そのままがいいのですよ」とおっしゃっていただきました。私のつたない小さな発見を、本当に宝物のように大切にいつか下さいます。

「先生、私の名前の『朝』にはお日様もお月様もあるし、十字が二つもあります。まるで生長の家のようです」とお話しますと、あとから先生は

「佐田味の味という字は光明三味の味と同じだ」とお話しになりました。

「素晴らしいという字は、もと（素）を晴らすと書くのですね、素を晴らすことが素晴らしいことなのですね。」とお手紙をさしあげると、先生から光明のお返事をいただきました。少しだけ披露しますね。

「合掌 『素晴らしいとは素を晴らすことである』とは、まことにすばらしいことですね。なぜ『ひらがな』を三つ入れただけでこのように私の中に喜ばしい変化をもたらして呉れるのか、素晴らしい不思議さであると思いました。『カラッポ』と思わず叫んだ吉田国太郎先生は、谷口雅春先生の愛の中に、どんなに幸せであったかということですね。」

人と人がはなれるように見えても悲しくはないと言えるのではないのでしょうか。いや、のびのびと悲しみを晴らすといえますか、晴れた悲しみというようなものを人は体験するのだと想います。悲母観音などは、実に明るく晴れやかで堂々としていられるのは、素を晴らす、または素そのものすがたなのかも知れません。」

先生はいつも対峙する人の素の中においでなので、その時の先生の言葉や雰囲気は少しも風化せず、年月に関係なく輝いています。こうして先生をあらためて振り返ると、どんなに先生から愛されていたか、先生の暖かい愛情を感じずには居られません。先生の光の中にいる自分があります。先生も私達の光の中にいらつしゃいます。

再拝

76 「そのまま今喜べる命」をお教え下さった先生

横浜市青葉区 斉藤 章枝

なかなか子宝に恵まれず、信仰自体が苦しく心重い日々を過ごしていた中、榎本先生にご指導を受けました。お蔭様でその二年後、結婚十年目に元気な男の子を授かりました。妊娠、出産を通して先生からいただいた深いご愛念と数々のお言葉は、待ちに待った子どもの命とともに、私の命をも新たによみがえらせてくださいました。先生に巡り会えた奇蹟に心から感謝をしつつ、最初にご指導を受けた後に送らせていただいたお礼状の一部を以下に紹介させていただきます。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「不完全は、不完全ということにおいて存在しない。」

——まさに私が聞きたいと心から願っていた一言でした。今までご本や講話で何百回も見聞きした言葉ではありませんが、どうしてもどうしても自分に響いてこなかったのです。納得できなかったのです。でも、今回先生の発せられたお言葉は、私の固く閉まっていた心をふわっと一遍にほどいてくださいました。もう嬉しくて嬉しくてたまりません。このお言葉を思い返すたびに、嬉しくてありがたくて涙がこぼれます。あの晩は本当に数年ぶりに、おふとんに入って微笑みながら眠りにつける嬉しさをかみしめることがで

きました。そして翌朝、起床の時も「あー、良かった、良かった」と安心感と共に目が覚めました。何だかわからないけれど、暖かくて嬉しくて、先生にご指導いただけたことが信じられないほどに嬉しくてたまりません。

信仰が苦しいということは、どこか間違っている、しかも何が間違っているか、どうしてか、ということまでもわかつているのに、どうしてもそこから脱け出せずにいました。ご本を読んでも自分にはどこか空々しく響き、無理に納得しようとしても、自分をごまかせきれない虚しさにいたたまれませんでした。

でも今は、命は親から先祖へと過去に向かつて意識を集中させていくようなものではなく、あくまでも神、先祖から親、そして私へと喜びを伝える営みであるということを実感した思いです。

先生にご指導いただいた次の日、知り合った方二人とお昼過ぎに幽斎殿まで散歩をしました。すると本当にそこは「葩さんさん」の世界でした。うぐいすをはじめとする野鳥がさえずり、桜の花びらがひらひらと舞う中を歩き、本当に信じられないほどの美しさに感動し、鳥肌が立つ思いでした。桜を見ては、こんなにもきれいだっただかと思ひ、末一稲荷の朱塗りの橋のところでは新緑がこんなにもやさしくみずみずしかったかと感激し、本当に感動の連続でした。何百もの花びらがゆつくりひらひらと舞い降りる中、天を仰いで両手を広げて立ってみました。全身で春の命を深く呼吸している気がしました。先生のご指導前にも大講堂から見える宇治川の景色をきれいとは思いましたが、どことなくよそよそしかったものが、今や柔らかく暖かいものとして自分の中に入ってきた感じでした。

ご指導いただきましたことに、そして先生にめぐり合わせてくださった神様に、心から感謝しお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 77 榎本恵吾先生を慕い

埼玉県鳩ヶ谷市 石塚 丈士  
(大学生)

合掌、ありがとうございます。

私が榎本先生のご講話を初めて拝聴させていただいたのは、二年前の三月、病気で心身ともにどうしようもなく辛い時に受けた一般練成会のときでした。先生は演壇に立つなり、黒板に大きなニコニコの、太陽のような笑顔をお書きになり、眼鏡と顔の間にできた隙間から私たち参加者を眼光鋭く見渡され、力強い口調で、私たちは、はじめから、何をせずとも、そのまま神の子である、ということをお話され、ひたすらお説きになられました。

当時の私は、先生のあまりのインパクトに、はじめは驚きましたが、どんどんと先生の話に魅了され、心の重荷が自然と雲散霧消していくのを感じながら感動に胸が打ち震えました。そして、その後一カ月を研修生として過ごすことになりましたが、奥様の一子先生と共に、先生には大変かわいがっていただきました。わずかな間でしたが、得る物の多き時間を過ごさせていただき、私の人生の岐路であったことは紛れもない事実でしょう。

私が先生からご指導いただいた中でもっとも印象に残っているのは、生長の家のエッセンスである『生命の真相』を、「何度も反芻し、事あるごとに、必要に応じて本を開くようにしなさい」ということでした。『生命の真相』は、人生生活の辞書とでも言ったらよいでしょうか、「これにより解決できない問題は

ない」と教わりました。

研修生の研修行事の一環であった聖典の輪読の時間、先生は愛深い笑顔でご指導くださり、終わりしなにご披露くださったピアノの演奏や研修生も交えた聖歌の合唱は今でも鮮明に覚えております。

先日（平成十九年五月三日）行われた第五十九回青年会全国大会では、縁あつて副総裁先生ご夫妻の前で体験談の発表もさせていただきましたが、それはまさに榎本先生への一番の恩返しとして、感謝の気持ちを形に表すことができました。自分の発表の間に感じていた、何ともいえない温かさには、全世界から結集した皆様のご愛念もありましたが、霊界の先生のご愛念でもあつたのだと今更ながら気づかされました。先生が今生での使命を全うされ、お亡くなりになったとき、直接お別れのご挨拶はできなかつたのですが、神想観をすると、神を通して先生とお話をしている感じに浸り、いつもと変わらぬ太陽のような温かい笑顔の先生、そして幽斎殿でお祈りくださる先生のお姿が、目に浮かんで参りました。

これからは、先生にご指導いただいた通り神意を第一とする青年となるべく日々精進してまいります。常住不変の神の子の実相を拝み、おこがましくも、少しでも先生に近づければと思います。

先生と出会う機会を与えてくださった神様に、そして何より、未だ途切れることのない先生のご愛念に心より感謝し、私の今生での使命を果たさんがために祈りに徹し、人類光明化運動、国際平和信仰運動に邁進して参ります。

再拝

